







# 創立六十周年記念誌



## 沿 革

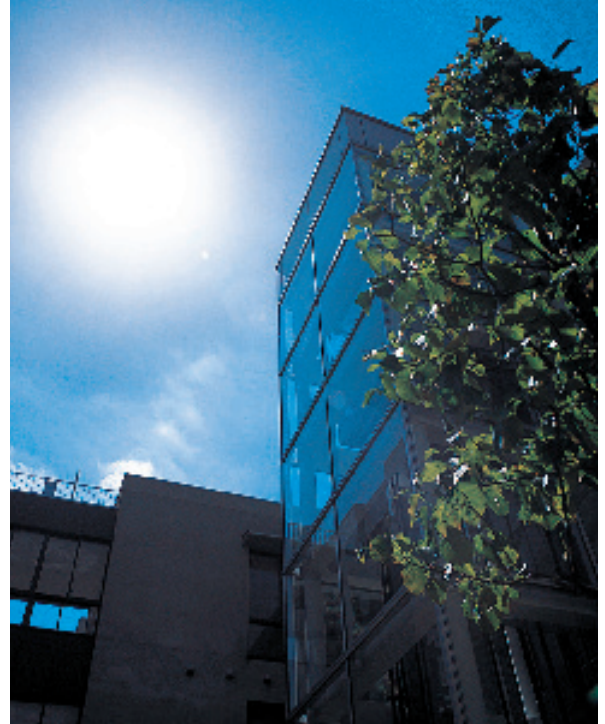
- 1926年 (T15) 4. 東京高等音楽学院創立  
6. 23 仮校舎にて開校式を行う  
住所：東京都四谷区番町35→現在の新宿区新宿5-7辺りに該当  
11. 国立本校舎落成 住所：東京府北多摩郡谷保村谷保拜島道8845
- 1947年 (S22) 6. 10 校名を「国立音楽学校」に変更
- 1948年 (S23) 5. 14 財団法人として認可
- 1949年 (S24) 4. 同年の1月18日に認可を受け、国立音楽高等学校 及び、国立中学校設置  
有馬大五郎 校長に就任  
大学のいくつかの教室と、桐朋高校の武道場（北多摩郡谷保村谷保7660）を借受け授業開始  
中学・高校とも定員は一学年40名（1クラスのみ）
- 1950年 (S25) 2. 20 大学設置認可を受け「国立音楽大学」となる  
6. 国立幼稚園設置 同年の7月31日に認可  
園舎は北多摩郡谷保村国立中区222（現在地）  
小林宗作 園長に就任  
9. 楽器研究所設置 音楽高校の調律科の実習室も兼ねる  
住所：北多摩郡国分寺町平兵衛新田（現在の国分寺市光町1-39辺りに該当）
- 1951年 (S26) 2. 24 財団法人から学校法人へ法人組織を変更し「学校法人 国立音楽大学」となる  
4. 町制施行により「国立町」となる 新住所：東京都北多摩郡国立町西区287
- 1952年 (S27) 4. **中学校が大学内に仮移転**
- 1953年 (S28) 4. 附属小学校設置 同年の5月31日に認可 大学の教室にて授業開始  
有馬大五郎 校長に就任  
6. 東京都多摩地区音楽教育大会開催。有馬大五郎 講演「音楽教育の私見」の他、附属小学校・中学校児童・生徒による合唱とリトミックを行う。  
9. 附属小学校南校舎(新校舎)落成 住所：北多摩郡国立町国立169
- 1954年 (S29) 9. 附属小学校北校舎(新校舎)落成 南校舎から移転し、附属中学校が南校舎へ移転
- 1955年 (S30) 10. 国立校舎5号館竣工（主にレッスン室として使用）  
12. 1 音楽高校20校による全国音楽高等学校協議会（全音高協）が設立され、永年理事校となる
- 1958年 (S33) 4. 国立校舎（大学本館、現在の2号館）改築第一期工事竣工 1960年 (S.35)完成  
鉄筋コンクリート3階建  
5. 富士見台校舎竣工 附属高校が桐朋学園武道場から、附属中学が小学校の南校舎から移転  
住所：国立町大字谷保飯屋5493-5536（現在の国立市富士見台2-1-1）  
5. **中学校が文部省の昭和33年度中等教育実験学校となる。期間は1ヵ年で翌年7月に研究発表会開催**
- 1961年 (S36) 楽器研究所移転 中高地内に新築し移り、調律の教室も兼ねる
- 1963年 (S38) 4. 別科調律専修学生募集を始める  
4. **音楽高等学校に普通科を設置 同年の2月14日に認可**  
中高校舎の南側に新校舎を増築
- 1964年 (S39) 全国音楽高等学校協議会（全音高協）第1回全国大会
- 1966年 (S41) 4. 12 大学が上水台校舎で授業開始 住所：立川市砂川2710（現在地）
- 1967年 (S42) 4. 附属小学校新校舎竣工、移転 住所：国立市西1-15-12
- 1969年 (S44) 12. 5 全国音楽高等学校協議会（全音高協）全国大会を本校で開催（～12. 6）
- 1973年 (S48) 事務全般を国立校舎中心から上水台校舎へ移す

- 1975年 (S50) 4. 学校法人国立音楽大学寄付行為変更により、法人本部が国立市西2-12-19から立川市柏町5-5-1へ移動
4. 附属各校・園名の統一(変更)  
国立音楽大学附属音楽高等学校  
国立音楽大学附属中学校  
国立音楽大学附属小学校  
国立音楽大学附属幼稚園
5. 有馬大五郎 学長に就任 大学院委員長と附属各校・園長兼任
- 1977年 (S52) 8. 附属中学校・音楽高等学校新校舎(現在の1号館)竣工  
富士見台校舎から大学の国立キャンパスへ
- 1978年 (S53) 3. 16 大学位置変更 国立市西2-12-19から立川市柏町5-5-1へ  
これにより、法人、大学とも所在地が立川になり、従来使用の「国立校舎」「上水台校舎」の名称は廃止
4. 24 附属中学校・音楽高等学校位置変更 国立市富士見台2-1-1から国立市西2-12-19へ
- 1979年 (S54) 4. 海老澤敏 学長に就任 大学院委員長、附属各校・園長兼任
- 1982年 (S57) 9. 附属幼稚園、改築のため翌年7月まで一時移転 仮園舎を附属小学校内に建設
- 1983年 (S58) 4. 全国音楽高等学校協議会(全音高協)理事長校となる(～1988年)
8. 附属幼稚園新園舎竣工、移転 9月から保育開始
- 1989年 (H元) 5. 矢島只實 附属小学校長代行に就任
- 1991年 (H3) 4. 学園通則施工・公布により学長が兼任していた附属各校・園長に専任者を置く  
附属中学校・音楽高等学校長：望月雄二  
附属小学校長：矢島只實  
附属幼稚園長：大場里子
- 1995年 (H7) 4. 岸根保夫 附属中学校・音楽高等学校長に就任
- 1996年 (H8) 3. 22 第1回 高校合唱部定期演奏会(於 三鷹市芸術文化センター中ホール)
4. 6 オーストリア リンツ州立音楽高等学校との交流演奏会(於 国立音楽大学講堂)
11. 15 全国音楽高等学校協議会(全音高協)全国大会を本校で開催(～11.16)
- 1997年 (H9) 4. 岡部徳三 附属中学校・音楽高等学校長に就任
11. 第1回 秋の演奏会(於 音楽の森コンサートフロア)
- 1999年 (H11) 3. 附属中学校卒業式を附属音楽高等学校卒業式と分離して行う  
これに伴い、2003年(H15年)3月より中学卒業作品の創作合唱は卒業演奏会で披露されることになる
4. 附属中学校・音楽高等学校創立50周年
- 2001年 (H13) 11. 附属中学校合唱部 NHK全国学校音楽コンクール全国大会金賞受賞
- 2003年 (H15) 附属中学校・音楽高等学校新校舎(3号館)落成
- 2004年 (H16) 4. 国立音楽大学附属中学校・高等学校と校名改称  
附属高等学校の普通科がカリキュラム改変に伴い共学となる
- 2005年 (H17) 附属高等学校で2、3年生徒に対し特待生制度ができる
10. 1 第1回 招待演奏会(於 一橋大学兼松講堂)
11. 5 第1回 ソロ・アンサンブル定期演奏会(於 トップアンホール)
- 2006年 (H18) 11. 17 全国音楽高等学校協議会(全音高協)全国大会を本校で開催(～11.18)
- 2007年 (H19) 4. 撰梅正人 附属中学校・高等学校長に就任  
附属高校音楽科にて中学生対象の土曜講座「KUNIONへの道」始まる
- 2008年 (H20) 4. 全国音楽高等学校協議会(全音高協)理事長校となる
- 2009年 (H21) 附属中学校・高等学校創立60周年



3号館生徒ホール

エレベーター棟



空から見る学校周辺



春



夏



冬



秋



校庭から見る校舎



富士見台校舎

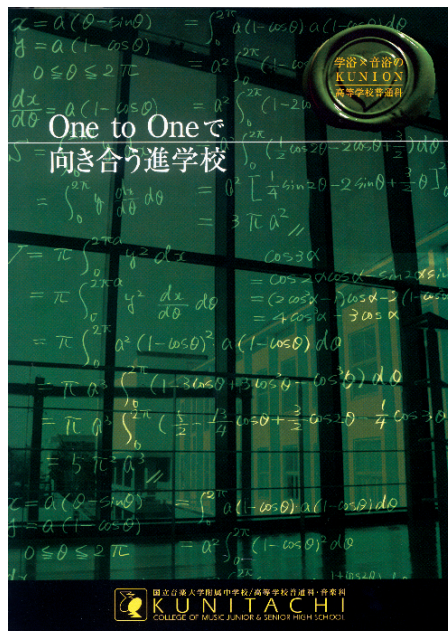




1964年 国立音楽大学要覧



2010年 リーフレット(学校案内)  
左から 中学 普通科 音楽科





1970年 芸術祭プログラム

2009年 芸術祭プログラム



1996年 交流演奏会



# 学校法人国立音楽大学附属中学校・ 高等学校の創立六十周年に寄せて

理事長

宮 地 忠 明



学校法人国立音楽大学は、「知性を磨き、感性を豊かにし、精神の自由を保障する教育」を実現するために大正15（1926）年に設立されました。本年創立60周年を迎えた国立音楽大学附属中学校・高等学校においても、この建学の理念を踏まえた教育が行われてきました。設立当初の校名は国立（音楽）中学校・国立音楽高等学校ですが、我が国初めて音楽を柱として普通教育を行う学校であることが表れています。往時、第二次世界大戦の敗戦で混乱した日本社会は、民主社会の確立を目指して様々な改革が進められていました。教育でも、昭和23（1948）年に施行された新制の学校教育制度は、教育基本法の基に、中学、高校の整備を急いでいた時でした。理事長（当時）で初代校長の有馬大五郎先生をはじめとする先生方は1948年12月から文部省（現文部科学省）や東京都へ設立の交渉に奔走され、一年後、開校にこぎつけられました。当時の世相から考えますとそのご努力に感服するばかりです。恐らく、音楽文化を担う若人の育成によって、混濁した社会に生きる人々の心を癒し、日本社会の再建への方途にする強い思いがあったのでしょう。

以来、普通教科・科目とともに音楽専門科目とレッスンやリトミックを取り入れた特色ある教育が本校の伝統となっています。このことから、音楽を梃子に、社会で有為な「音楽の演奏家、音楽教育者、音楽の心をもつ社会人」として卒業生が輩出され、音中・音高の名を世に知らしめています。この名を負う生徒の皆さんは、これからも、音楽の技能の向上はもとより、その基盤となる広い教養と知性を身に付けるとともに「音楽は心である。」との金言を噛み締めて日々の修養に努めていただきたいと思います。

これまで本校の教育活動にご支援を賜りました保護者や同窓会の皆様、並びに関係機関の各位に厚くお礼を申し上げます。さらに今後のご鞭撻をよろしくお願いいたします。

# 創立六十周年新たな創造に向けて

校長

撰 梅 正 人



現・国立音楽大学附属中学校・高等学校は、60周年を迎えました。

昭和24（1949）年4月、前身の国立中学校、国立音楽高等学校は、現在の桐朋高等学校の武道場を借り受け、男女共学校として開校しました。昭和33（1958）年には、新たに校地を富士見台2-1-1の地に求めて移転しました。

昭和38（1963）年には、戦後の第一次ベビーブーム期世代が高等学校に入学することに呼応し、高等学校に普通科を併設しました。この際、女子のみに入学を許可したのは、文教地区の国立に私立の普通科の女子校を作<sup>くにたち</sup>って欲しい、との要望に応えるためでした。

昭和50（1975）年には、校名を国立音楽大学附属中学校・音楽高等学校に変更、昭和52（1977）年8月には、大学の移転に伴い、校舎を栄えある法人発祥の地である現在の校地、校舎（現2号館）に移転しました。この移転には、賛否両論があったようですが、11月には、新校舎（現1号館）も完成し、翌年4月には新入生を迎えました。

平成15（2003）年には、現3号館が完成、翌16年には、普通科の改編（男女共学等）に併せて校名を国立音楽大学附属高等学校に変更しました。

60年とは、人の歩みでいえば還暦にあたります。それ以降、人生では厄年もなくなり、かつて程でないとしても余生のように捉えられる面もあります。しかし、学校はそのようなわけにはいきません。再生、創生、新生・・・いずれの文言を使うにしても、なお生き生きと存続しなければなりません。それが、社会公器としての使命でもありましょう。

この60周年を迎えるにあたって、あらためまして本校に係わられたすべての方々に感謝申し上げますとともに、新たな歴史の創造に向けて教職員、生徒ともども、全力を傾注しますことをお誓い申し上げます。今後ともお力添えを切にお願いいたします。

# 創立60周年お目出とうございます

元学園長・校長

**海老澤 敏**



私たちが〈音高〉、そして〈音中〉と呼び慣れていた国立音楽大学附属音楽高等学校と中学校が開校60周年を迎えたと聞いて、今さらながら今昔の感に浸っています。

私は1979年（昭和54年）に前任者で初代の学長（兼大学院委員長、附属幼稚園長、附属小学校・中学校・音楽高等学校各校長）有馬大五郎先生の後任として、国立音楽大学の教育面での責任者となり、1991年3月まで統轄をゆだねられました。それまでもっばら大学と大学院の教育研究上の運営に専念していた私にとって、なんと幼児教育から義務教育課程、そして大学に引き継がれる基礎教育最終段階の高等学校のすべての課程の責任者のポストはまこと過大なものではありましたが、他方、まことに刺戟的でもあり、毎週ほとんど必ずおこなった附属校めぐり（毎月曜日の小学校朝礼がその筆頭でした）や運動会、遠足、海の学校、山登り、さらには高校の修学旅行、そして定例の職員会議、果ては忘年会など、幼児、児童、生徒、学生、そして教職員の皆様との日常的な触れ合いを含めて、その後の私の活動に多大の影響や刺戟を与えて貰えたことは、今、思い起こしても素晴らしい人生体験でありました。

とりわけ後期高齢者の年齢に達していながら今なお続けられている音楽活動、そして社会活動の中で、しばしば訪れる卒業生の皆様との再会は私にとって貴重な機会であり、いつもそうした新たな出会いに懐しさと心安らぐ思いに捉われております。

また先生方との時折の遭会も、私にとって大きな喜びであり、こうした人間関係のありうべきかたちが、今後も御校とその卒業生の皆様の誇るべき特徴でありつづけるよう、心から祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

Viva! 音高!

# 国立音楽大学附属中学校 国立音楽大学附属高等学校 創立 60周年に寄せて

P T A 会 長

山 本 太 一 朗



国立音楽大学附属中学校、国立音楽大学附属高等学校、創立60周年おめでとうございます。

P T A を代表して、心よりお祝い申し上げます。

この度、その歩みを綴った記念誌が発行されますことは、本校の歴史と伝統、また将来への指針を知るうえで誠に意義深いものと感じております。

本校が1949年、有馬大五郎初代校長の下、わずか40人の生徒と仮校舎から始まり、戦後の新しい日本に「音楽を探究することにより心身とも豊かな人材を育成する情操教育」を教育理念に推し進め、60年の伝統を築きあげられたことは、卒業した多くの諸先輩方の活躍ぶりを見れば自ずと計り知ることができますし、P T A 会長として、また娘を通わせる親として尊敬と賞賛の気持ちでいっぱいです。

しかしながらその道は決して平坦ではなかったと伺っております。幾多の苦難を乗り越えて今日を迎えた背景には、創立以来支えてこられた学校関係者、先生、生徒、保護者、そして地域の敬愛と努力なしには考えられなかったことでしょう。時代がどんなに変わろうとも人間が人間であるためには「情操」は欠かすことができません。その教育を未来永劫継承し、更に多くの逸材が輩出されますことを願って止みません

私たちP T A も、学校と家庭が信頼しあい、生徒の健全な育成が更に図られますよう、なお一層環境の充実に努めてまいりたいと思っております。

どうぞ今後ともご指導ならびにご協力下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。

結びに、本記念誌発行にあたりご寄稿賜りました各位様、編集にご尽力されました校長先生はじめ関係者各位にご慰労と深い感謝を申し上げ、ご挨拶の言葉に代えさせていただきます。



# 目 次

あいさつ 理事長 宮地 忠明	1
あいさつ 校長 撰梅 正人	2
祝 辞 元学園長 海老沢 敏	3
祝 辞 PTA会長 山本太一郎	4

## 創立から富士見台校舎時代

国立音楽高等学校・国立音楽中学校の設立	9
「千人の交響曲」～日本初演の演奏者～	11
調律科の歴史	11
創立10年頃の中学・高等学校 ～1960年国立音楽大学要覧より～	14
音高の日々を追憶して（望月先生へのインタビュー）	16
「普通科 事始め」～インタビューから～	20
回想	25
玉置眞吉先生	26
六十周年に思う	27
野村茂先生の思い出	28
寮の歴史・寮での生活	30
偶然にたどり着いた場所へ、そして、そこから ～音高と寮と、私との偶然～	33

## 校地移転

ボケの記憶	43
中学校の卒業式分離について	45
卒業演奏会の分離	45
最後の合唱部	46
リンツ音楽高等学校との交流	47
新普通科、発足	49
3号館ができるまで	52

## 新時代

創立60周年に寄せて「音高と私」	55
校名変更	57
招待演奏会	57
ソロ・アンサンブル定期演奏会	60



音楽科・普通科同窓会の統一について	62
国立理論ソルフェージュ教育の未来	62
全音高協と音高	64
音楽科プラスバンド部の対外活動	65
ストリート・コンサート ～高校合唱部校外活動から～	65
合唱部の海外公演	66
講座 “KUNIONへの道”	69
新しい生徒証 ～紙製からICカードへ～	69
図書館 この20年	70

## 資料編

データでみる学校	73
地図でみる学校	74
生徒数一覧	76
生徒数推移	77
調律専攻生徒数一覧	77
寮（寄宿舎）の生徒数の変遷	78
寮費の変遷	79
音楽科担任一覧	80
中学校担任一覧	85
普通科担任一覧	88
くにたち音楽会の記録	91
旅行の記録	92

創立から  
富士見台校舎時代

# 国立音楽高等学校・ 国立音楽中学校の設立

## 始まり

1948年(S. 23)12月10日に国立音楽高等学校設立申請書、同年12月15日に国立音楽中学校設立申請書が提出され、翌年1月18日に認可された。

それから1949年(S. 24)4月の開校のために3ヵ月間の短い準備期間があり、新入生徒募集用の中学校・高校の入学案内パンフレットが作られた。戦後の学制改革によって旧制と新制が混在していた時期に全学年の生徒を募集したため、受験資格が多様であることは興味を引く。一方、全国紙にも広く告知するため、また遠隔地からの入学者を見込んで、新聞広告が出された。この機会に全文を改めてここに掲載し、建学精神などを振り返る。

新聞広告は1949年(S. 24)2月11日に掲載されたものである。

## 国立音楽高等学校 入学案内

### 1. 教育目的

本校は高等普通教育と共に音楽の専門教育を施し将来音楽文化に貢献すべき人物を養成するのを目的とする

### 2. 募集人員 (修業年限3ヶ年)

第一学年 四十名  
第二学年 若干名  
第三学年 若干名

### 3. 専修科目

次の専修科目の中の一科目を選んで専修する

- イ. 作曲
- ロ. 声楽
- ハ. ピアノ
- ニ. 絃楽(ヴァイオリン・チェロ・コントラバス)
- ホ. 管楽(フルート・オーボエ・クラリネット・ファゴット・トロンペット・ホルン・トロンボーン)
- ヘ. 打楽
- ト. 調律(調律技術者養成)

### 4. 受験資格

第一学年  
新制中学校卒業者または之と同等以上の学力

あるもの

### 第二学年

新制高等学校第一学年修了者または之と同等以上の学力ある者

### 第三学年

新制高等学校第二学年修了者または之と同等以上の学力ある者

### 5. 入学試験科目程度

#### 第一学年

- イ. 中学校内申書による学力考査
- ロ. 音楽適性考査  
(既修楽曲あるものは準備のこと)

#### 第二学年

#### 第三学年

- イ. 新制高等学校または旧制中等学校内申書による学力考査
- ロ. 音楽適性考査(既修楽曲準備のこと)  
作文・面接・身体検査(各学年共通)

### 6. 入学願書受付期日

三月十八日～三月十九日

### 7. 入学試験日程

三月十八日・三月十九日

### 8. 出願手続

出願者は

- 1. 願書
- 2. 新制中学校内申書(二年以上の出願者は新制高等学校または旧制中等学校)
- 3. 写真(単身脱帽)
- 4. 受験料(八〇〇圓)を取まとめ受付期日まで  
に差出し受験票を受取ること

### 9. 入学許可

合格者で成績発表後三日以内に左の手続きを履行したものは入学を許可する

- 1. 入学金 一〇〇〇圓 納入
- 2. 授業料 前納 (年額)
- 3. 戸籍抄本 (三ヶ月以内作製のもの)  
入学式まで
- 4. 誓約書

### 10. 授業料 年額 九六〇〇圓

## 国立(音楽)中学校 入学案内

### 1. 教育目的

本校は義務教育としての中等普通教育並に音楽の基礎教育を施すのを目的とする

◎普通中学校教科課程中の職業、自由研究等の時間を専ら音楽関係の授業に当て、音楽の基礎教育の万全を期す

### 2. 募集人員(修業年限三ヶ年)

第一学年 四十名 第二学年以上各四十名

### 3. 受験資格

第一学年 小学校の課程を卒業したもの

第二学年 新制中学校第一学年修了者

第三学年 新制中学校第二学年修了者

### 4. 入学試験科目程度

イ. 内申書による学力考査

ロ. 音楽適性検査

及び、作文、面接、身体検査

### 5. 入学願書受付期日

三月一日～三月十三日

### 6. 入学試験日程

三月十五日・三月十六日

### 7. 出願手続

出願者は

1. 願書

2. 小学校内申書

(二年以上の出願者は新制中学校)

3. 写真(单身脱帽)

4. 受験料(五〇〇圓)を取まとめ受付期日までに差出し受験票を受取ること

### 8. 入学許可

合格者で成績発表後三日以内に左の手続きを履行したものは入学を許可する

1. 入学金 五〇〇圓 納入

2. 授業料 前納 (年額)

3. 戸籍抄本 (三ヶ月以内作製のもの) 入学式まで

4. 誓約書

### 9. 授業料 年額 八四〇〇圓

(和田多美子)

1949年2月11日 新聞広告

設立申請書冒頭

## 「千人の交響曲」 ～日本初演の演奏者～

1949年(S. 24)12月8、9日の両日、日比谷公会堂で行われた、第312回日本交響楽団(現・NHK交響楽団)定期演奏会において、G. マーラー作曲「千人の交響曲」が日本初演された。この演奏会に、音中生・音高生が合唱で参加している。この様子は当時ニュースで放送され、その後、テレビ番組20世紀の名演奏第8夜「日本の巨匠たち」(NHK 2000年(H. 12)8月13日放送)にも取り上げられ放送された。それには、大規模編成のオーケストラ、独唱者など舞台の上に演奏者が入りきらず、合唱団が客席二階前方に位置して歌う様子が映し出されている。この演奏会は、当初予定されていた指揮者の尾高尚忠氏が病気のため延期したものの回復が見込まれず、開催が危ぶまれていた。代

役を山田和男氏が引き受けたため、11月12、14日公演予定を上記日程に延期して行われた。

校内での指導には、小笠原みち子先生があたられたそうである。

第312回 日本交響楽団定期演奏会

於：日比谷公会堂

山田和男(のちに 一雄)指揮

日本交響楽団(現・NHK交響楽団)

G. マーラー作曲 交響曲第8番「千人の交響曲」

石田栞(Sop)、荒牧規子(Sop)、柴田喜代子(Sop)、

川崎静子(Alt)、佐々木成子(Alt)、

藺田誠一(Ten)、中山梯一(Bar)、秋元清一(Bs)、

東京放送合唱団、国立音楽学校合唱団、

国立音楽高等学校合唱団、国立中学校合唱団

(和田多美子)

## 調律科の歴史

調律科は、国立音楽高校創立当時から調律を専門に学ぶためのコースとして設立された。その歴史概略などをまとめる。

### 調律技術者養成 前史(昭和24年以前)

日本における調律技術者は、ピアノ修理工場の職人たちによる徒弟制の中にあり、見習いつつ習得するものであった。また、原理的な分野については当人の努力に期するところとされており、体系づけられた教育ではなかった。結果、養成には3～5年はかかり、一人前になると期待された頃に時悪しく戦時下となる不運。戦後、学校教育で調律技術者養成をという考えを持たれた中谷孝男先生と、助言者であったL. クロイツァー先生によって、調律科構想が出来上がった。

### 始まり

1949年(S. 24)4月 国立音楽高等学校・中学校の新設に際し、高校音楽科に調律専攻を置くことになった。

創設当時の入学案内によれば、「本科はピアノの調律、修理、製作の理論と実習、及び音楽理論、

ソルフェージュ、合唱、リトミック、ピアノ演奏等の音楽教育を施し、それに高校の一般普通学科を併せて、将来有能な調律師、楽器製作者となるべき人物を養成するのを目的としている。」ということである。また、成績優秀でさらに高度な研究を志すものは、選考の上、国立音楽大学楽器研究所で勉強させる、とある。

同じく、選修科については、「調律選修科はピアノの調律、修理、製作の理論と実修を課し、併せて音楽理論一般と、ピアノ演奏をも修得させ、知識と実技及び音楽に理解ある有能なピアノ技術者となるべきものを養成するのを目的とする。すでに調律師として地方にあるもので、さらに広く深く研究し、その技術を高めようとするものにも好適な施設である。」とうたっており、入学資格としては、新制高校卒業または、それと同等以上の学力有りとする者、となっていた。

このころの事情として、旧制中学校4・5年生と新制高校生の共存に関する苦心の跡がある。旧制中学4・5年生は、高校1・2年に編入学または中途編入した(3年生への編入は募集しなかった)が、調律課程に関しては高校普通課程の他に3年間の調律課程が必須とされていたため、普通課程を終えた後に調律課程のために高校に残り、勉強を続けなければならなかった。このような学制の制度

変更による特殊事情は、1952年(S. 27)まで続いた。

なお、出版物や印刷物に「調律科併設」、という記述が散見されるが、高校設置申請関係の書類によれば、あくまでも高校「音楽科」としての設置申請であり、併設という表現は適さない。また、1952年に専攻科の名称が現れるが、これについては専攻科設置に関わる裏付けが見つからない。表記上専攻科ではあったが、実のところ選修科ではなかったかと推察される。

## 授業

創立当時から音楽科・中学ともに土曜日は休校日であったが、調律専攻だけは土曜日も登校して調律実技などを勉強した。基本的には月曜日～金曜日は他の音楽科生徒と同じ授業を受け、平日放課後と土曜日を調律の勉強に充てていた。平日放課後については、できる限り楽器研究所に来てるように、という指導で、そこで授業が行われたわけではない。選修生や研修生の仕事ぶりを見ていることが大切、ということだったようだ。

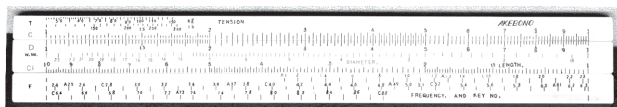
専攻科目の授業内容は、知識と理解、製図と設計、調律実技の合計15単位、副科ピアノ1単位であった。ピアノ演奏のみならず、合唱やオーケストラの授業を通して「たくさんの音色を思い浮かべられるように」なることが求められていた。つまり、調律技術の習得ばかりではなく、実際にピアノ製作を学ぶことで修理技術者としての勉強をするなど、ピアノに関する工学一切を学ぶ課程であり、また音楽科目も演奏を専攻する生徒と同じ内容を勉強した。生徒たちは、随分忙しい学校生活だったと推察される。

教科書は創設時から、「ピアノの構造・調律・修理」福島琢郎著(1950年、音楽之友社刊)、「ピアノ構成論」S. ウォルフエンデン著、中谷孝男訳(1935年、非売品)、「ピアノ・オルガンの解説」中谷孝男著(1947年、河出書房刊)、後に、「ピアノ調律と関連技術」ウィリアム・ブレイド・ホワイト著、全国ピアノ技術者協会訳(1954年、音楽之友社刊)が出版され、中心的に用いられていたようである。

教材として、「ピアノの構造と知識；附オルガンの構造」中谷孝男著(1926年、共益商社書店刊)、「ピアノの構造と知識」中谷孝男著(1961年、音楽之友社刊)、「ピアノの技術と歴史」中谷孝男著

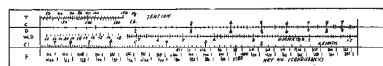
(1965年、音楽之友社刊)があり、掛図や修理待ちのピアノが用意されていた。後には高木義彌先生考案の「ピアノ計算尺」が使用された。コンピュータ実用化にはほど遠い当時、有用な教材であり道具であったということである。別科調律専修においては、ピアノ計算尺最新版が現在も使用されている。

生徒は各自、調律工具としてチューニングハンマー、ゴムウェッジ、フェルトミュートを所持することが義務付けられた。当時の金額で約1万円と、高価なものであった。



ピアノ弦計算尺について

国立楽器技術研究会 考案者 会員 高木 義 弥



ピアノ弦計算尺について

ピアノ弦の計算式としては  $T = \frac{(F \cdot L \cdot D)^2}{18600} \dots \dots \dots [1]$   $T = \frac{(F \cdot L \cdot D)^2}{20000} \dots \dots \dots [2]$  が従来から知られている。

但し  $T$  = 張力 lb、 $F$  = 振動数 (ms)、 $D$  = 直径 cm、 $L$  = 弦長 cm、18600 又は 20000 は弾力係数

但し式 [1] は鋼線、式 [2] は鉄線の場合、この計算尺は計算尺を操作して短縮すれば便利であるが、一音毎に異なる四つの数値をその目盛の上に読取るのは容易ではない。あらかじめ計算尺にそれ等の数値を目盛つておけばその計算に際して非常に有利である。そこで上記の式を次の様に目盛りピアノ弦計算尺として弦の計算に使用するものである。

ピアノ用としての特長は目盛りの、総動数をキ一番号として目盛つた F 尺と、弦の直径を常用数で平方根除した数値とワイヤ一番号、又は巻線の外径として目盛つた W 尺 (赤目盛左側) と Dia 尺 (白目) である。

その他、弦径尺と張力尺は普通対数尺の採用である。以下順を追って説明すると、

ピアノ弦計算尺の C/D 尺は普通対数目盛り (log1-10) であるからその逆目盛 C1 尺と組合せて一般計算尺と同様に乗除計算に使用すると共にピアノ用としては C1 尺を逆目盛、C/D 尺を常用数に用いるのである。

F 尺はピアノの88音の振動数 (A<sub>1</sub>: 27.5 ~ C<sub>88</sub>: 4186 f.s.) を C1 尺に読み、キ一番号として三段に目盛つたもので、上段 1-23 の振動数は 110 の単位であり、中段 24-83 は 100 の単位、下段 84-88 は 1000 の単位であるから「カーソル」を F 尺のキ一番号に合せれば C1 尺にその振動数の概数を読める。なおキ一番号の目盛りは半音の数 log1-050 の間隔で読み、オクターブの間隔は log2 である。

清沢中央の赤く刻まれた目盛りは弦の太さを表わし、左方 W、No. 尺の 13-23 の数字は  $\sqrt{18600}$  の数値を逆目盛、C1 尺に読みワイヤ一番号として記入したものであり中間の刻みは非表示、右方 Diameter 尺はこれも C1 尺に  $\sqrt{20000}$  の数値を読み巻線の外径として 1.4-7.5mm を刻みである。従って W、No. 尺は鋼線、Dia 尺は鋼線の太さとして使用する。

T 尺は張力 lb と kg と表わし下段 lb 尺は C1 尺の自由目盛 (普通計算尺の A 尺と同じ) で 100-300 迄目盛り、上段 kg 尺は lb に対する kg の値を 45-130 迄目盛である。従って張力は lb と kg との両方で見ることが出来る。

130 の目盛りを刻んである計算尺が普通の計算尺ではないは、調律の場合は  $T = (W \cdot NO) \cdot F \cdot L \cdot D$ 、鋼線の場合は  $T = (Dia \cdot F \cdot L \cdot D)^2$  を操作すればよいことになり、そこで F、L、D、T の四三数値が解つてくるか、又は別のどれいば他の一つの数値が求められる訳で、普通考えられるのは次の三つの場合であらう。

1. 振動数もキ一番号と長さ、直径 (又は巻線) が判っていて、その張力を求める。(張力計算)

2. キ一番号と長さ、張力 (張力) 又は巻線 (又は巻線) を求める場合。(巻線計算)

3. キ一番号と直径 (又は巻線) 及び張力で長さ求める場合。(長さ計算)

である。以下各々の計算を T 計算、D 計算、L 計算と呼ぶことにする。以上三つの場合の計算の他振動数を求める計算 (F 計算) も勿論出来る。次に順を追って使用法を説明すると、

### T 計算 (張力計算)

例えば C40 L=65 #18 の場合その張力 T は、  $T = (27.5 \cdot 65 \cdot 18)^2 / 18600 = 1000$  である。注:  $\square$  は目盛りを合せる印、 $\dots$  はカーソルを置く位置、 $\times$  は答の位置、1. 両カーソルの動かし方を示す F 尺の C40 と Dia 尺 (C1 尺) の 65 を合せてカーソルを巻線の直径 (D.R. 1) 又は C1 尺の 18 に合せる。

上: ピアノ計算尺 下: 説明書

## 生徒の進路

調律技術者養成が高校から大学別科調律専修へと移行する間に、複数の養成コースがあったことがわかっているが、「調律科」の一言で代表されている。実際は次のようになっており、経験や年齢で選択することが可能だった。高校生は卒業すると大半が選修科に進んだり、1963年以降は別科調律専修に進んだ。また、卒業後すぐにピアノ調律師として就職する者もいた。

国立音楽高等学校音楽科調律専攻(1949年~1970年3月)

国立音楽高等学校調律専攻科(1949年~1953年3月)

国立音楽高等学校調律選修科(1953年~1961年4月)

国立音楽大学別科調律専修\*二年制カリキュラム(1963年～)  
楽器研究所研修生(1949年～1962年4月)

国立音楽大学では、調律技術者養成が1970年以降、国立音楽大学別科調律専修\*二年制カリキュラムに一本化された。

## 楽器研究所

1950年(S. 25)9月、国分寺市平兵衛新田(現在の国分寺市光町1-39付近)に研究所開設。所長・西村武先生の指導の下、実習関係授業はここで行われた。

楽器研究所はピアノ修理・再生・組立販売・国立音楽大学所有ピアノの整備等を行い、独立採算性で運営されていた。またここは、高校調律専攻生の実習室を兼ねており、前述の通り高校生は土曜日が実習日になっていた。その後、1961年(S. 36)富士見台校舎内に移転。高校調律専攻最後の卒業生までを送り出した。調律専攻の生徒たちは、年齢や技量の異なる選修生、研修生などと共に3年間勉強を続けたのである。

1952年(S. 27)から、調律関係生徒・学生等が共同で、ピアノ製作の実習を行っている。実習完成品は小型のネームが入らないものであったが、後にピアノ普及の目的で販売されるようになってからは、ネームが入るようになり「Kunitachi」(最初期5台くらい)から、「Conservatory」になる。第1号のピアノが完成した折には、高校で大学学長も出席してお披露目の演奏が行われたと記録されている。



鉄骨フレーム部の刻印

このピアノの特徴はアップライト・ピアノで、鍵盤が85鍵、一音3本弦のところを2本にし、内部は弦が交差しないスタイルだった。この小型ピアノは、当時よく売れたと伝えられており、国立市内においてはロージナ茶房に置かれていたこと

もある。これらは、後のアトラス・ピアノの前身である。

ピアノ製作が軌道に載る以前は、材料が十分に揃わなかったらしく、国立音楽大学校庭(現・中学高校敷地)の松の木を切ったり、桶屋で風呂用の檜を分けてもらったと伝えられている。これらのピアノのうち、「Conservatory」が楽器技術センターに保存されている。



現存する「Conservatory」

楽器研究所は立川市の大学校地に移転し、現在はその名称を「楽器技術センター」(1976年～)に改めている。

## 教員構成

創設時以来の教員は次の通り。

1949年(S. 24)	中谷孝男 西村武
	後期より、高木義彌(高校講師)
1956年	竹井学而(高校調律係)
1958年	竹井学而 野村周史(高校助手、楽器係)
	樽林寿仁 松本新一(高校助手)
1962年	竹井学而 野村周史 樽林寿(高校講師)
1963年	郡司すみ 矢追泰正(高校講師)
1965年	松本新一(高校講師)
1966年	神島昭幸 吉田偉佐男(高校講師)

## 資料

附属高校調律科卒業生についてH. 5調査資料(1993年)  
国立・楽器技術研究会報1979年No. 23 調律科30周年記念号1949年～1978年(1979年)  
美音求心 国立音楽大学別科調律専修五十年の歩み(2001年3月)  
譜 時の調べにのせて70 国立音楽大学の70年(1996年)  
国立音楽大学附属音楽高等学校四十周年記念誌(1988年)  
(和田 多美子)

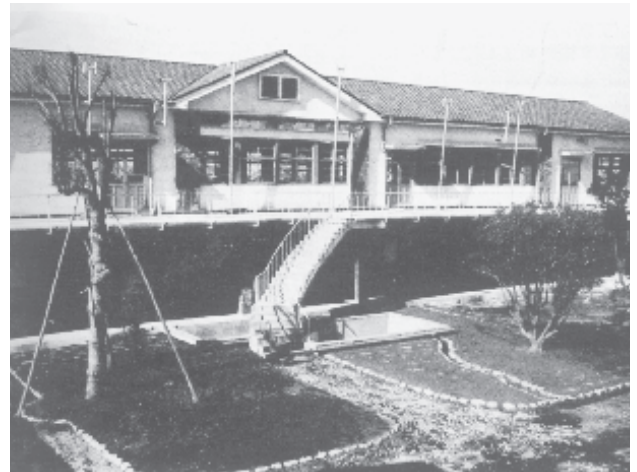
## 創立10年頃の中学・高等学校 ～1960年国立音楽大学要覧より～

創立から10年、学校の創設者の一人として本校教育の中核を担っていらっしやった、附属部長野村茂先生の言葉をここに再録し、当時の中学・高校の様子を読み解く。

### 音楽高等学校・中学校について

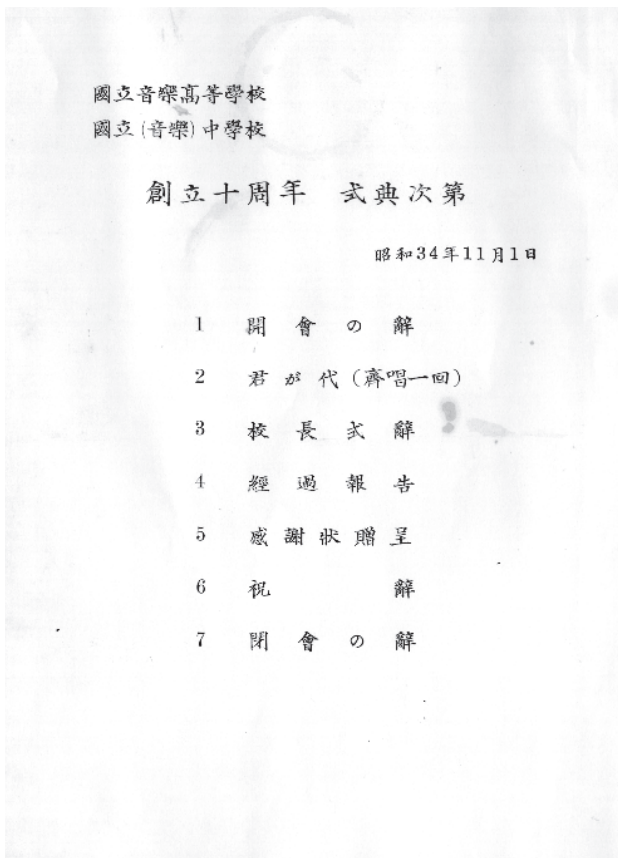
野村 茂

昭和二十四年、大学に先んじて中学、高校が創立されたのは、音楽学習の基礎になるべき一切を、中学時代に学ばせて、感覚的、知的、芸術的に音楽の骨の髄から体得させたいが為である。ここでは音楽を中心とした幅広い人間教育を考えている。演奏技術のみ詰めこまれたいわゆる天才少年を作ることには興味をもたない。だから技術といっても、音楽あつての技術、広い人間性の基盤の上の音楽のための技術を考えての教育を心がけている

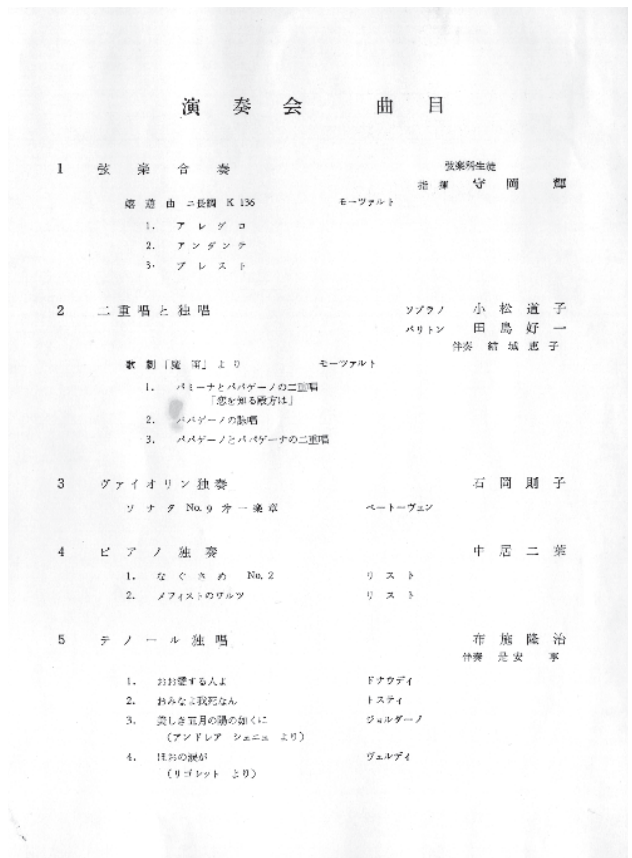


中学高校兼用講堂

のである。生徒には音楽開花への十分な肥料がほどこされる。豊かな日光と栄養をたくわえて、将来の立派な結実が約束されている。芳潤な音楽的雰囲気の中で生徒は自由に呼吸し、極めて自然に音楽的養分を吸収し、苦勞なしに才能が延ばされてゆく。つまりここでは詰込み教育は排撃される。学習意欲がおのずから湧き出て、興味と自覚とをもって勉学に体当たりしてゆく学習態度が生れるように教師は心をくばっている。



10周年記念式典 式次第



10周年記念演奏会



## 国立音楽高等学校

### 教育 目的

本校は音楽専修の個人授業と、音楽理論、音楽史、ソルフェージュ、合唱、合奏、リトミック等の基本的音楽教育を施し、それに高等学校の一般普通科目（国語・社会・理科・数学・体育及び外国語 —英語—）を併せて、音楽と教養の両面から、個性のよき伸長をはかり、将来音楽文化に役立つ人物を養成することを目的とする。



高校 器楽合奏



高校 ソルフェージュ



中学校 合唱

## 国立（音楽）中学校

本学最高指導者である故クロイツァー教授は「日本の音楽家の技術は近来長足の進歩をとげ、優れたものも少なくないが、真に音楽を理解する処のものは稀である。その原因はわが国の音楽基礎教育がしっかりしていないからである」と言われたがうなづける。

本校は中学義務教育の中に、音楽の基礎を配し、豊かな音楽的環境のうちに楽しく、自然に、音楽を身につけ情操豊かで、円満な人間の形成を目的とするものである。

## 音高の日々を追憶して (望月先生へのインタビュー)

望月 雄二 先生  
(元音楽科教員 元校長 社会科・英語科)

1959年(S.34)	国立音楽大学附属音楽高等学校音楽科の専任教諭になる。
1981年(S.56)	附属中学校・音楽高等学校の主事になる。
1991年(H.3)	それまでは大学の学長が校長も兼任していたが、最初の中学校・音楽高等学校の校長になる。
1995年(H.7)	退職する。

一望月先生は、長年この学校に勤められ、主事・校長としても活躍された先生ですので、是非お話をお伺いしたいと思って、お越し頂きました。今日は宜しくお願いします。

まず、先生がこの学校にお勤めになるきっかけは何でしたか？

望月 私は大学生のころ国立の一橋の寮に住んでいました。駅前の、ちょうど今の三井住友銀行の位置にエピキュールという喫茶店があって、その喫茶店に時々コーヒーを飲みに行っていました。そこに元理事長の中館先生（国立音楽大学の創設者の一人）がほとんど毎晩のようにいらしていました。都内で仕事を終えて夜一服という感じで、あの先生も煙草をよく吸われましたし、コーヒーを飲み。そこで中館先生と知り合いました。私は当時大学を卒業して、修士課程2年を終えたところだったのですが、普通の会社に就職する気持ちがなくて、1年だけ都内の国際技術協力協会という5、6人しか居ないような所に勤めていました。が、やっぱり教職がいいなと思っていました。というのは、高校を出てすぐに2年間清水市の小学校に勤めていたんです。その後大学に行ったのですが、教職は好きだったんです。

一高校卒業の段階で、もう学校に勤められたのですか？

望月 友だちのお父さんが清水市の教育長をやっていたものですから、小学校に働き口があるということを知り、入れてもらいました。ちょうど戦中、戦後の混乱期で、男性の多くが召集されたため、教員免許がなくても、例えば神主などが臨時



望月雄二先生

免許で先生になっていました。その制度も昭和25年(1950年)に打ち切りになりました、私の年を最後に。教員になって2年してこのままじゃ教える力がないということがよくわかって、勉強しなければと思い、一橋大学に入りました。大学の修士課程が終えた時、気持ちがぶらぶらしているような落ち着かないような感じで、名前は厳めしいけれど国際技術協力協会というところに勤めました。そして最初の話に戻りますが、中館先生が国立音楽大学の附属の高校が教員を探していて、口があると紹介してくれたので、ではお願いしますということがきっかけです。

一エピキュールというのは年齢層を越えた方が集まっていたのですか？

望月 そうです。僕はまだ学生っぽい感じだったけれど、エピキュールにはいろいろな人が集まっていたよ。なんとなく国立では文化的なお店で、芸術家のような人たちがエピキュールには集まっていた。一橋の先生が学生を連れてゼミの帰りかなんかに寄ってコーヒーを飲んでいたりもしていました。

一先生はその時、音高をご存じだったんですか？

望月 名前は知っていたけれど、行ったことはなかったです。この辺は舗装されていなかったから、立川に歩いて行くときには（大学の前を）通っているはずだけど、あんまり記憶はないですね。あるいは建物を見たことはあるのかもしれないけれど、音高と聞いたときに、どこにどういう建物があるとかははっきりしませんでした。

一そのとき音高はどこにあったんですか？

望月 大学はここ（現在の中高）で、音高は桐朋の近くで今は住宅になっている所があったが、僕が勤める前の年に富士見台の所になった。

—その頃の音高の雰囲気というのは？

望月 富士見台の校舎に移って2年目で、僕が勤めた昭和34年(1959年)は1学年2クラスで、1クラス40人いて、ほとんど女子。男子は10人ぐらいいたかな。みんな大人っぽいような雰囲気でした。

僕の教えていた小学校はごく普通の学校で、金持ちの家もあれば、貧乏の家もあり、みんな同じような服を着て質素な感じだったから、それと比べれば派手な学校だなあと考えたけれど、派手だからといって授業の面ではそんなにどうこうということにはなかったですね。むしろまだ考え方として当時は、生徒は先生の言うことを聴かなければいかんとか、授業中は私語を慎むという雰囲気だったんでしょう。

—その当時、先生は何を教えていらしたんですか？英語ですか？

望月 いや社会を。土橋先生(1958年～1960年在職)がおやめになってから英語を教えるようになって。勤めて3年ぐらいしてからかな。英語と社会科の2つの免許状を持っていたから。一橋(大学)は選び方によって2つ取れたので。

—では、学校行事ではどんなものがありましたか？

望月 運動会は最初はなかったですね。音楽会、くにたち音楽会は杉並(公会堂)でやっていました。芸術祭はあったけど、内容は忘れてしまいました。いろんな準備とか、こうしちゃいけないという面倒は見なければいけないけれど、具体的にどういう割り振りで、ということは生徒同士で決めていたように思います。先生がそれを調整するということはなかったと思います。

—旅行はどうでしたか？

望月 野村先生(主事)は旅行が好きだったから、こんなに旅行していいのかなと思うくらい、よくしていました。

大体春と秋に1泊旅行があって、3年生は修学旅行が秋にあるので1泊はなかったと思うけれど。

電車で行って向こうでバスということはよくありましたね。湯西川温泉(栃木県)という所に行って、埃だらけの道を延々通って、こんな田舎によく来たもんだと思いました。野村先生はこっちが知らないような所によく連れて行ってくれました。

それから、夏休みが始まってすぐ、全学年の希望者でバス2台ぐらいで2、3泊の旅行をしました。7月の20日頃はまだ梅雨が明けてなくて、

新潟の方で4日間雨が降り通しということもありました。磐梯山にも登ったし、五色沼にも。

—旅行の計画は野村先生を中心に？

望月 そうですね。野村先生が考えて、新村さん(日本観光企画の前社長)と。先生たちの中で関わったとすれば、山岸先生です。生徒の部屋割りは山岸先生と私がやっていました。それも旅行に行く前に決めないで、列車の中で決めて。最初のころ行程に山岸先生がどのくらい関わっていたかはわからないけれど、後の方になれば山岸先生が中心になっていました。

—他にどんな先生方がいらしたのですか？

望月 (昭和38年に)4クラスになったから増やさなければということで岸根先生や小澤先生がいらした。同じ年に普通科もできて。

ベビーブームで私学協会からも東京都からも、たくさん生徒を増やすようにとお達しが来て、そのための助成金も出ました。普通科の建物を建てる時もそういう優遇措置があって、中館先生も一生懸命でした。

—では、音高の歴史の中でも大きな出来事の一つだった。富士見台の校舎から現在の校舎に移る頃のお話をお願いします。

望月 大学は砂川(玉川上水)に移っていて、大学の跡地(現在の中高の敷地)に中高をということでした。校舎を建てるにはお金がいる。そのお金はどっちかの土地(富士見台か大学の跡地)を売って工面するということになり、その場合に大学を創設した土地なんだからこっちを残すという意識は働くでしょう。

富士見台の方は昭和33年から始まった場所なので、大学の跡地の方がずっと伝統があるから、中館先生(当時の理事長)にはそこを売るということは考えられなかったかもしれません。おそらく地形としては富士見台の方が真四角ですから、売やすいということもあったかもしれないです。

理事会とは3回ぐらい話し合ったかな。中館先生も最初はいらっしゃいました。新理事会になって海老澤先生とか小山先生とか、そういう方々と話し合いました。

新理事会も中館先生の意向を無視して検討することはできなかったと思います。結局私たちもいろいろ反対はしましたが、反対しても最終的にどうすることもできないわけですから、せいぜい移転作業についてそれに協力しない、一

切関知しないということでは抵抗できませんでした。

移転反対が賢いやり方だったかどうかいろいろ意見があると思いますが、私たちは富士見台の方を残してほしいと思いました。大学の跡地になじみはなかったし、その敷地の方が使い勝手がいいとも思えなかったし、どっちがいいかと言われれば、やっぱり将来的に富士見台の方がいいと思っていました。

けれど、中館先生が考えられたことは中館先生の考えたとおりに進むという認識が私たちにもありましたから、中館先生が考え直さなければ、これは絶対に無理だなということはある時点で覚悟していました。民主的にお互いに話し合い、多数の中高の教員が富士見台の方を主張しているから、その意見を取り入れて理事会が判断を変えるということは難しいと思いました。学校の移転は理事会と教職員が話し合うべきことですが、理事会に決定権がある問題です。

—移られてきて、何か変わったなあと感じられたことはありましたか？

望月 いったん新校舎で授業を始めたならば、移転そのものについてどうだこうだということはあまり言わなかったと思いますよ。一種の敗北感というものは何らかの形であったと思いますけれど。生徒に言ってもしょうがないし、気分を一新して授業をやるのみと考え、新しい校舎をどう使うかに移っていったと思います。

旧校舎の音楽科の教室は非常に不備な点が多かったですね。木造モルタルですから授業がやり良かったわけではありません。真ん中に廊下があって左右に教室があり、あっちでやっている授業がこっちにも聞こえるという感じで。レッスン室も音が左右筒抜けと言われていました。古い卒業生にはとても懐かしい思い出の校舎ですが。

—では、校長時代のご苦労話がありますか？

望月 苦労話がないことはないけれど。苦労したと言えば、この学校は中学、音楽科、普通科と3つに分かれていること、その3つの調整というものは必ずしも上手くいくとは限らないということですね。それでも皆さんがかなり協力して譲り合っていてやってくれていましたから、最終的にどうしようもないということにはなかったけれど、その間にちょっと調整が必要だというのは苦労といえば苦労かもしれないですね。

以前は大学の学長が全部兼ねていました、有馬先生のときから海老澤先生のときも。そういうシステムも良いような悪いような、なんですよ。もっと早くからそれぞれに校長をおいたほうが後々スムーズだったと思います。一人でやっていたら、大学のこともやらなくてはならないし、小学校のこともやらなければならない。大学のことを考えると、必ず小学校はこうだとそういう関連が出てきてしまいます。一般論として一人で調整しようとすると、物事が逆に動かなくなってくるような気がします。

—時代の移り変わりを感じることはありましたか？

望月 この学校としてではなく、社会一般として、徐々に、いつ変わったとも言えないけれど、大きく変わりましたね。簡単に言えば、先生が教え、生徒が勉強するというシステム。システムはそうだけれど、中身は変わってきていると思います。

生徒の質というか気風が変わっていくなあと感じたのは、勤めて20年か、もう50歳に近くなってからですよ。もっと世の中では変わってきたのかもしれないけれど、この学校での変化というのはちょっと遅めにきていたようですね。私が主事になった頃(1980年代)には社会全体の価値観が変わってきていたと思いますね。

—そうですね。確かに生徒の気質も変わってきています。与えられればやるけど、自分から進んで絶対に大学に行くぞという生徒が減ってきました。何となく流されて、行く場所がなくなっちゃったからピアノ科にしようかしらとか。落ちることが怖いみたいで、精神的に弱くなっちゃったなあと。生徒の話や話を聞くと、望月先生がいらした頃と比較すれば、練習時間も激減していて、昔だったらとてもピアノ科には入れないというくらいです。少子化とともに甘やかされ、世の中が豊かになった分、心が貧しくなったかなと思います。

—では先生、音高の良さってなんだと思いますか？

望月 難しいな。昔と今と変わっているんだかどうかわからないけど、そう変わっているようにも見えないし、やっぱりなんていうか公立学校のような雰囲気ではなくて仕事の内容もそうだけれど、私立としての独自の考え方で運営していけるということは非常にいいところですよ。それは国立の良さというより私学の良さを言っているんですけど。そういう中で国立は音楽というものがかなり中心になっているわけで、それが独特の気風を



生み出していると思います。人は変わっているのだけれど、変わらないようなある雰囲気というか気風というものが続いているなあと感じますね。皆さんとお話ししていても、20年前、30年前におしゃべりしていたのと変わっていないような感じがするしね。そういう雰囲気、空気というものがこの学校に残っているんだと思うんですね。それは必ずしも古い気風が残っているとか、停滞しているとかという意味ではなくて、新しい時代の様々な要請に従って、この学校でも皆さんものすごく苦勞されていると思うけれど、私たちのように以前に勤めた人間も感ずるような雰囲気というものが先生方にもあると思うし、それから卒業生がこの学校にきたときに、おそらく同じように、「ああ音高だ」と音高の空気を感じずるようなものが残っていると思います。これがその学校の歴史だと思えます。新しくなっていくんだけど歴史がある。だから案外、早稲田というのは蛮カラだとか、慶応というのは何とかと言われるのはあたっていいのかも。今は早稲田もすっかり変わっているけど、やっぱりなんかそういう気風というものがあると思います。音高も良い意味でそういう気風というものが、人は変わっていくけれど、自ずから受け継がれていくんだなあというように思えます。そういうものは停滞を招くとか、以前に戻ってしまうというのではなくて、それも新しく前進していく一つの力になっているんだと思えます。

学校が何もかも変わっていくのは、あんまり感心しません。小泉さんの民営化もこの頃ケチを付けられているけれど、変えるところは変えなければいけないけれど、おそらくその学校の空気、雰囲気はどうしても変わらないで残っていくと思います。だから全面的に同じにしなくても良いと思

うんですよ。お手本みたいな学校があったり、お手本みたいな会社があったり、お手本みたいな官庁があったりするけれど、そういうのをそっくりまねするのではなくて、この学校ではこうしたらいい、ちょっと古いところを残すとか、ちょっと変わらないところを残すとかの方がスムーズに行くのかもしれない。

大方が一つにまとまっていれば良くて、実際にはどんなにまとめようとしても、そうではないのがどうしても出てくるから、その辺を逆に生かせば良い。遊びの部分というか、きちっと固定するのではなく周りに余裕のあるような、幅のあるような枠の方が、結局は同じ枠でも強いと思うけれど。隙間があるような判断の方が安定性があるような気がしますね。

—奥行きのあるお言葉を頂いて……。

最後に、在校生に何かメッセージをお願いします。望月 ごく平凡だけれど、若いうちにせいぜい勉強してください。自分の選んだ道、興味のあるものを広く深く勉強してください。

—今日は長時間にわたって、どうもありがとうございました。

(インタビューを終えて)

望月先生はいま版画とデザインを勉強していらして、月曜日は隔週、火曜日は毎週習いに行き、土曜日は月2回ぐらい府中美術館でボランティアをやっているそうである。所属している会の展覧会が5月と10月にあり、11月には年賀状の版画の講習会の指導、3月には会の総会などがあり、退職後もご自分の興味のあることを勉強し続けて、生き生きと過ごしていらっしゃる。この活力が若さの秘訣であるようだ。3時間あまりに及ぶインタビューであったので、紙面の都合上割愛した部分もだいぶあったが、この学校での日々を懐かしく想い、この学校の発展を願うお気持ちが言葉の端々に感じられた。

(敬称一部省略)

2009年3月4日午後1時30分～4時30分頃

音楽準備室にて

聞き手 秋場・根本・村田

(村田 ひろみ)

## 「普通科 事始め」 ～インタビューから～

### ○話し手

桐村 亘子 1964年(S. 39)～2001年(H. 13)普通科に勤務。教科は数学。37年間、普通科史上最も長い勤務年数。明るい人柄で常に周りを和ませて下さった。山口弁の独特なトーンがあたたかい。女性の先生方の間に序列意識というものが一切無かったのも「キリさん」の人柄ゆえとのことだった。

佐藤恵美子 1966年(S. 41)～2000年(H. 12)普通科に勤務。教科は体育。普通科の体育の歴史その物。常に澁刺とし、退職する間際まで生徒と一緒に校庭を走っておられた。校務の合間の人生の哀歓の話題は同僚はもちろん、生徒たちにも魅力だったらしい。今回の集まりでもこのメンバーをまとめて下さった。

釜田 初音 1966年(S. 41)～1982年(S. 57)普通科に勤務。教科は国語。桐村・佐藤先生と同世代で、産休も3人が代わる代わるだったとのこと。どんな場合も冷静に判断を下せて、日常でもことばを選んで話していらしたそう。退職後は歌人として歌集を出されているが、先生の中では、ごく自然のことだったのだろう。

上原富美恵 1970年(S. 45)～2002年(H. 14)普通科に勤務。教科は英語。普通科の1回生にして、新卒で普通科に教員として勤務。つまり普通科に不在だったのは大学生時代の四年間だけという、堂々の生えぬきで、生徒たちにとって憧れであり、また誇りでもあったとのこと。常に普通科のバックボーンを体現して下さった。

### ○聞き手 秋場健志・甲田直弘・村田ひろみ

いずれも長く普通科に勤務経験を持つ教員。

### ○時と場所 2009年2月19日「粥や」(国立市中1丁目)にて。

「粥や」さんは、普通科21回生の土方恵美子さんが女将をされている国立の人々には馴染みの和食のお店である。以下は、この日夕食をいただきながら、4人の先生方に話していただいたことを文章にしたものである。

(文中、敬称を略した箇所がある。)

### 〈音楽科の隣に〉

すでにあった音楽科に併設する形で、あとから普通科が設置され、何もなかったところからの出発だったようだ。校舎も音楽科の校舎と別に新しく建てられた。「なにせ入学してすぐ、講堂から机と椅

子を自分たちで運んだのよ。」(上原)ということである。

それだけに特に1回生というのは、独特の雰囲気を持っていたらしい。まず上には誰もいない、最初の1年間は下にもいない。音楽科が4クラス

なのに対し、普通科は2クラス。花形は音楽科であって、新参の普通科の生徒は「あの子たち普通科よ」という声を独特のニュアンスで聞き取っていたようだ。自然、普通科は普通科で独自のものを持ち、音楽科に張り合わなければならないという様子に包まれたらしい。普通科・音楽科にそれぞれ生徒会があったが、1回生は1年生ながら林富美恵さん(すなわち上原先生)が生徒会長をつとめ、当時そのお兄さんである林紀人さん(国立音楽大学器楽科クラリネット専攻卒業、東京交響楽団を経て、現在も指揮などに活躍中)が音楽科の生徒会長であり、兄妹だった「のに」、また兄妹だったから「こそ」強い対抗意識を持っていたという。そしてそれは当時の普通科生徒の共通の意識だったようである。

#### 〈普通科発足〉

普通科発足も当初は順調とは言い難い状況だったらしい。4クラスの予定で募集したものの、宣伝が行き届かず、1回生は80人弱のみの入学、2クラスとなった。実際、生徒たちはしばらくの間(4~5年か)「普通科はなくなるらしい」という噂を耳にし、口に合ったらしい。「ベビーブームに乗じて東京都からの補助金を目当てに作ったものうまいかないのだ」という、もっともらしい意見も語られたようだ。

そんな中だからこそ、普通科の教員は中学校を訪問して普通科の存在をアピールして回った。桐村・佐藤・釜田の若い3先生も先輩の先生と2人で組み、中学校訪問をしたという。萱嶋泉先生(1963~1977在職)と一緒に訪問した思い出を佐藤先生は「萱嶋先生ときたら、『生徒も素晴らしいし、先生がまた素晴らしいんです』と大風呂敷を広げるもんだから、こっちが恥ずかしくなった」と話している。大風呂敷かどうかは別として、当時の普通科の置かれた状況と先生方の熱心さが伝わるエピソードである。

また外部に対して普通科のメリットを語るたびに、国立音大への内部推薦制度もあるということも重要なアピールになったようだ。「普通科」として募集を開始したものの、実際入学してきた生徒たちの多くは音大志望だった。そのため当初の



先生方が大学と交渉した結果、教育音楽学科と二部の学科のみという制限ではあったが、内部推薦制度が1回生から適用されるようになった。こうして本校の普通科は「音楽の色彩の強い普通科」という最大ともいえる特徴を備えることになったのである。

#### 〈初期の職員室〉

最初期の普通科の先生方の様子も語っていただいた。現在ほど系統だった組織ではなかったようで、まず高校のことは部長として野村茂先生がトップの位置にあって、切り盛りしていたという。芸術が好きで、写真が好き(道祖神などを撮影していた)で、規則は嫌いといった方で、後輩の教員にも「生徒に還元できることを身につけてほしい」と、自由な勉強を勧め、また教員らを連れ、いろいろなところへ連れて行っていったそうだ。

しかしそれは主に音楽科の話で、普通科教員は細かく手をかけてもらった記憶はないという。事務室も音楽科の棟にあり、普通科の生徒は、さらに教員でさえ行きにくかったらしい。始まりでは副部長の熊井甚太郎先生(1963~1964在職)が普通科のトップだったが、体調の不良により、萱嶋先生がその任を受け、以後長らく普通科の長の立場となった。桐村先生が当時の卒業アルバムをお持ち下さり、聞き手の我々も見せてもらった。教員の集合写真には、本当にお若い桐村・佐藤・釜田先生や、それよりは年輩とはいえ、やはり若い男の先生方が写っていた。その当時を佐藤先生はこう振り返る。「私が就職したときは普通科には9人の専任の先生がいたが、さまざまなプランを立てるのは南條先生で、萱嶋先生がそれを承認す



るような感じだった。」

南條忠男先生(1963～1989在職)は普通科発足当初からのメンバーで、その頃まだ20才代後半の若さだった。先生を知る人は「先生らしい先生」と口をそろえるような、真面目で一生懸命な仕事ぶりの方で、普通科の始まりにあたって「理想の学校作り」にとりわけ熱心に取り組みました。それ以来、1989年(H. 元)に惜しまれながら病で逝去されるまで普通科の中心であり続け、ご自分でも普通科というものをおそらく「我が子」のように育て愛してこられたに違いない方である。ゼロから始まる普通科は、萱嶋・南條先生などの方々が1つ1つ手作りで積み上げていったものと言える。

### 〈普通科 初期の風景〉

普通科ができた年の中高は、大学通り沿いの、国立駅よりはずっと谷保駅に近い位置、現在の東京都多摩障害者スポーツセンターとNTT国立社宅を合わせた地である。校舎は中学、高校音楽科、普通科とそれぞれ別棟であり、現在地に移転するまで使用された。普通科のそれは勿論新品である。

「教室は広かったわねえ。ピアノも置けたし、なにせみんなの傘が教室の後ろに干せたんだから。」(上原)

「体育館は無いのよ。校舎の外のコンクリートにマットを敷いて体操をしたんだけど、道路から見える位置で、スコート姿の女子高生が前転するのを通行人が見ていたのを覚えている。スコートのひらひらするのがあんまり目立つものだから私がブルマーに替えたのよ。」(佐藤)

今も中高にはプールはないが、体育館も無かったと知り、聞き手の3人は目を丸くした。当時の

本校は、現在の標準とは違う(当時の標準とも違う?)ちぐはぐした面を持っていたようである。

寮はすでにあったが、普通科の生徒で寮に入れたのは1回生のみで、2回生以降は自分で下宿を探さねばならなかったようだ。やはりそもそもは音楽科の学校であり、普通科はあとから付設したということの現れの1つなのかもしれない。

多くの面で、音楽科に対して独自のアイデンティティを持ちきれずにいた普通科の生徒たちだったが、数年のうちにある傾向が見えるようになったという。すなわち下馬評に言う「音楽科は音楽ができる、でも普通科は勉強ができる」という認識の定着である。

1つの傾向は、国立音大へ進学した卒業生に対する評価である。結局、前述の通り1回生から音大の教育音楽科などへの推薦制度が設けられたのだが、1学年に何人もの普通科出身者が難関である東京都の教員採用試験に合格するようになったのである。またもう1つは、普通科を受験する生徒がぐんぐん増えていったことである。これも一般入試以外に推薦入試などのある現在とは違う、定員80人の、純粹に一発勝負の試験である。「受験生が多い年なんかは200人以上の年もあって、採点が夜中までかかったこともあったわねえ。」(釜田)「翌日の午前までかかったこともあって授業ができなくて、大学の先生が全学年を相手に合唱の授業でつないだこともあった。」(上原)

こうした受験生があふれるような状態は数年続いたということである。これらにより次第に普通科生徒の学業面での質、あるいは人材としての質が高くなっていったようである。

これがそのまま普通科に対しての良い評価に繋がっていったのである。

### 〈修学旅行〉

「高校時代の思い出」というと、多くの生徒が修学旅行をあげるのは今も昔も変わりのない所である。飛行機もある、新幹線も走るようになったとはいえ、今よりもかかる時間は長大だった。一昼夜かけての船による移動もあったそうだ。4人の先生方からも、懐かしさとともに思い出が芽づる式に出てきたようである。以下のような話を聞



くことができた。

方面は、1回生を始め九州が多かったようだ。しかし唯一のコースが毎年繰り返されたわけではなく、2回生などは沖縄まで飛んでいる。「萱島先生は外国に行きたかったらしいが、理事会の許可が下りなかったんでしょう。せめてパスポートが必要な沖縄へ、ということになったらしい。」(佐藤)(…当時の沖縄県はいまだ米軍の統治下だった。本土復帰は1972年(S. 47)のことである。)

普通科において旅行にける情熱は並ではなかったらしい。旅行に関しても「萱島先生と南條先生と新村さんの3人で、入念に下調べをして、下見もしっかりして、どこで何をするか、どうやったら生徒は感動するか、練りに練っていた。」(上原)

新村さんとは当時、普通科の旅行を専ら担当していた旅行者「日本観光企画」の社長である。ここにも生徒たち、そして普通科というコースを手塩にかけて育てているという様子がひしひしと伝わってくるようである。

「旅行の間中、先生と生徒たちは友達のようにしゃべり続けたものよ。」(釜田)「必ず歌を歌うのよ。滝廉太郎が幼少期を過ごした岡城跡で『荒城の月』を歌ったわね。南條先生が歌が好きだったのよ。」(桐村)「旅行のためにクラスでオリジナルのバッジを作った学年もあった。」(上原)

九州を旅行する際は、いつもバスは宮崎交通を使ったようである。宮崎は当時は新婚旅行のメッカであり、そこのバスガイドは花形で、地元でもいい就職先だったそうだ。そこの優秀なガイドさんたちも、生徒たちの旅行を良いものにするのに大きな役割を果たした。生徒とうち解けて下さる方も多く、こちらからあらかじめガイドさんを指



1974年6月 修学旅行

名したこともあったという。

### 〈多彩な行事〉

高校は勉強をするところ。そして本校普通科の生徒はおおむねよく勉強したらしい。しかしこの普通科はそれで満足せず、むしろ机を離れての活動によく力を注いだらしい。年に一度の芸術祭は、年間行事中でも最も大きなイベントである。

「各学年とも、演劇と模擬店は必ずすることになっていた。」(上原)「研究発表もよくやっていたわね。どんなっていうと、『高校生の生き方』とか『服装について』とか、アンケートをとったりして。」(釜田)「桐朋高校との交流会もあったわねえ。あちらのあるクラスとこちらとで。まあいいだろうということになって、私も桐朋へ引率したわね。」(桐村)今と違う時代の雰囲気があったのだろうと思うが、かなり真面目で、アカデミックな様子に聞き手も感心する。「後夜祭があつて、キャンプファイヤーとかやったわね。」(釜田)何か懐かしい香りのする光景である。

はじめはくにたち音楽会には出られなかったという。『出なかった』ではなく、『出られなかった』と表現するところに、当時の関係者の思いがにじむようである。それも「11回生くらいから合唱で出演するようになった」(上原)との話。その後長く続く「中普音」の3コースが参加するくにたち音楽会の形になっていった。

旅行・校外学習のたぐいは、修学旅行のみではなく、かなり多彩である。たとえば林間学校。1・2年生が参加し、夜に三つ峠から登り、夜中を山中にて過ごし、翌朝はご来光を拝む。その後、国立音大のセミナーハウスがある朝霧高原へ向かうという日程だった。

また3年間(1939~41年)だったとはいえ臨海学校も千葉県の岩井で行い、校外活動は活発だった。

「キョーホ大会があつたわ。」(上原) — 「競歩大会？」 — 違った。「強歩大会」と書くそうだ。その言葉の通り、せつせと歩いてあちこちの山に登ったそうだ。記録を調べると、1968「新入生歓迎強歩大会」をはじめ、1969、70、71と行われ、その年によって陣場山、今熊山、高尾山などにコー

スを設定し、順位も競う行事であったことがわかる。その他、多摩湖、五日市、三浦半島など行き先も色々、「遠足」「校外学習」「地学生物巡検」など名称も様々で、聞き手の側は、どれが何という行事で、それぞれの位置づけは何なのか、などだんだん区別がつかなくなってしまう。どうやら話している先生方も、その辺りは渾然一体となっ  
てきているようでもある。しかしそれら全体を聞いているうちに、当時の普通科教員スタッフが若く元気だったこともあるだろうが、その頃の先生方が単なる座学だけでは体得できない、もっと潤いのある人間教育を目指していたのだと感  
じることができる。

#### 〈普通科の記憶〉

食べるのも忘れるほどの約3時間のうちに、先生方からいろいろな思い出話が、眠りから覚めた

ように生き生きと湧き出し、聞き手の3人にも当時の風景が目浮かぶように伝わってきた。どれ1つをとっても興味深い話で、楽しく耳を傾けることができた。

普通科は2004年度(H. 16)の入学生からは、一般の4年生大学などを目指した進学重視のカリキュラムとなり、いふなればここに話していただいたのは「旧体制」または「第1期」の普通科の姿である。しかしそれは古く置き去られていくのではなく、まずは1つの輝かしい存在として私たちの心に残したい誇りであるし、さらには現在の「新体制」あるいは「第2期」の普通科の底流に今も流れ続けている財産であるということが  
できるだろう。

4人の先生方、ありがとうございました。

(秋場 健志)



左より佐藤 恵美子先生、桐村 亘子先生、釜田 初音先生、上原 富美恵先生

## 回 想

岸根 保夫

(元音楽科教員 元校長 国語科)

もう四十八年経ってしまいました。就任が決まったすぐあとに、はじめて音校<sup>註</sup>を訪れたのは、冬二月、雲ひとつない土曜日の午下りでした。招じ入れられたのは応接室、大きな卓の向いに、大柄な有馬大五郎校長と部長の野村茂先生がゆったりと座っておられました。

澄んだ静けさがはち切れんばかりに部屋いっぱいに張りつめていました。この日のことは、今も鮮明な記憶としてあります。古い言葉に面授というのがありますが、この時の有馬校長との面談はまさしくそれでした。

談はずんで、クラシック音楽にふれ、門外のあさはかな了見から、クラシック音楽になんとはなしの窮屈さ、格式ばった権威主義的なものを感じると口をすべらせてしまったのをひきとって、「楽なるは同じきをなし、礼なるは異なるをなす」の句をもって応じてくださいました。この句は《礼記》に由来しています。その一節のはじめに、「楽なる者は同じきを為し、礼なる者は異なるを為す。」(同じければ相い親しみ、異なれば則ち相い敬う。楽勝ぐれば則ち流れ、礼勝ぐれば則ち離る。)とあります。先生はこの句を説いて、音楽というものは、現代のものであろうが、クラシックであろうが、人々のところを和やかにし個々一人ひとりを調和させる力があるもので、人々の心情に素直にとどかなければ意味がない。一言でいえば民衆に支持されなければ終りだとして、一人の歌謡曲の女性の歌手の名をあげて、すばらしい音楽とされました。私は意外を感じ虚をつかれるおもいででした。また、人間は一人ひとりそれぞれ異なる。一人ひとりの個性を個性として認め尊重し互いに、いきいきと生きること。一人ひとり違うのだから画一化しないこととつづけたあと、そんなにしゃっちょこ張らなくていい、とそえられました。〈シャッコバル〉という音の調子が妙に耳にのこっています。

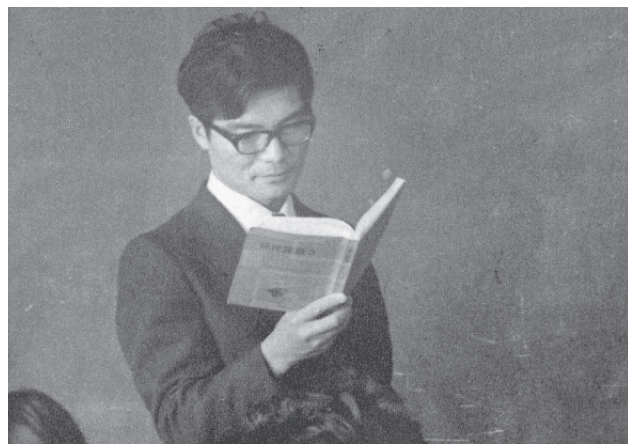
私は赤面しながらも、先生独自とも独特ともユニークともいえるこのような読みようもあるのか

と思ったものでした。

もう一つは自由についてでした。私は自由はさまざまな側面をもつ意味内容を考えておりましたので、答えるべきをさぐっていると、「自ずからにもとづくこと」と訓して、自が肝腎なんだと断定され、自由は自主を求める。音楽家であるまえに、自分自身にもとづくことのできる人間たることが求められる。教師も自主性をもってことにあたるべし。人間として生きるうえで必要なものの見方考え方を養う教育こそが大事だと、訥々とまた点々と話されました。

私はけむにまかれたような気がしないでもありませんでしたが、校則らしい校則もつくらず、生徒の主体性を大切にしようという善意と、音校の教育についての先生方の信条がこめられているにちがいないと受け取りました。そして私のなまはんかな先入観はとけ、音校は、いい意味でゆるいところのあるのびやかな学園にちがいないと感得したことでした。

ともあれ、この時の一つひとは、私の中に入って、以後はなれないものになりました。その意を生かすきれない自分を憾みつつも、教師としての三十年余りのスターティングポイントと自覚することしばしばでした。



1977年 卒業アルバムより

入学式には一年生担任としてのぞみました。そのとき新入の生徒たちもすでに還暦。初発の授業は三年生でした。古文だったか漢文だったか、小さめにうつった教室に、ぎっしりと五十あまりの机、その服の色とりどりに、芳紀まさに十八歳のまばゆい視線が集中してくるのを感じ、けおされて、おもわず天井を仰いで目を上げたのが遠い日

注：本校は音中・音高・音校・くにおん(国音)など様々に呼ばれている。

のほろにがい思い出としてあります。

私の音校教師としての人生は穏やかに経過しました。しあわせだったといえます。「人生は実に難し」と重厚なつづやきをする資格はありません。

ことは音校創立六十周年。学校変革の声かまびすしい世相のなかにあるのですが、創設に重いかかわりをもたれた野村先生が、久保田万太郎と同じ東京下町に育って、その嫡流として、しゃれた俳句を作っておられたなかから「不易流行」をとりあげ、それを、多くのことに共通する広い意味に生かして、折にふれて在校生たちにも言い、卒業アルバムのために揮毫されもして、深くこめられたその意が思いかえされます。

林にくる鳥とたわむれる今日の私のこととして、

久々に不易流行をひとりつづやいて、ずっと背筋を伸ばしました。

編者注：「不易流行」

蕉風俳諧の理念の一。新しみを求めて変化していく流行性が実は俳諧の不易の本質であり、不易と流行とは根元において結合すべきであるとするもの。(大辞林)

たまき しんきち  
**玉置 眞吉先生**  
(1885～1970)

1951年(S. 26)～1959年(S. 34)在職  
体育科(フォークダンス)

1951年(S. 26)、中学・高校の体育の授業にフォークダンスが教材として採用されたが、その時から、音中・音高の生徒達は日本に社交ダンスとフォークダンスを広めた功労者である玉置先生に指導を受けた。玉置先生は本校に体育教師として着任し、フォークダンスを教えていらっしゃるののである。先生は、オクラホマ・ミキサーのステップをわかりやすく改変して日本中に広めたことで知られている。



フォークダンス授業の様子

当時を知る人によれば、先生はいつも紺の背広にネクタイ姿で授業をされ、レコードや本がいっぱい詰まった大きな鞆をお持ちになり、子どもを教えるのは楽しい、おもしろいなどと語っておられたとのことである。

フォークダンスの時間は、当時の生徒達に人気の授業であったようで、石井真木(6回生、作曲家)は「にっぽんダンス物語」の中で、「フォークダンスの授業は楽しくて、男子生徒はフォークダンスのある日は学校を休まなかった」と語っている。女子生徒はフォークダンスを習ったことから、一橋大学の学生と交流会を持ったりしたようだという話も伝わっているが、当時の教員によれば「寮が高校と大学兼用だった時代もあることだし、大学生と混同しているのではないか」という話もある。

(「猪突人生」玉置眞吉喜寿記念出版、「フォーク・ダンス」玉置眞吉著 音楽之友社1954年刊、「にっぽんダンス物語」永井良和著 リプロポート1994年刊行) 全て中高図書館蔵

(和田多美子)

## 六十周年に思う

松尾 妙子  
(元中学校教員 国語科)

「昔は……だった」と言うとき、「昔」とはいつごろのことを指すのか、人によってその時期はさまざまですが、それを口にする人はそろそろ老境にさしかかっていると言えるでしょう。今年はどうとう六十周年を迎えてしまった初期の音中卒業生も、とっくに還暦を過ぎて、古稀前後となっているはずです。しかし、私の目には六十年前の風景の中の彼女ら、そして少数の彼らの姿は当時のままに色褪せることなく焼きついています。

創立当初は、中学校の生徒数はごく少なかったけれども、全学年一斉に開校し、国立音楽学校(国立音楽大学の前身、現中高所在地)の校舎の一部を教室としていました。この辺の事情は小笠原みち子先生が、音高同窓会編による四十周年記念誌に、唯一中学関係の歴史として詳しい記録と回想を寄せられています。音中から音高へと進んだ卒業生の楽しい思い出の記と併せて読むと、当時の姿がまざまざと甦ってきます。

私が二年目に赴任した時は、すでに大学通りの外れの桐朋学園の武道場を改装した校舎に移転していました。昔の僻地の分校もかくやという趣の建物でしたが、各学年1クラス1教室の体裁は整っていました。職員室に板壁1枚で隣接していたのが中1の教室で、ここが中学で一番広く、合唱などの合同授業はここで行われていました。居ながらにして聞こえる板壁の向こうの歌声は毎日の楽しみでもありました。聴音の授業では、先生がピアノでポンと和音をたたかれると、中1の生徒がすかさず一斉にドイツ音名で答える、われ先にと発するその声は得意な顔つきまで見えるようで、



1987年 卒業アルバムより

ついこちらの顔までほころぶほどでした。それは、地方の公立女学校で学び、ドレミ廃止でコールユーブンゲンやハニホで歌っていた戦中派の私にとっては、驚きというよりも今風に言うカルチャーショックでした。中学生になったばかりなのに本格的な音楽教育の環境にすんなりと馴染んでいき、みんな楽しんで、すばらしい才能でした。

そんな日常の音楽体験は、数々のオーケストラやプロの合唱団、著名なソリストとの共演、ラジオ放送出演など、中学生としては得がたい音楽活動へと進み、その指導の要にはいつも名コンビ、小笠原みち子、飯田和子両先生がおられました。そのころ育まれたコーラスのハーモニーは、高校、大学、卒業後社会人となっても続いているようです。そしてこの伝統は後輩にも受け継がれ、後に学校の自主的なコーラスのクラブ活動が、羽田喜久代先生というよき指導者を得て、遂に全国の頂点に達するという実績をあげるまでに発展したことは、音中初期の形とはまた違った成果で、とても嬉しく、感慨深いものがあります。60年の歳月は、規模の大きさとともに、学校の実質にも大きな変化と成長をもたらしたのでしょ。

創立当初、中学の専任教員は小笠原先生、飯田先生と私のたった3人でしたが、続いて英語の宮田先生、まもなく数学の木村先生、理科の塩見先生らが専任として着任されました。そこに、国高、桐朋、五商から講師を迎え、少数ながらユニークな陣営で机を並べていました。これら音中初期からの先生方も、退職後次々と他界され、更に近年、小笠原先生、飯田先生も相次いで鬼籍にはいられました。ひとり私のみ80歳を越えてなお馬齢を重ねています。率直で屈託のない昔の卒業生に会えば、「あーら、先生、まだ生きてらしたのー」と喜んでくれることでしょう。今では生徒は言うに及ばず、先生方や職員の方々も見知る人は少なくなりました。

中国、唐の詩人、賀知章は、若くして家を離れ、都に上って高い官職を歴任、年老いて故郷に帰ってきました。『回郷偶書』(郷に回<sup>かえ</sup>りて偶書<sup>たまたま</sup>す)という詩の中で歌っています。「兒童相見不相識、笑問客從何処」子供たちは私が誰だか分からず、笑いながら、お客さんはどこから来たのと訊ねるしまつ。

今どき、校門の辺りをうろうろしていたら、「おばあさんは誰？」と訊かれそうです。

永らえば、生けるしるしありでしょうか。

祝 六十周年！

## 野村茂先生の思い出

清水 利修

(国立楽器元店長 音7回生)

野村先生との思い出の多くは先生との旅でした。音高卒業後私は国立楽器に勤務していました。ある時写真クラブの仲間が写した石仏の写真を見てもらおうと「君、これどうしたんだ？」と先生。事情を話すと「こんど石仏、そう道祖神を撮りにいこうよ。」と誘われました。先生は民芸をかなり研究されており、道祖神にも大変興味があって、久しぶりに実物を見に行きたいとの事でした。当然先生はこれまでにいくつかの道祖神には対面されていましたが、私は初めての体験で興味津々でした。旅は先生の授業のない春休みや夏休みで、大体が二泊三日の旅でした。桜の頃新入学生の発表があると、早速翌日から出かけようかと先生からお誘いがきます。

道祖神は男女二人が彫られた石仏で、その村に嫁いでいく娘が子宝に恵まれるようにと、裕福な家では娘に持参させたとされています。もう一つは生産の神様として五穀豊穰を願った意味もあるようです。村の道が交差している所に他の石仏などと共によく見られます。ほのぼのとした男女



附属部長 野村茂先生

のその姿は、彫り方によって芸術品のような美しさがあります。道祖神は主に長野県、群馬県、神奈川県などに多く、中でも長野県の道祖神は石の質が良いので立派なものが多いようです。

先生は五万分の一の地図に石仏のある場所を印したものを用意されてきますが、初めての土地で車を運転する私が探し出すのは一苦勞。道路の拡張などで別の場所に移動されていることもあります。その頃はコンビニなどない田舎道で昼食をとる所も無く、牛乳一本で済ませ延々と探しまわることがよくありました。それだけにお目当ての道祖神を発見した時の嬉しさは格別です。

先生のもう一つの趣味に各地の陶芸品の蒐集がありました。その中の一つで丹波篠山の立杭焼への旅も懐かしい思い出です。立杭窯は京都から車で2時間程のところですが、（現在は高速道路で楽に行けるようになりました。）日本六大古窯の一つで、庶民が使う壺類が作られており、昔は地元の保存食などを入れていたようです。大きな物は一人一人が入れる大きさで、それは圧倒されます。

こんなことがありました。地元にくつつかある骨董店の一つに入ると、店には高さ50cm程の壺が50個位並べられています。先生は私に「君ほどの壺がいいかい？」と聞かれますが、初めての体験で判るはずもありません。「では、先生ならどれを選びますか？」と尋ねると、アレとコレかなと指差されましたが、これがまた一番汚いのを選んでいのではないかとさえ思えるようなものです。その時先生はご自分で値踏みされ、「9万円台なら買うが、それ以上なら買わないよ。」と耳打ちされました。店の人に値段を聞くと10万5千円との返事。先生は「そうですか。」とそれで終わり。勿論買いませんでした。

立杭焼へ行く前日には、京都三条で一見さんお断りの料亭に連れて行ってもらいました。先生のお酒はいつも決まっていたビール1本とお銚子3本。これから骨董店に行くが、飲み過ぎるとついいい気になって買ってしまうので気をつけなといけない、と言いながらお酒を楽しんでおられたものです。骨董店で先生は“小汚い”漆器類を見て店の主人と会話を弾ませておられましたが、私は骨董などはよく見たこともなく、どこが良いの

だろうと不思議な感情を抱いたものです。その日の宿は京都ホテル。翌朝は、天井の高い、それはそれは広いホールのような食堂での朝食で、慣れない私は妙に落ち着かなく食事をした覚えがあります。

昭和29年、そもそも私は普通高校から音高調律科に中途入学した為、入学直後の音楽の知識はまるでゼロ。そんな私に先生は個人レッスンさながらの授業をして下さいました。楽典の初歩やコールユーズンゲンなどの音楽の基礎を丁寧に解りやすく、しかも何故これを学ぶのかということも教えていただきました。そのうち、私は和声など出来ないなりに面白くなり、段々と音楽への興味が深まり、何とかクラスの授業についていけるようになったのです。

先生には音楽だけでなく、陶器や民芸を通して“侘び、寂び”の心、道祖神や民家の写真の撮り方、楽しみ方など芸術全般について、それは多くの事を教えていただきました。日本に於ける和声学の変遷や先生の作曲のご苦労なども話していただき、その多くの教えが私の貴重な財産となって脳に沈着し、知的生活の原動力になっていると感謝しています。

**野村 茂先生(1906~1972)**

元・附属部長

ソルフェージュ、作曲、合唱を担当

国立音楽大学附属音楽高等学校創設者の一人

略歴

東京高等音楽学院（現・国立音楽大学）で声楽を学ぶ。

1931年(S.6)、青山二郎氏(伝説的骨董蒐集家)と共に、朝鮮で工芸品蒐集にあたる。

1943年(S.17)、国立音楽学校（現・国立音楽大学）教師となる。

音高創設以来附属部長を務め、在職中の昭和47年11月1日に急逝。



道祖神（清水 利修氏蔵）

## 寮の歴史・寮での生活

### 寮の歴史

1949年（S. 24）の創立時、現在の本校の位置に大学があり、本校の校舎は大学通りにあった。1950年（S. 25）に幼稚園、1953年（S. 28）に小学校が設置され、文字通り「国立」に幼稚園から大学までが置かれたのである。創立当初中高には寮がなかったため、地方からの男子生徒は大学の学生寮の東南寮と東寮を、女子学生は中寮を利用していた。

1963年（S. 38）になると、戦後のベビーブーム世代が高校生となる時期を迎え、音楽科が4クラスになり、普通科2クラスが創設され、中高に南寮ができた。それ以前の寮生の数は30名程度であったが、生徒数が増え南寮ができたことにより、一挙に倍の60名～70名になった。

しかし、1978年（S. 53）に大学が立川に移転し、それに伴い本校が現在の位置に移転すると、大学の寮だった西寮が本校の女子生徒用の寮となる。西寮の施設の規模から2人1部屋で利用し、50名前後の人数に縮小された。2人部屋だったため、本校の2号館北側のピアノ個人練習室（通称「ボックス」あるいは「コの字」と呼ばれた平屋の建物）にピアノを置き練習していた生徒もいた。1992年（H. 4）にはこの練習室の利用をやめ、西寮は1人部屋となる。

その後、老朽化も進み、耐震上も問題のあった西寮は、建築基準法の関係で同じ規模で立て直すことができないため、音小の東側にあった大学の西北寮を転用することになった。西北寮は改修工事を施し高校の寮として利用し、西寮を取り壊す



西寮(女子寮)

ことにした。1998年（H. 10）から1999年（H. 11）にかけ、内装工事が終了した西北寮に1年生から順次入寮することになり、2000年（H. 12）3月に西寮は閉寮した。それに伴い、西北寮の名称を「国立音楽大学附属音楽高等学校寄宿舍」と変更した。

しかし、2000年以降、実社会においてはバブルが崩壊し、構造的経済不況と少子化が社会問題としてクローズアップされるようになった。その影響であろうか、本校にあっても生徒数が次第に減少し、それに呼応するように寮生の数も減ってきた。一方では、改修工事をしたとはいえ、築後約40年が経過している建物は老朽化が著しく、その上現在の建築基準に適合しないものであることが判明した。このような状況の中で、寄宿舍の将来について法人内で検証作業を進め、慎重に審議を重ねた結果、2005年（H. 17）3月末をもって、本校の寄宿舍の歴史に幕を下ろすこととなった。



東南寮(男子寮)



東寮(男子寮)

注：寮生の数については資料編P.78を参照のこと





中寮居室の様子

後ろにあり、部屋はすべて和室であった。食事は隣接する幼稚園で済ませ、9時の始業に合わせ、8時30分頃には大学通りを歩いて高校へ通った。昼には毎日寮のおばさんが来て、パンと麺の昼食を1日交代で寮生だけが集まって食べた。たまには通学生と「うどん」と「お弁当」を交換することもあった。放課後は一度寮に帰り、自室にピアノがないため、食事を済ませてから高校に行き練習をした。時には大学の練習室に行くこともあった。しかし、お風呂は寮内になかったので、早めに切り上げてお風呂に行かないと点呼に遅れてしまうので忙しかった。門限は9時だが、音楽会などで遅くなるときは許可を得て出掛けることになっていた。そして消灯は10時だった。但しテストの頃は少し遅くなっていたように思う。

### 寮での生活

北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から生徒が集まってきていた。中には保護者が海外勤務のため利用していた生徒もいた。寮内では運営のために委員会を組織し、寮内の規則に従い、集団生活を送っていた。

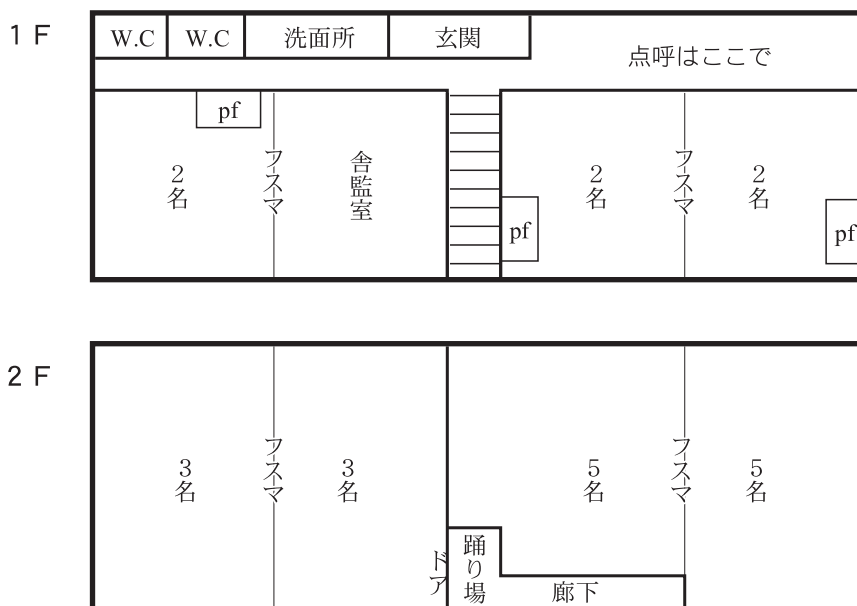
寮生だった音楽科10回生の井上上子様からお話を伺うと、1958年(S.33)頃の中寮、翌1959年(S.34)秋からの南寮では、次のような生活を送っていたそうである。

(中 寮)

中寮は中央線の線路沿いで附属幼稚園のすぐ横



中寮正面



井上氏による中寮見取り図

印象深い思い出としては、ある日トランプに興じて舎監の松尾先生がミシミシ階段を上がってくるのに気がつかず、「何しているんですか？」と言われ、あわてて皆布団の中へもぐり込み、それを見た先生が笑い出すということもあった。

土曜日はほとんどの人が個人レッスンに行っていた。また親類の家へ外泊許可を得て出掛けることもあった。

掃除当番も決まっていた、皆で協力し合いながら生活していた。

行事としては、「七夕の会」があり、2階の広い二間を続けて大広間にし、全員でお菓子を食べたり出し物をしたりして楽しい一時を過ごした。

また、当時寮にはテレビがなかったが、イタリアオペラが来日し、大学通りのお店に皆で行って「愛の妙薬」をテレビで初めて見たことが印象に残っている。

寮費は3食付きで3,000円ぐらいだった。

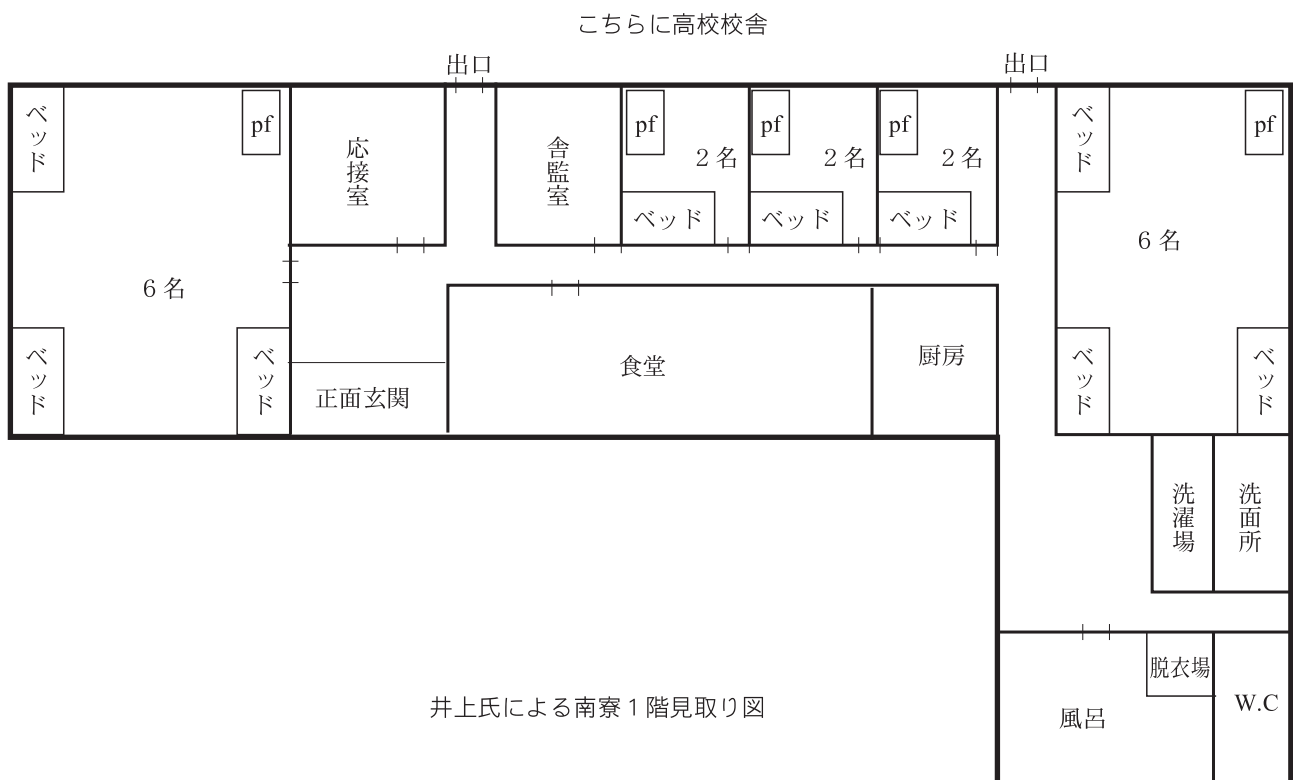
(南 寮)

南寮は校舎のすぐ横に建てられた寮で、部屋はすべて洋室であり、各部屋に2段ベッドが置かれていた。当初2階には大学生が10名ほどいた。お昼も中寮の時とは違い、寮の食堂で食べた。新築だったため、廊下掃除は近くの材木屋までバケツを持参し、おがくずを一杯詰め込んで帰り、そのおがくずを床に撒き、モップでゴシゴシ磨かされた。冬のおがくずもらいがつらかった。

お風呂は割と大きく気持ちよかった。お風呂は石炭で焚いていたそうだ。

行事としては、「クリスマス会」を食堂で行っていた。

(村田ひろみ)



## 偶然にたどり着いた場所へ、 そして、そこから ～音高と寮と、私との偶然～

小浦 啓子

(旧姓金田 普29回生)

今はもう寮の建物は取り壊されている。実は私は、取り壊される直前に偶然に訪ねたことがあった。私は学部時代、まだ大学生活に馴染みきれていない頃にフラリと音高と寮を訪ねることがよくあったが、サークル等で中心となる学年になると、そんなこともなくなった。それが久方ぶりに、確か大学院生の頃、なぜか訪ねる気になって行ってみると、寮監の小島やす先生が当たり前のように顔を出し、「あら、あなたも？KさんとNさんももうすぐ来るのよ」と妙にスムーズな待遇だった。何だか変だ、と思い訊けば、もうすぐこの寮の建物がなくなるので、ここのところ訪ねて来る元寮生が多いのだという。そんなことはまったく知らなかった。それで、これまた偶然に持っていた使い捨てカメラで（まだ誰もがデジカメを持ち歩くような時代ではなかった）寮の中を撮り歩いた。廊下、階段、突き当りの私の部屋、長電話して怒られた2つの公衆電話、21時以降になるとうっかりすると締め出される渡り廊下、冬は寒くて手で下洗いするのが嫌になる洗濯場、同じく渡り廊下の隣なんていう一番寒いところに位置して水しか出ないトイレ兼洗面所……。さすがにこれらが形を消してしまうと思うと寂しかった。

もう10年近く前のことだから、在校生はもちろん、寮を知らない卒業生も随分多くなったはずだ。彼らのためにあの建物を一言で紹介するならば、私は「昭和（戦後）」と表現する。私が入寮したのはもちろん平成に入ってからだったが、壁の色、部屋に備え付けられた棚、頑丈な机、ふすま、畳敷きの二段ベッド—すべてが昭和の匂いなのだ。……ちなみに私が在学していた頃に流行っていたアーティストは、Dreams Come True、B'z、大黒摩季、亡くなってしまったけれどZARDに川村かおり……。息の長い人たちはあまり今と顔ぶれが変わっていない。それらの歌も付き合い程度には聴いていた。でも、ちょっとアウトロー

の私は、その頃童謡とフォークにはまっていた。童謡に至っては大正時代に作られたものが多いけれど、フォークは昭和40年代といったところ。「かぐや姫」なんかの歌と寮の部屋とが、笑ってしまうほどよく似合う。音大進学に自信をなくして外部受験に切り替えていた私は、夜遅くまで勉強する日が続いていた。冬には、暖をとるための石油ストーブに鍋を乗せて、夜食の袋ラーメンやおかゆを作る。寮の夕食は17時半だから、夜中の1時にもなればお腹はすききっていた。火から鍋までの距離が長いから、お湯が煮立つまでも麺が煮えるまでも時間がかかる。長い時間をかけて、のびたようなラーメンが出来上がる。それを鍋のまますすると、南こうせつの声と重なると、苦勞もしていない癖に昭和の苦学生のような気分になる。だがそれが何だか頑張っているような気持ちにさせてくれて、勉強にも打ち込ませてくれた。そんな部屋だった（※でもこれは部屋のレイアウトや飾り方によるので、決して私のものが一般的ではない）。

取り壊されることを知って寂しくなったのは、これらの思い出が「形」になっていたのがなくなってしまふから。けれど、そればかりではないのかも知れないと、今となってふと思う。

今年3月中旬、仕事で上京したついでに偶然音高を訪ね、ひとしきり甲田先生や村田先生とお話させて頂いた。そして、その後用事に出かける甲田先生と一緒に校門に出た。先生が自転車を取りに行っている間、私はかつて私が3年間を過ごした、寮のあった場所を眺めた。夕闇の中にあの昭和の建物の姿はない。

私は泊まりの旅行バッグを引きずって歩きながら、先生も付き合っ下さって自転車を押しながら、一緒に国立駅まで歩いた。よく覚えている建物も変わってしまった建物もある。…実はその日私が音高を訪ねたのは、偶然のようで本当は心の底でその時来たかった場所だったのだ。私は今教職に就いている。張り切っているけれど空回りも多く、受け持ちの学生とちょっとしたすれ違いからトラブルになることもある。春の私は、ある学生との間にトラブルがあつて、空元気を振り回しながらも本当は元気をなくしていた。でも、音高

に行ってみて良かった。また生徒として先生方と話せてホッとした。帰り道にも今の状態をかつての先生にかつての生徒としてすべて聞いて頂いて、また私自身が先生として頑張れるような気がした。そして、今後も先生としてつまずいた時、相談もできるのだと思った。

田舎の中学を出た私が、音楽が好きという理由だけで簡単に東京に出してもらえたのは、音高には寮があったからだ。偶然私は音高と西寮にたどり着いたのだ。そして今年の春、再び私はその場所にたどり着いた。

偶然仕事が早く終わって、偶然国立に行くことを思い立って、偶然甲田先生とスムーズに連絡がとれて、生徒として先生と話ができて、偶然村田先生とも同業の話ができて、そしてまた今、偶然高校時代や春の一連のことを思い出しながらここに書き出す機会ができて、気がついた。音高は、私が帰れる場所の一つなんだ。学生時代が長かった私は、この歳でもまだ社会人4年目。一人前です！と気張ってかつての先生にお会いしたけれど、何だか生徒として「お帰りなさい」と迎え入れてもらえたような感覚だった。大学時代に音高に遊びに行った時は、いつも普通科職員室の後、必ず寮にも顔を出した。寮もきつと、私が帰る場所の一つだったのだ。昔の思い出も大事だけど、——先輩には常識知らずで多大な迷惑をかけました、済みません、とか、同級生とは一緒に試験勉強するつもりが朝までしゃべっちゃったね、とか、後輩とはテレビの覇権をめぐって喧嘩しちゃったね、喧嘩じゃなくて上級生として仕切らなきゃいけないのに、今も叱り下手な先生やってるんだよ……とか——同じ屋根の下で過ごした仲間を思えば、もちろん思い出は際限なく湧き出て来るものだけど、思い出はいつまでも残る。だからやっぱりここにあえて書かなくても良かったんだ。これを書きながら、まとめながら、分かった。寮がなくなって寂しかったのは、「今」帰れる所が一つ減ってしまったから、だということが。

——寮監をされていた小島やす先生、お元気ですか？今はどのようにお過ごしですか？

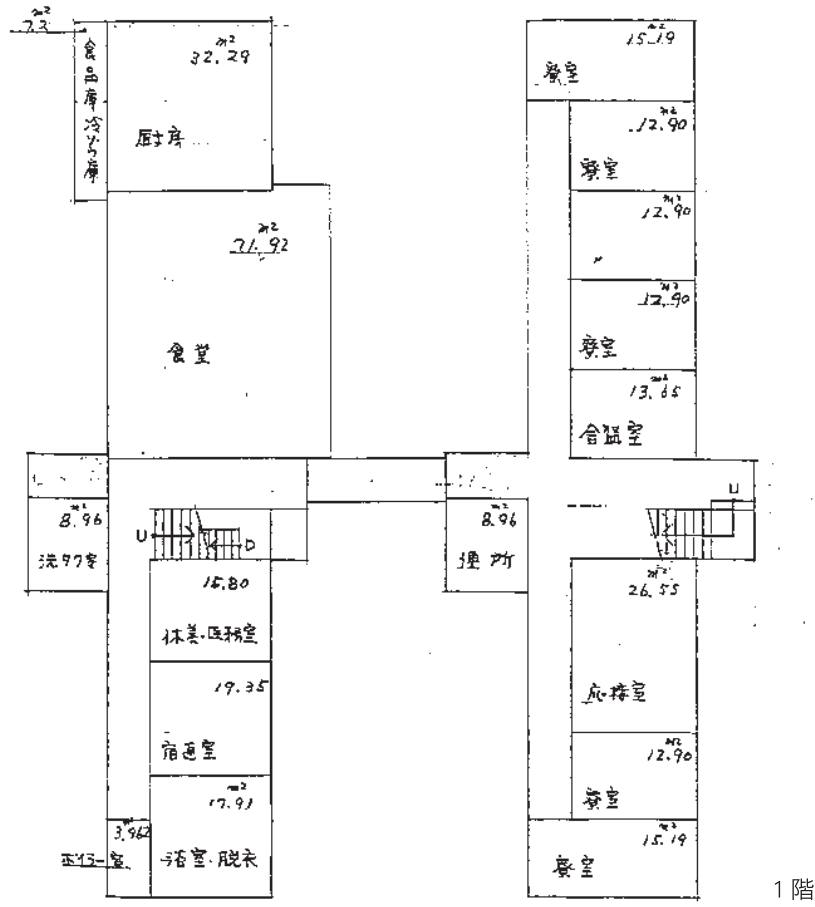
いつもブツブツと言いながらみんなの世話をやいて、時には世話をやきすぎてうるさがるの女子

高生は文句を言っていました。でも、先生のブツブツも、やきすぎなくらいの世話も、本当はみんな大好きだったんですよね。一見絵に描いたような世話好きなおばさん、に見えるやす先生も、実はかつて教壇に立たれていた才女で、試験前夜に理科を教えて頂いたこともありました。夜中にお腹がすいたのに何も食べ物を手元に残しておかなかった時、先生におねだりするとラップに包んでとっておいたご飯を下さったり、私が熱を出して寮食がのどを通らなかった時、わざわざ温かい煮込みうどんを作って頂いたりしたこともありました。……寮食と言えば、毎日ご飯を作って下さったおじさんも忘れるわけに行きません。一遍にたくさん食べられない私は、残してばかりで申し訳なかったです。でも、ご飯以外の時にも気さくにお話して下さったり、おじさんのお宅のネコと遊ばせてもらったりしたことも忘れません。

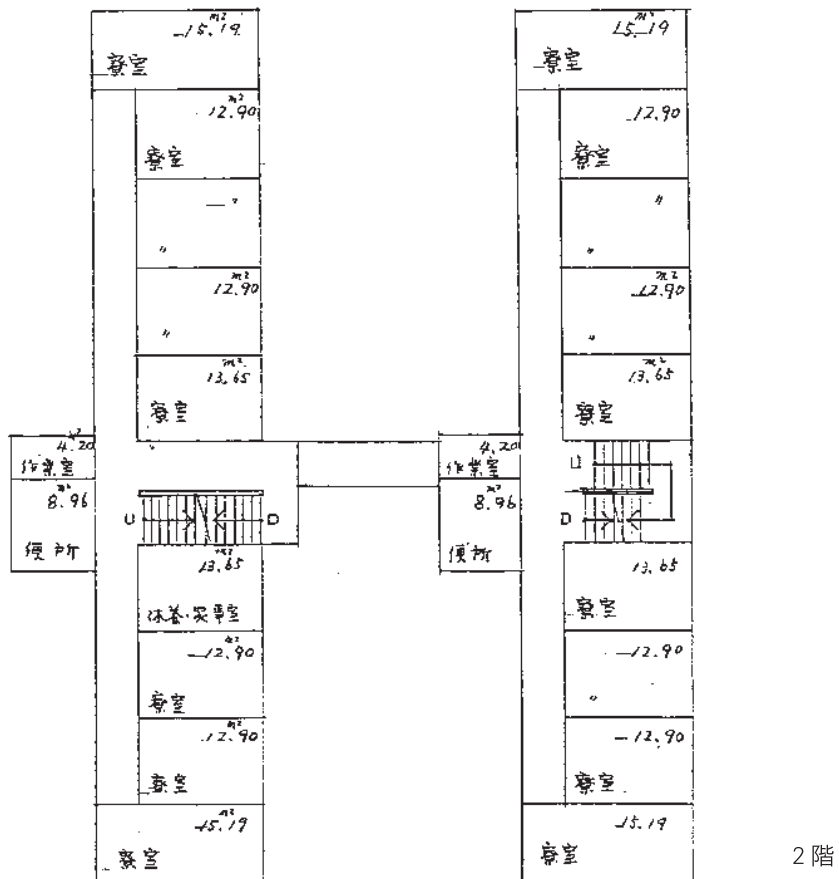
今、やす先生やおじさんが「お帰りなさい」を言って下さる場所がなくなってしまいました。でもその場所は、「今でもある」場所から「いつまでも残る」思い出に変わりました。そうすればいつも引き出しの中に入れて、好きな時に取り出せますから……、ね。——

最後に、先生方、友達、先輩、後輩、当時音高や西寮でお世話になったすべての方々、今、改めて感謝の気持ちを思い出し、贈らせて頂きます。どうも有難うございました。

西寮見取り図

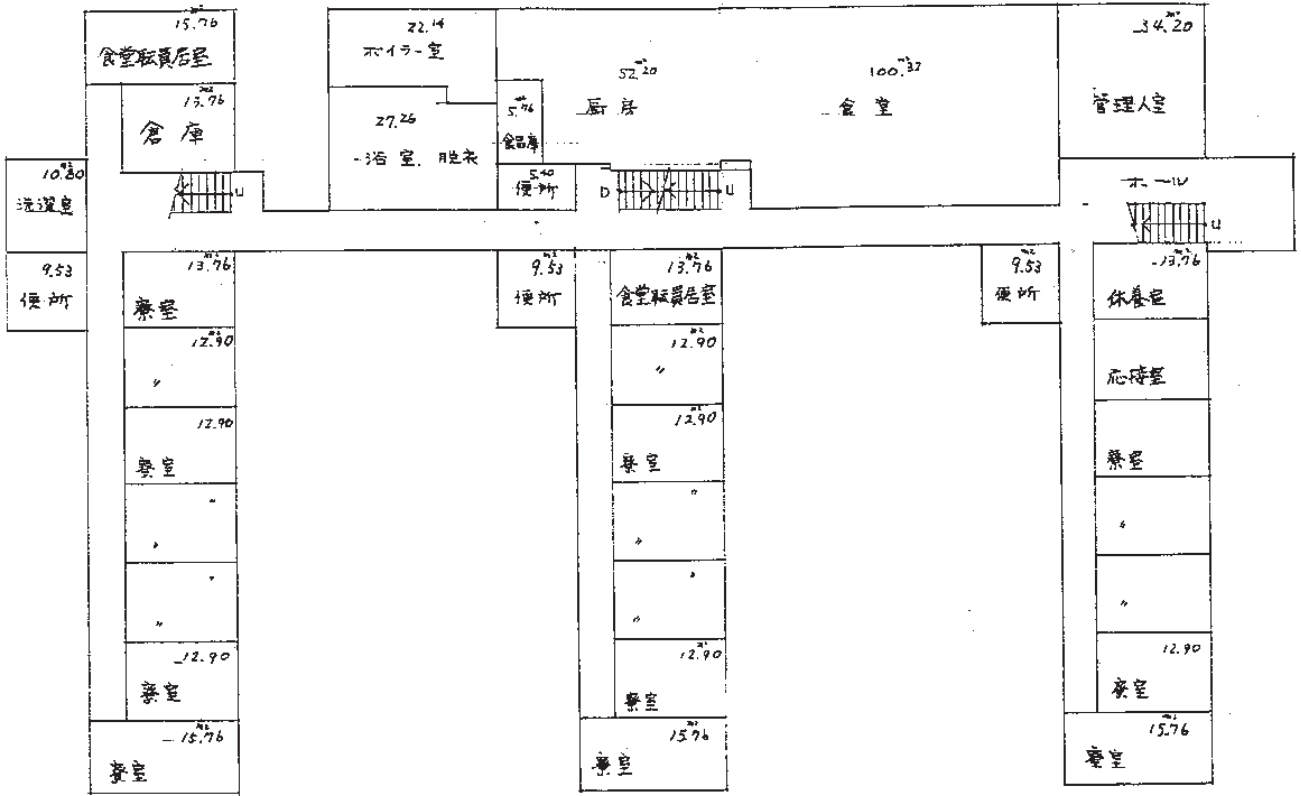


1階



2階

西北寮(寄宿舍)見取り図

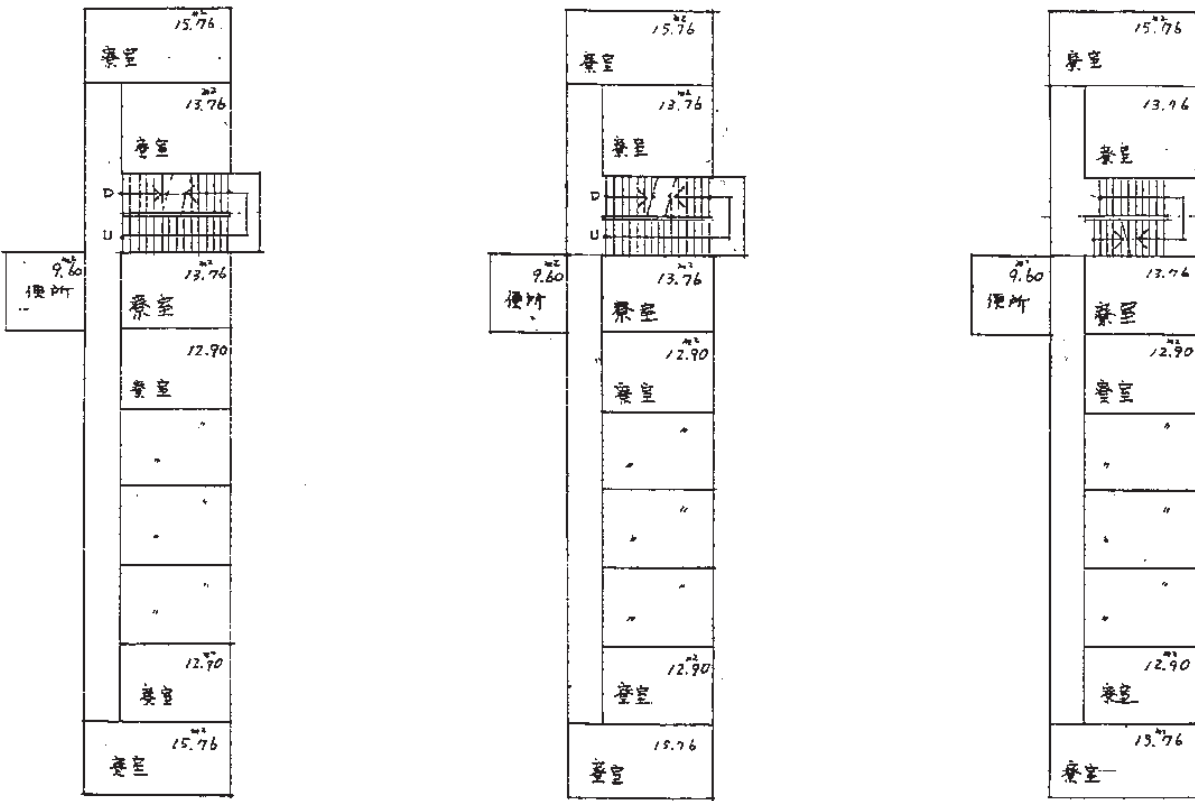


C棟

B棟

A棟

1階



C棟

B棟

A棟

2・3階

# 寮の規則

## ～南寮～

### 南 寮 寮 則

“国立音楽高校寮生は寮生活を通じて学業に精励し規律ある共同生活を営み健康にして、文化的な豊かな人間の陶冶に努めなければならない。”

1. 入寮後は在学中在寮することを原則とする。
2. やむを得ない理由により退寮を希望する者は、1ヶ月前に担任教師および寮監に届出で、許可を受けること。但しなるべく学年末であること。
3. 寮生活の規則並びに注意
  - (イ) 起 床 午前6：30
  - (ロ) 朝 食 午前7：00～7：30  
午前7：30～8：00（土曜、日曜）
  - (ハ) 音 出 午前7：00（平日） 午前7：30（日曜）
  - (ニ) 昼 食 午後12：30～1：00（平日）  
午後12：00～12：30（日曜）
  - (ホ) 夕 食 午後5：00～5：40
  - (ヘ) 風呂 午後7：00～10：00
  - (ト) 音 止 午後9：00（楽器・歌唱の練習停止）
  - (チ) 点 呼 午後9：05（必ず受けなければならない）
  - (リ) テレ ビ 午後10：00迄（但し特別の場合はその限りでない。その際は必ず寮監の許可を得ること。）
  - (ヌ) 消 灯 午後11：00
4. 門 限
  - (イ) 門 限 午後10：00
  - (ロ) 門限に遅刻した者はその都度「理由届」を提出しなければならない。
  - (ハ) 寮生は夕食後許可なく外出する事は出来ない。
5. 外出・外泊・帰省
  - (イ) 通学を除く外出の際は「外出簿」に、出寮時間、帰寮時間を明記しておくこと。
  - (ロ) 寮生が外泊する場合「外泊願」を寮監に提出し許可を得なければならない。
  - (ハ) 帰省及び外泊を許可された寮生は帰省に際し、外出先の責任者の捺印のある、宿泊証明書を寮監に提出しなければならない。

以下略

## 寮の規則 ～西寮～

### 国立音楽大学 西寮（附属音楽高等学校）寮則

国立音楽大学附属音楽高等学校寮生は、寮生活を通じて学業に精励し規律ある共同生活を営み、健康にして文化的な豊かな人間の陶冶に努めなければならない。

また、寮生は、常に清潔を旨とし、寮内外の整頓に努めると共に保健・衛生に注意しなければならない。

1条 西寮には寮生の指導、寮内の秩序の維持と、施設・設備の管理運営のため寮監及びその他の職員を置く。寮生は寮監に協力して寮生活を円滑に営むものとする。

2条 寮生は、下記の時間を厳守すること。

(イ)	起床		6時40分		
(ロ)	朝食	平日	7時	～	7時30分
		土曜日	7時30分	～	8時
		日曜日	8時	～	8時30分
(ハ)	昼食	平日	12時30分	～	13時
(ニ)	夕食		17時30分	～	18時
(ホ)	入浴		19時	～	22時30分
(ヘ)	門限	月、火、水、木曜日は			19時
		金、土、日曜日は			21時
(ト)	点呼		21時05分		
(チ)	テレビ視聴		22時30分	まで	
(リ)	消灯		23時		

3条 音出し（楽器・歌唱の練習開始）は、7時30分  
音止め（楽器・歌唱の練習終了）は、21時までとする。



# 寮の規則

## ～ 寄宿舍～

学校法人 国立音楽大学  
附属音楽高等学校寄宿舍居住規則

- 第 1 条 この規則は、国立音楽大学附属音楽高等学校寄宿舍運営規程第20条に基づき、寄宿舍（以下舎と略す）に居住する者が遵守すべき事項を定める。
- 第 2 条 居住者は、舎長・舎監の指示に従い、舎の運営に協力する。
- 第 3 条 居住契約期間は原則として1年とし、更新は2回までとする。
- 第 4 条 居住者が舎を使用できる期間は次の通りとする。
1. 4月入学式前日から7月授業終了日の翌日まで
  2. 9月授業開始日の前日から12月授業終了日の翌日まで
  3. 1月授業開始日の前日から3月卒業式の翌日まで
- 第 5 条 入舎および居住に要する費用は別表の通りとする。
2. 入舎費を除く他の費用は、毎月指定された期日に自動引き落としにより支払を行う。
- 第 6 条 舎の日程時刻は次の通りとする。
1. 朝食 7時15分～ 8時30分
  2. 昼食 12時30分～13時00分  
(ただし、土・日・祝日は実施しない)
  3. 夕食 17時30分～19時00分
  4. 入浴 17時00分～22時30分
  5. 門限 19時15分（月～木曜日）  
21時00分（金～日曜日・祝日）
  6. 点呼 21時05分
  7. 練習開始時間 7時30分
  8. 練習終了時間 21時00分
- 第 7 条 第6条5の規程にも関わらず、音楽会への出演・参加をする場合は、門限を22時45分までとすることができる。但し出演・参加を希望する者は、あらかじめプログラム・チケット等証明できるものを舎監に提示し届を出す。
- 第 8 条 門限に遅刻したものは、その理由を、定められた書面で舎監に届け出る。
- 第 9 条 点呼時に不在であったものは、その理由を舎監に報告し、必要と判断される場合には書面で届け出る。
- 第10条 居住者が帰省または外泊する場合は、帰省届・外泊届を舎監に提出する。
2. 外泊は、保護者から届け出のある場所に限り許可する。
  3. 帰省または外泊から帰舎したときには、帰省または外泊証明書を舎監に提出する。

以下略

# 寮の食事

～ 1999年11月29日(月)から12月12日(日)～

## 国立音楽大学附属音楽高等学校寮献立表

朝日産給食

	朝 食	昼 食	夕 食
11 月 29 日	パン 牛乳 ハムソテー コールスロー トマト 果物	御飯 ロールキャベツの クリーム煮 青菜とコーンのソテー こんにゃくのきんぴら 漬物	チキンかつ コールスロー スパゲティチャップ 麻婆豆腐 酢の物 御飯 漬物 味噌汁
11 月 30 日	御飯 味噌汁 ちくわと大根の甘辛煮 味付け海苔 ザーサイ炒め 漬物	ハンバーガー エッグバーガー 牛乳	魚の照り焼き おひたし 里芋と豚肉の味噌煮 ナムル 御飯 漬物 味噌汁
12 月 1 日	パン 牛乳 ベーコンチャウダー ゆで卵 果物	親子丼 あじわい緑茶	ポークピカタ コールスロー マセドアンサラダ レタス トマト ひじきの炒り煮 御飯 漬物 味噌汁
12 月 2 日	御飯 味噌汁 焼き魚 おひたし 刻み昆布の煮つけ 漬物	焼き肉サンド コーヒー牛乳	カレーライス フルーツポンチ グリーンサラダ
12 月 3 日	パン 牛乳 チキンサラダ 果物	オムライス オレンジジュース	精進揚げ おひたし ゆで豚のごまたれかけ 大根なます 御飯 漬物 味噌汁
12 月 4 日	御飯 味噌汁 はんべんの焼き マヨネーズのソテー もやし 辛子和え 漬物		豆腐と野菜の チャンプルー ワカサギの南蛮漬け コールスロー トマト 御飯 漬物 味噌汁
12 月 5 日	パン 牛乳		御弁当

	朝 食	昼 食	夕 食
12 月 6 日	御飯 味噌汁 納豆 野菜炒め 漬物	サンドイッチ バナナ 牛乳	いかフライ コールスロー いんげんのピーナッツ 和え 肉団子と野菜の甘酢炒め 御飯 漬物 味噌汁
12 月 7 日	パン 牛乳 ウインナーソーテー サーワーキャベツ 生野菜サラダ 果物	かつ丼 十六茶	すき焼き風煮 レバーの香味揚げ コールスロー トマト 御飯 漬物 味噌汁
12 月 8 日	御飯 味噌汁 がんとどきとけ 大根の煮つけ 青菜としめじの おひたし 漬物	オープンサンド コーヒー牛乳	鮭のムニエル コールスロー タルソース スパゲティサラダ レタス トマト ソーセージの磯辺揚げ 御飯 漬物 味噌汁
12 月 9 日	パン 牛乳 ハムエッグ コールスロー トマト ヨーグルト	御飯 北海道ロッケ コールスロー トマト 酢の物の いんげんのかき揚げ 漬物	肉じゃが 揚げ出し豆腐 大根おろし なすとピーマンの 味噌炒め 御飯 漬物 味噌汁
12 月 10 日	御飯 味噌汁 さつま揚げの煮つけ もやしのソーテー 卵の花炒り煮 漬物	マカロニグラタン みかん 牛乳	蒸し鶏のラビゴット ソース トマト レタスの 豚肉とキャベツの 辛子和え 大学芋 御飯 漬物 味噌汁
12 月 11 日	御飯 味噌汁 さんまの蒲焼き(缶) おひたし 大根おろし 山菜五色煮		ビーフシチュー 生野菜の盛り合わせ ジョア 御飯 漬物
12 月 12 日	パン 牛乳		御弁当

# 校地移転

## ボケの記憶

桜井 匡之

(元中学校・音楽科教員 国語科)

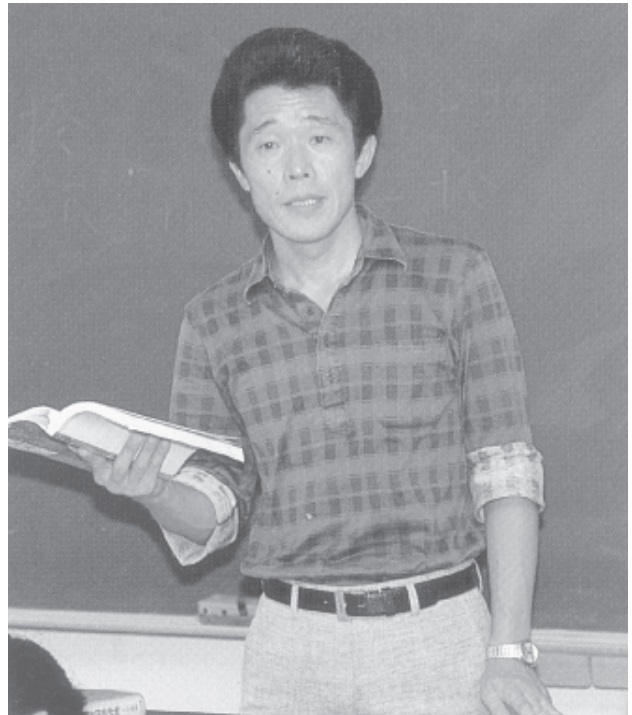
中学校に赴任したのは1971年（S.46）、かれこれ四十年近い昔になる。校舎はまだ富士見台にあって、国立駅からは、まっすぐに延びる広い大学通りの、桜並木の下を通う毎日だった。石造りの正門を入るとすぐに音楽科の校舎が右手奥に延びていた。二階建の古めかしい建物で、外壁の下方には鉄平石が貼ってある。植込みのある中庭を挟んで、同様の建物が建ち、これが中学校だった。

一階に教員室と一年生用の二教室。二階が二、三年生というだけの小さな校舎だった。教室は両側ともガラス窓で、廊下を歩くと左右に中庭と教室内が見えた。この教室にアップライトのピアノが一台ずつ置かれていた。これまでピアノというものには音楽室でしか見る事のなかった私にとって、これは大きな驚きだった。

休み時間になると、生徒達は争ってピアノに集まり、思い思いに鍵盤をたたく。まさに『たたく』としか言いようのない弾き方だった。一人が椅子に陣取り、さらに数人が左右に立って音を出す。ときに張り合うように、ときには調和をもって、自由自在に音と遊んでいた。ピアノに向かってることが楽しくてたまらないという態で、活気が身体中に弾けていた。朝も昼も、どの教室でもピアノが鳴っている。大変な賑やかさである。どんな曲だったか記憶にはないが、多くが当時の人気アイドルが歌ったものだったろうことは想像に難くない。時には例の「ネコフンジャッタ」も登場して私を喜ばせた。

一階の教室には後方に扉があって、そこから直接外に出られるようになっていた。ひと昔前の最新式設計によるものだと聞いた気がする。扉の外は中庭的なグラウンドで、その向こうに普通科の立派な校舎（音楽科の一年生も同居していた）がデーンと構えていた。

休み時間になると、その扉から上履きのままの一年生がバラバラとグラウンドに飛び出す。缶ケリ、ゴム段、鬼ごっこ……思う存分駆け回って、チャ



1990年 卒業アルバムより

イムが鳴るとまた、当然のごとくそのまま教室に戻ってくる。扉の周辺は泥や砂だらけになる。―上履きのまま外に出てはいけません―。時折注意はしたのだろうが、この扉を釘付けにしたという記憶はない。（マァ、ショウガナイカ……）大らかな時代であった。

ある日、窓の外に金網が出現した。外壁にずらりと角材を立て掛け、駐車場のフェンスに見るような目の粗い金網を張ったのである。グラウンドではこのところ、時にはなぜか授業時間中にも、野球に興じる男子生徒達の姿が見かけられた。（これを読んで、思い当たる先生もおられるかもしれない。）普通科校舎に入る外階段の脇がホームベースで、その結果中学校の教室がライトスタンドの位置になる。その頃は運動の得意な男子も多く、いい打球がライト線に上がると、白球は一直線に教室に向かって飛んでくることになる。ライトスタンドの人間を危険から守るために、学校はフェンスを設置したのである。「野球禁止」などという心ない方法は採らなかった。以来、中学校の教室や教員室からは、外の世界を金網越しに眺めることとなった。

奥の階段の向こうに小部屋があった。炊事もできて、こじんまりとした住居の態をなしており、

ここに「稲田のおばさん」が住み込んでいた。髪に白いものが混じった、穏やかで小柄な方だった。もう一人、階段を上ったこの真上に「野村先生」が住んでおられた。当時の附属部長、今の校長にあたる人である。昔風に言えば、二階の宿直室に毎日校長が泊まり込んでいるという格好である。それで「稲田のおばさん」が野村先生の食事の世話をしておられた。時として味噌汁のいい匂いが廊下に漂ってきたりした。

広い教養と多くの趣味をお持ちで、大変な読書家でもあられたという。教員達とも旅をなさり、共に酒も酌み交わすという、気さくで温厚な先生であったそうだが、大学を出たての若造にはとても恐れ多くて、二、三度言葉を交わしたぐらいの記憶しかない。そして赴任二年目の秋、突然に先生の死が知らされた。芸術祭二日目のことだった。

葬儀の折りであったか、国立楽器のK氏がぽつりと口にされた。「これからどんどん変わってってしまうね……」一数年して校舎移転の話が起こった。現在の敷地は売却。中高を大学の跡地に移し、大学には立派なホールができるという。大学は夜間部を残し、既に玉川上水に移転していた。委員会が設置され、職員会議が重ねられた。「移転反対」が中高教員の総意だった。周辺の環境、地形、通学路など、他に得難い教育環境を守るべく、意を尽くして法人との話し合いを繰り返した。しかし、意向は受け入れられないまま、大学跡地での新校舎建設は進み、ついに移転が行なわれた。机も本も何もかもそのまま運び去られた。昭和五十二年の夏休み中のことだった。

校内にはいろいろな木があった。正門を入れてすぐ左には石榴(ざくろ)が赤い種子を覗かせて実を付けた。中庭では辛夷(こぶし)が白い花を咲かせ、大学通りに面した塀ぎわには桜の若木が並んでいた。一番奥の普通科校舎の脇でヒマラヤスギが大きく枝を広げていた。なぜか桜の傍らに桑の木があって、初夏になると真っ黒に熟れたうまそうな実をいっぱいにつけた。

中庭の正面奥がレッスン室と、二階の講堂で、その前に一株の木瓜(ぼけ)の木があった。人の手が加えられた様子もなく、のびのびと枝を伸ばし

て、人の背丈を越す高さがあった。点々と赤い花を付けている頃のこと、ある先生が愉快そうにおっしゃった。「これがねえさくらい君、くにたちボケだよ」

詰込み教育・序列主義・生徒管理等々、世の中が騒がしかった時代に、「我関せず」とそれらに背を向けていた本校は、他から見ればまさに「くにたちボケ」であったに違いない。有馬学長は入学式などの度に「音楽人」ということを繰り返して言っておられた。「くにたち」は、点数やテクニクだけではなく、のびのびと自由な中で、それぞれの個性を伸ばしていくことを是としていた。

—『くにたちボケ』くらいがちょうどいい。あんまりきっちりやりすぎると息が詰まって、子供らの豊かな感性を押し潰してしまう—。何げない一言に、こんな意味が込められていたであろうことに気が付いたのは、ずっと後年になってからであった。

戯れ言のように『くにたちボケ』を教えてくださいました先生も去り、毎年多くの花を咲かせてきた木瓜(ぼけ)の木も今はない。

中高の跡地は「東京都心身障害者福祉センター」として装いを新たにした。広々とした空間に、明るい近代的な施設が建ち並び、かつての石造りの正門も中庭の辛夷(こぶし)も姿を消した。三十数年を経て、立派に育った道路ぎわの桜と、そそり立つ二本のヒマラヤスギが、わずかに当時の面影を偲ばせている。

いづ地にか咲けるくにたちボケの花

## 中学校の卒業式分離について

現在、中学校の卒業式は、高校とは別々に行われていますが、11年前までは中高合同で行われていました。現在のように卒業式を分離したのは、次のようないきさつからです。

1997年（H.9）、当時の3年生の担任から卒業式について提案がありました。「中学生をもっと主人公にした卒業式にしてはどうか。生徒一人一人に卒業証書を渡し、卒業を祝ってあげたい。そのためには、卒業式を高校から分離し、中学独自の式を行ってはどうだろうか。」

この提案は、中学職員会議を経て、同年6月の合同職員会議にかけられました。意見の中には、年度途中で式内容を変更することに対する懸念や、中学校が抜けることで高校の卒業式へ与える影響を危惧する声もありました。また、卒業式を分離すれば、当時式後に行われていた卒業演奏会と重なる可能性があるとの指摘もあり、結論を出すまでには至りませんでした。結局、平成9年度の卒業式の見送られました。

しかし後の合同職員会議で議論を重ねた結果、1998年度（H.10）から中学校が卒業式を分離して行うことが決定しました。

1999年（H.11）3月13日、中学校の卒業式が新しい形で行われました。在校生全員が出席して卒業生の門出を祝うことになりました。入場・退場時に流れる曲は卒業生自身が選曲しました。出席者が見守る中、校長から卒業生一人一人に卒業証書が手渡されました。また、3年間の思い出がスライドで上映されました。スライドが替わるたびに歓声が上がり、式場はなごやかな雰囲気になりました。最後は卒業生が自ら選曲した歌を在校生と共に歌う全員合唱でしめくくられました。退場時には在校生の生徒会役員から卒業生一人一人に花が渡されました。こうして新しくなった中学校の卒業式は、この形が基本として受け継がれ、現在に至っています。

（篠木 秀一）

## 卒業演奏会の分離

創生期の頃から中学、音楽科では「新入生歓迎演奏会」や「くにたち音楽会」「卒業演奏会」を一緒に行っていました。そのプログラムは成績優秀な生徒の演奏会という性格上からソロが中心でしたが、時には作曲科の生徒の作品発表で合奏形態の演奏が行われることもありました。

1999年（H.11）3月、やはり一緒に行われていた卒業式が、中学、高校それぞれ別々に行われるようになりました。その流れが「卒業演奏会」へと繋がりました。一緒に行うことで中学も高校も時間的なことで出演者がどうしても制限されていました。分離できればお互いの自由度が増すことは自明です。当時「くにたち音楽会」では中学3年生が授業で作曲した合唱作品を発表する「創作

合唱」と言うコーナーがありました。これを分離する卒業演奏会で生かせないかと音楽部会より提案があり、中学で検討が始まったのです。紆余曲折を経て2003年（H.15年）3月に音楽科、中学で分離された卒業演奏会が行われることになりました。それぞれの個性が活かされた演奏会となり現在に至っています。今後も大きな変化は考えにくいのですが、特性を大切に考えて、さらなる進化形を模索していく姿勢は失われることは無いと思っています。

（星野 安彦）

## 最後の合唱部

西野 恵未

(中学校 2001年度<H.13>卒)

国立音楽大学附属中学校様。60歳のお誕生日おめでとうございます。私が中学生だった頃なんてつい最近の事の様な気がしていましたが、気付けば卒業してからもう8年という時間が過ぎていました。あの頃大人たちがよく言っていた「つい最近の事のような気がして・・・」というフレーズを、こうも自然に使えるほどに私自身もいつのまにか成長していて、なんだか不思議でなりません。今年、私は晴れて社会人1年生を迎えましたが、右も左も気にしない自由奔放さは当時と変わっていないなあ、なんて思い返したりしています。

さて、そんな音中での3年間を振り返ると思い出される事は沢山ありますが、特に鮮明に覚えている思い出といえば、それは合唱部で過ごした日々です。これを語ると何から話していいのか分からなくなるくらい沢山のエピソードが残っているのですが、せっかくの機会なので少しずつ語らせていただきます。

当時合唱部の顧問をされていた羽田喜久代先生の存在を知ったのはNHKの全国学校音楽コンクールの生放送を見てでした。私は附属小学校の6年生だったので、あと半年もすれば進学する音中の先生や先輩が歌う姿に目を輝かせながら画面を見ていたと思います。

「中学校に入ったら私も合唱部に入って、コンクールに出る。それで音中合唱部は最高だって言いたい。」そんな子供じみた密かな野望から、私の合唱部生活は始まりました。

入部してからというもの、週に2～3回の放課後練習をこなし、夏休み突入とともに毎日過密な練習スケジュールの毎日。やはり人気の部活という事もあり一時は50人近い部員を抱える事もありましたが、中には専科との両立が難しいという理由で退部する人たちも後を絶ちませんでした。

しかし『専科を学びながらも歌を愛するメンバーが自然と残った』という部員の変動は、2年後に経験する快挙に大きく影響していたのではないかと今になって思います。



練習では羽田先生の指導のもと様々な訓練が行われました。企業秘密のような特訓メニューは本来書くべきではないのかもしれませんが、強烈なものをひとつだけお教えします。それは、基礎練習です。合唱部の練習は基本8時鍵あけ、朝9時に音出しが始まって夕方の6時前くらいまでは練習をしていたのですが、朝9時からの約1～2時間は必ず基礎練習に時間が割かれていました。声も体も心も、全部使って行うとってもハードな練習メニューなのですが、その時間こそが自分自身や自分の声と向き合う絶好のチャンスなので必死に訓練していた事を思い出します。何事も積み重ねが大切ですね。

さらに、羽田先生は受け継がれる伝統的な練習とバランスをとるように、新しいものもどんどん取り入れていらっしゃいました。笑ってしまうようなユニークな練習法も沢山ありました。やってみなければわからない、という言葉は羽田先生から教わったような気がします。

3年生を迎えた頃。最後の全国コンクール目前にして、先生・生徒共々分裂する出来事が起こりました。私たちは勝手なもので、3年生進級とともに一番大切なものを見失ってしまったのです。進路、成績、肩書き、立場……。様々な重圧がものすごい勢いでのしかかり、私たちの培って来た関係を壊していきました。そのときでした。「もう一度歌おう。」私たちを見捨てなかった先生の熱意が、再び集合するきっかけとなったのでした。再び集まった私たちは、何かが違いました。誰が呼びかけたわけでもなく、部員全員が演奏曲の全パートを暗譜している状態にあったし、ピアノ伴奏さえも頭に入っていた。練習に遅刻者や欠席者はいませんでしたし、練習中は涙も笑顔も絶えず多感な良い空間でした。ただ、音楽だけを見つめていた気がします。コンクールが開始すると地区予選、関東甲信越予選、そして本選へとバタバタと日にちが過ぎていきました。なぜだか、「日本一になりたい」という一般的な願望よりも「音楽が好きだから絶対に日本一になれる」という絶対的な確信を部員全員が持っていたので、視点がぶれることもなく前だけを見て突き進むことが出来ました。あの頃は誰も口にしなかった事ですが、このコンクールが羽田先生の退職なさる最後の年だったという事も私たちに大きな影響をもたらしていた事は確かです。みんな、羽田先生が大好きだったし音中合唱部が大好きでした。あのメンバーだから成し得た事だって口を揃えていったほど、部員同士がかけがえの無い仲間へと変わっていたし、仲間同士とても信頼し合っていました。だか



ら獲得できた日本一の快挙だったのだと思います。

中盤でも述べたように、歌を愛する音楽家が集まって、お互いを確認し合うように1つの曲を歌い上げる。ただそれだけの事なのですが、大人になった今、それはとても難しい事なのです。音楽には人間を愛せる心が伴っていると思うし、音に

は血が通っています。なにより、音楽は自分自身の人生でもあります。この合唱部での3年間を通してそんな事を学ばせていただいたと思います。こんな時代だからこそ、音楽をしようって思える人が増えたら良いですね。私も社会に出た今、音楽をもっと勉強したいと強く感じている一人です。

## リンツ音楽高等学校との交流

### 国立創立70年とオーストリア建国1000年

国立音楽大学附属中学校・音楽高等学校とリンツ音楽高等学校 Das Musikgymnasium in Linz との交流演奏会は、1996年（H.8）3月4日と6日に国立音楽大学講堂で行われた。

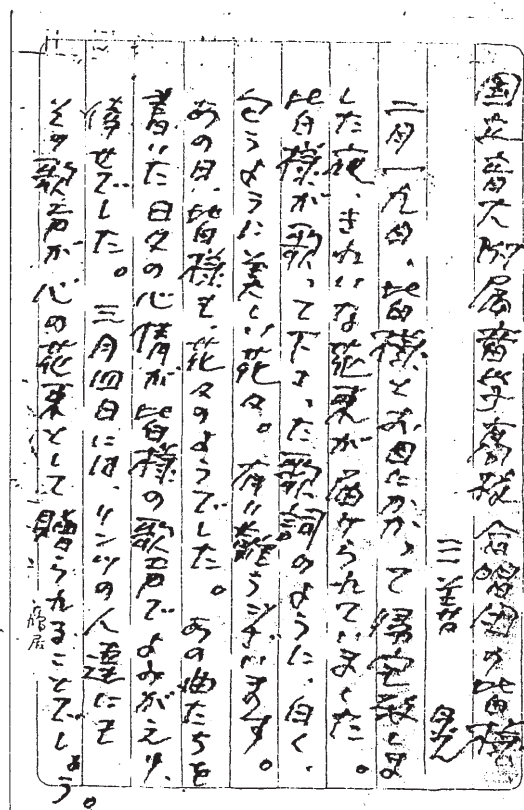
この年、学校法人国立音楽大学は創立70周年を迎えていた。また、オーストリアは建国1000年にあたっていた。国立とリンツ（オーストリア）の節目が一致した1996年、両校は交流演奏会を行うことを決めた。

### 交流演奏会プログラム

交流のための演奏会は、以下のようなプログラムで構成されていた。

3月4日は「リンツ音楽高校演奏会」を開催。特別に編成された「国立音楽大学附属音楽高等学校合唱団」が、荒木泰俊指揮、星野安彦ピアノにより三善晃の組曲『三つの抒情』を、歓迎の合唱として演奏した後、スルツァー『パイプオルガンの為のカプリッチョ』、モーツァルト『踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ』、ブルックナー『モテット』他、J.シュトラウスⅡ『アンネン・ポルカ』、J.シュトラウスⅠ『ラデツキー行進曲』他が、リンツのソリスト、オーケストラ、合唱団により演奏された。

3月6日は「リンツ音楽高校との交流演奏会」として、創作合唱4曲（音中）、モーツァルト『フィガロの結婚 序曲』（音高オーケストラ）、ベートーヴェン『プロメテウスの創造物 序曲』（音高／リンツ合同オーケストラ）、シューベルト『交響曲第5番』（リンツオーケストラ）、そして1996年には没後100年だったブルックナーの『テ・デウム』（音高／リンツ合同合唱団、合同オーケストラ）が演奏された。



三善晃氏からの書簡

### 準備

リンツ音楽高校の受け入れと両校交流の概要については、1994年（H.6）11月15日の合同職員会議で決定し、直ちに実行委員会を立ち上げた。委員会は、望月雄二校長、岸根保夫主事、岡部徳三、野呂博明、円山利絵、馬込勇、山本康雄、牛島正裕、羽田喜久代、桐村亘子、荒木泰俊各委員で構成され、1994年12月2日より実務を開始した。

プログラムの概要が決まると、新たな問題が浮上した。それは、歓迎の合唱と『テ・デウム』の合唱を歌うのは誰か？ということだった。当時音高は、音楽科と普通科で合計7の合唱クラスを持っていたが、一部の学年やクラスだけが出演することは、できるだけ避けたかった。

そこで、特設の合唱団が組織されることになり、

メンバー選出のオーディションが行われた。オーディションは想定された合唱団の規模の4倍にあたる約240人の応募があり、生徒の関心の高さを示していた。

オーディションでは66名が選出され、直ちに練習が開始された。月曜の6、7限の定期練習、夏休み期間の特別練習、2月1日～4日の合宿、2月19日の三善晃氏レッスンの合計43回の練習に、生徒たちは、ほぼ100%という驚異的な出席率を残しながら熱意溢れる姿勢で臨んでいった。

一方、不安材料もあった。合同演奏する『テ・デウム』には、複数のエディションが存在する。また、テキストのラテン語は死語なので、その発音には数種類の可能性がある。これらを調整するため、相談の機会を得ようと試みたが、リンツ側は「そのような協議は不要」という意向で不調に終わり、音高としては最適と信じられる楽譜と発音で準備を進めることになった。

## 演奏会

リンツ音楽高等学校のオーケストラと合唱団約150名は、1996年（H.8）3月1日に来日した。

3日は中学創作合唱と歓迎の合唱の試演会、3日に『テ・デウム』の合唱練習とオーケストラ練習、4日はオケ合わせと本番。5日にオケ合わせ、6日にゲネプロ・本番というスケジュールだった。

『テ・デウム』の練習当初、指揮者のバルドウィン・スルツァー氏は音高の合奏・合唱能力に対して、少し不安があったようだった。日本では通常、本番直前にはあまり行わないオーケストラの分奏や、合唱ではリンツだけで歌いその後音高だけで歌うことを指示することもあった。しかし練習の進行とともに演奏者たちは一体感を持つことができ、リハーサルは本番での成功を予感させるものとなっていった。

演奏会での『テ・デウム』の演奏は、準備段階で心配した通り、同じ単語が両校の合唱団とソリ



「テ・デウム」の演奏

ストで3通りに発音されたりして、バラバラな印象もあった。しかし、指揮者はほとんど意に介さないようであったし、細目に目を（耳を？）つぶれば、雰囲気のある好演だったと思う。彼我の文化の違いを感じ、このような経験もまた、交流の意義であると得心した。

スルツァー氏は演奏後、音高の合唱を「天使の声」と表現し、『テ・デウム』の演奏は音高によって支えられたと賞賛された。また、4日に演奏した歓迎の合唱『三つの抒情』の演奏は、音高が造り出した最良のハーモニーだった。現在まで、あの演奏を凌ぐ合唱は出現していないと思う。

## その他

スルツァー氏は、翌年再来日し、本校オーケストラと合唱を指揮してモーツァルト『戴冠ミサ』を演奏した。

合唱団では、解団式の席上、団員たちが「私たちは存続します」と宣言し、少し周囲を慌てさせた。しかし本当に活動を続け、1999年(H.11)9月6日にカザルスホールで自主公演を行い、11月20日には国立音楽大学附属中学校・高等学校創立50周年記念コンサートで「祝祭合唱団」の名で、三善晃のもうひとつの傑作『三つの夜想』を演奏した。素晴らしいハーモニーだった。

今、校長室を飾っている交流演奏会の写真（扉ページに掲載）を改めて見ると、多くの人材がここから育っていったことを感じる。

『テ・デウム』のソリストだったテノールの鹿内芳仁とバスの和田茂士は、現在は音高の声楽担当講師として勤務している。当時の在校生では、現在ヨーロッパで活躍する指揮者の森内剛やソプラノの松井敦子、安定した演奏を続けるテノールの神林紘一、pe'sの作曲家・キーボード奏者の樋泉昌之などが、また、教育界でも、東京学芸大学大学院で学び、今はその附属校で教える、合唱団コンサートミストレスだった森岡美菜子などが活躍している。

これらは一例に過ぎない。若い世代に経験の場を提供することが、非常に重要だったことが思われる。

昨年度、音高はベルリンのカニジウス高等学校オーケストラと交流し、合唱部はポーランドとリトアニアで公演を行った。これらから、次の記念年にはどのような報告ができるのだろうか。

（荒木 泰俊）

## 新普通科、発足

### 「音楽」高校の「普通科」

「国立音楽大学附属音楽高校」だけでさえ長いのに、さらに「普通科」がつく。「どんな学校なの？」という質問に答えるには、歴代の在校生は皆、時間を要した経験を持つ。つまり「音楽高校の中だけど、勉強は普通の勉強、でも普通の学校よりは音楽の授業が多くて、80%くらいが音大に入学する・・・」ということ。世の中でも極めてユニークな位置を保ってきた普通科である。しかしそうした内容の普通科が40年続いてきたのは、そうしたユニークさに対するニーズが確実に存在したからである。

それが変化してきたのは1990年代後半からだろう。1つには少子化の波が本校にも影響するようになり、徐々に受験生が減少してきたことであり、また1つには「平成不況」とも言われる景気の後退などが音楽人口の減少をもたらしたことである。それまで「音楽の演奏家ではなく、音楽の教育を目指す道」「音楽漬けになるのではなく、もっと広く音楽以外の世界とも接している道」を選んできた生徒たちが少なくなったのである。

実際、1クラス40～42人、2クラス体制を長くとってきた普通科が、1996年度（H.8）初めて入学者が78人となり、その後、80人を割ることが常態となっていった。一方、このころから、初めから音大を目指さない生徒も少数ながら入学するようになっていた。長らく音大を目指す生徒が入学時には100%であったことを考えると重要な変化だった。対策を考える時期は既に到来していた。

### 新しいコースを目指す

この普通科の問題は、2000年（H.12）頃より普通科の職員会議で対策の協議を重ね、2001年から合同職員会議（中・普・音つまり学校全体の会議、「合職」と呼んでいる）の議題に上るようになった。理事会との連絡をとりながら、合職で何度も検討を重ね、数人の委員を選び、委員会が数次にわたって作られ、検討を進め、

音楽科 → 「音楽専攻コース」 現行の体制

普通科 → 「音楽教養コース」 音楽教育を中心

とした幅広い音楽を謳ったコースに  
といった案が考えられた。しかし理事会の返答は  
音楽科 → 現行の体制

普通科 → 社会一般でいう「普通科」へ  
であり、その意向を受ける形でついに2002年  
（H.14）3月4日の合職で、2004年度4月「新  
普通科」を発足させることに決定した。

### 始動

「新普通科」の発足に当たり、2003年度（H.15）の教員の配置を改めることになった。従来、コース間の教員の移動はほとんどなかった本校の歴史からしても、このプロジェクトは大きいものだった。すなわち2003年1月17日の合職で「新普通科」スタッフと同時に「新中学」「新音楽科」のメンバーも決められた。新普通科は校務主任（村田ひろみ）をはじめ、国語2、社会1、数学1、理科1、体育1、英語2人の計8人となった。

この日以来、「新普通科」メンバーによる頻繁な会議が持たれ、教育課程、各種講習、授業期間、特別行事、入試内容、音大への推薦制度、特待生制度など基本的なしくみのことから、教員の校務分掌、担任の配置のほか、『学校案内』や『リーフレット』といった冊子類の作成、説明会の開催、中学校や学習塾への宣伝などの広報まで、まさに新たに学校を作るような勢いであった。そのためその時点で所属しているコースの職員会議のほか、2003年1月のメンバー決定から「新普通科」の会議は、1年と少しの間に72回を数えた。これらの会議のなかで

「男女共学の進学校」

「1クラス30人の2クラスという少人数体制」

「豊富に設けた選択授業」

「ひとりひとりを大切に扱う丁寧な指導」

などの眼目を作り上げた。

一方、大きな変更であるため、東京都への申請などの事細かなやりとりは、事務局が担った。普通科教員と事務長とで何度もやりとりをし、そして事務長はじめ事務局が東京都へ出向いては何度もやりとりを繰り返した。高校同窓会へ連絡し、承認を得、さらに在校生とその保護者へ発表したうえで、ついに学校の外に向かって新体制の発足

をインフォメーションしたのは2003年5月となった。

### 宣伝開始

公表が5月であるので、外部への宣伝、生徒の募集活動もここらとなった。どのように広報活動をすればよいのか、今までこの類の活動にはまったく無頓着であったので、メンバーにとってはすべて一からの始まりだった。

その72回に及ぶ会議の中でも検討し、その後の検討も重ね、外部への説明会を大幅に拡大することにした。生徒・保護者向けの説明会を3回、中学校の先生向けのものを1回、そして塾の先生向けを2回設けることにした(表を参照)。そのために、コンピューターとスクリーンを用いた説明を考え、手作りの『説明会資料』という冊子の作成に入った。リハーサルも行い、批評し合いながら、慌ただしく進めていった。

もちろん説明会には「お客さん」が来てくれないとれない。われわれの外交活動「外回り」も開始された。最初の説明会が5月30日(金)の塾説明会である。放課後や土曜日を利用して、まずは塾へ飛び出した。おおよその計画(地域・日程)はあるものの、行けるところから行ける人が行くという状態だった。

記録によれば塾訪問の皮切りは5月10日(土)だったようである。私(秋場)も5月12日(月)の午後、木崎先生と二人組で自動車を使い、聖蹟桜ヶ丘駅から塾回りを始めた。木崎先生が運転し、私が地図と塾のリストを持ち、様々な街の看板を見上げながら塾を探し、予約も無しに飛び込むことになった。こちらから説明するのも初めての経験である。ある塾では「ハイレベルの大学を目指すには難しい」と批評されたり、ある塾では「塾生に配るからパンフレットを人数分、50部ほど欲しい」と注文されたりとか、色々なやりとりをしたことを冷や汗と共に思い出す。

そして塾説明会の翌日5月31日(土)には、受験生・保護者対象の第1回の説明会を行うため、同様にほうぼうの中学校へも訪問を開始した。5月12日(月)の午前、木崎先生と甲田先生の2人で国立市・府中市へ出かけたのが最初である。そ

して立川市、武蔵村山市、東大和市など近所の中学校からリストを塗りつぶしていった。

そして説明会当日の5月30日。28校29人の塾の先生の来校を得た。約1時間の説明会。まだ決定し切れていないため話せないことも多く、説明の言葉には硬さが目立ち、音楽を流すことも思いつかず、十分な成功とは言えないが、無事に終わったというべきであった。

すぐ翌日には第1回の受験生向けの説明会を行った。「中学生がいったいどれくらい来てくれるだろう。」まったく感触がつかめず、不安と緊張のなかの開催となった。しかも朝から激しい風雨で季節はずれの嵐が吹き荒れ、「だれも来ないかもしれない」というおもいがよぎるなか、生徒18名、ご家族を含めて約30人ほどの方が来校した。一同、ほっと胸をなで下ろしたのであった。

### 夏から秋

こうして始まった宣伝・募集活動は、数度の説明会と、度々の中学校・塾への訪問を重ねながら進んでいった。特に9月の頭からは少しでも時間を作って訪問に出かけ、なるべく多くの学校にインフォメーションをしなければならなかった。とはいえ日常の授業、生徒指導がおろそかになってしまえば本末転倒である。また「普通科が新しくなる」ということは現在いる在校生にとっては複雑な思いもするに違いない。その生徒たちには一層のできる限りのことをしてあげたい。そのように考え、授業・生徒指導を今まで以上にこなしながら、新普通科のしくみを創設するための会議と作業をしながら、慌ただしく忙しい毎日だった。実際、しなければならないことは山のようにあり、必死に走り抜けた日々だったと思う。

その後の説明会には参加者も増加していき、内容にも少しずつ改良を加えて数回を重ねるうち、「慣れた」とまではとても言えないものの、当初の五里霧中の状態からは一歩進み、秋の終わり頃には少し自信を持って作業を進めていっていたように思う。

## 新普通科スタート

12月の推薦入試相談(各中学校の先生が本校へ来校し、個々の生徒の推薦入試の相談を行うもの)、1月の推薦入試、2月の一般入試(第1回、第2回)と、1つ1つのステップを大きな問題もなくこなしていくことができた。かつての「音大を目指す普通科」と違い普通の進学校となったことで、第一志望の受験生の割合は小さくなったため、入学者の数は、3月半ばまで決定しない形だった。

3月24日(水)新入生説明会。普通科第42回生、とはいえ実質、新生普通科の第1回生である。男子4名、女子45名、合計49名が集まった。普通科史上初となる男子は4人となった。もちろん非常に少ないが、気だてのよいしっかりした4人にわれわれ教員らは一通り満足な気持ちだった。新普通科はここに49人の生徒を得て、4月からのスタートとなった。

(秋場 健志)

## 2003年度 普通科学校説明会一覧

塾対象説明会(第1回)

5/30(金) 11:00~

受験生対象説明会(第1回)

5/31(土) 14:00~

受験生対象説明会(第2回)

6/21(土) 14:00~

塾対象説明会(第2回)

9/16(火) 11:00~

受験生対象説明会(第3回)

9/27(土) 14:00~

中学校先生対象説明会

10/4(土) 14:00~

受験生対象説明会(第4回)

11/8(土) 14:00~



### 3号館ができるまで

本校は今年で創立60周年を迎えた。この60年の歩みを振り返るとき、校舎を抜きには語れない。3つの校舎は、そのいずれも建てられた時期が異なる。それぞれの校舎が、その当時の本校の事情を反映している。校舎の歴史はそのまま本校の歴史でもある。一番新しい校舎が3号館である。その3号館もすでに7年目を迎えている。3号館の建設までには紆余曲折があった。それは、少子化の時代に対応すべく、本校存続のために将来のあるべき姿を模索して、何度も議論を重ねた私たちの苦悩の日々と重なる。

1999年（H.11）の秋、理事会より私たちの長年の悲願であった2号館建て替えの話があった。しかし期待に反し、建ぺい率や近隣の日照権の問題、そして特に費用の面からも、現在の2号館と同じ規模の建物を建てることはむずかしいとのことであった。結局2号館を残しつつ、その上で新校舎を建てるか否かを問われた私たちは、新校舎を建てることに決めた。一方老朽化しつつある2号館は、特に耐震性の点から地階を埋めざるを得ないことがわかった。したがって、新校舎の最初のおおまかな案は、地階の図書館や家庭科室の移設、音楽室の充実、学習指導要領の改訂に対応した情報教室の新設などであった。

2000年（H.12）1月、第1次校舎建設委員会が発足し、第1回目の委員会が開催された。委員は、校長、主事、校務主任、理事、事務長などで、コンサルタントとして前川建築設計事務所が加わった。その後5回、計6回の委員会が開かれ、11月には同事務所によって、新校舎の<sup>\*注1</sup>基本構想案がまとめられた。その中で、2号館から移転する図書館・家庭科室、情報化に対応する情報教室・視聴覚室、生徒の生活の充実を図る生徒ホールに加えて、音楽室・リトミック室、そして多目的教室が提案された。

これを受けて12月、学内に新たに図書館、生徒ホール（周辺環境も含む）、家庭科室、情報教室関連、音楽室関連の5つのプロジェクトが組織された。また、これらのプロジェクトのまとめ役を担う教員と理事関係者、校長、主事、及び前川

建築設計事務所からなる第2次校舎建設委員会が設けられた。

各プロジェクトは、各施設について理想とする空間と必要な備品・設備等についての検討を重ねるとともに、他の学校施設の視察で見聞を深め、各施設のイメージを創り上げていった。

各プロジェクトのまとめ役は、そこで話し合われた内容を委員会で報告し、また委員会での協議内容を各プロジェクトに持ち帰り、さらに検討を重ね、それをまとめるという重要な役目を担い、基本設計を進めるうえで中心的役割を果たした。

委員会は、計5回開かれ、各プロジェクトの内容をもとに全体的な観点からの検討が加えられた。その途中経過は、必要に応じて職員会議にも報告され、議論が必要な事項はその都度話し合わせ、その結論は、また委員会へと伝えられた。

こうして2001年（H.13）5月、一歩進んだ<sup>\*注2</sup>基本設計説明書ができあがった。その中では、まず施設の配置が決められた。1階には図書館と生徒ホールが設置された。2階には被服室、調理室、パソコン室、情報教室が置かれた。そして、3階には音楽室（現Aスタジオ）、リトミック室（現Bスタジオ）、多目的に使える視聴覚室が配置された。また、各教室の広さ、内容、備品等についての大枠も決定された。

これ以降、各プロジェクトは、前川建築設計事務所と共に設備・備品等をより具体的に選定し、その配置位置を決めるなどの打ち合わせを重ねていった。そして同事務所によって図面化されたものを基に工事費が予算化された。

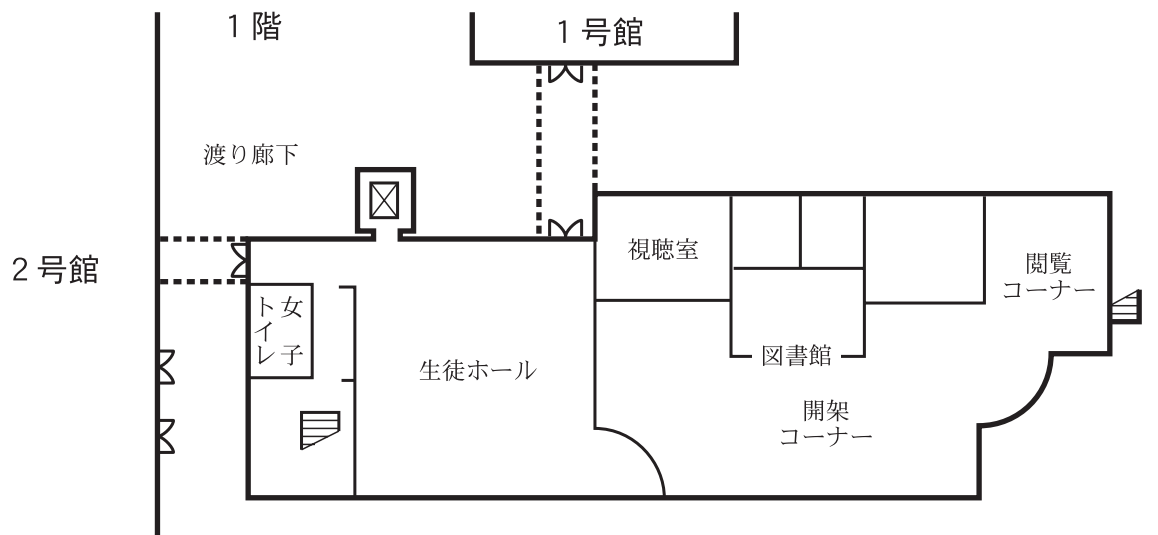
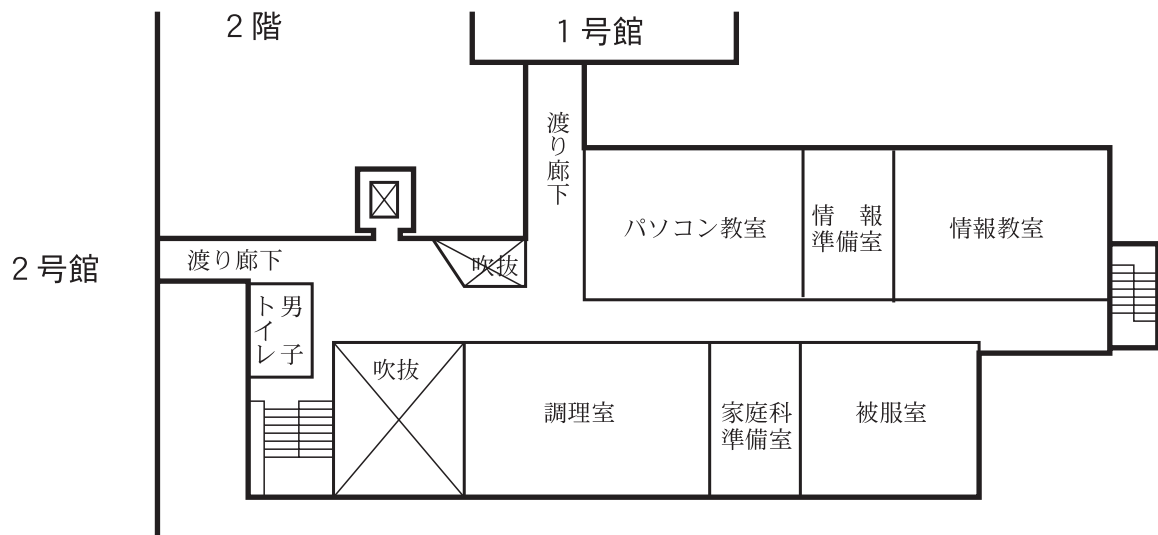
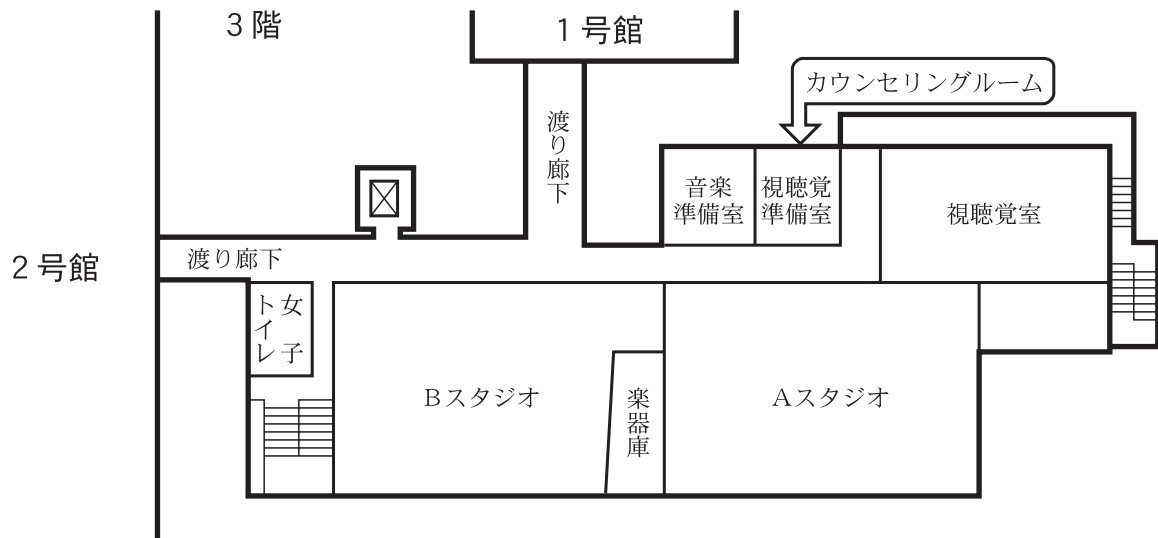
その後、エレベーターや駐車場の件など詳細が未確定の事項が、職員会議を経て確定された。

2002年（H.14）2月、地鎮祭が行われ、バコーレーションによって新校舎が着工された。そしてその約1年後の2003年（H.15）3月、新校舎の竣工式が行われた。2号館建て替えの話があったから、約3年半の歳月を経て、ようやく新校舎が完成したのである。（篠木 秀一）

\*注1 「国立音楽大学・中高校舎建設プロジェクトー中高校舎増築基本構想案ー報告書」

\*注2 「国立音楽大学・中高校舎建設プロジェクト 基本設計説明書」

# 校舎 3号館



# 新時代



## 創立60周年に寄せて「音高と私」 岡部 徳三 (元音楽科教員 元校長 音10回生)

私が国立音楽高等学校の門をくぐったのは1956年（S. 31）4月のことです。1959年（S. 34）に卒業し国立音楽大学へ進学、そして大学を卒業し1963年（S. 38）4月に専攻科へ入学した同年5月から音高における教員としての仕事が始まり、2007年（H.19）3月までの長い年月の留年を繰り返し、やっと卒業する事が出来ました。

半世紀と数年、国立の街へ通い続け、学校のみならず、街の人々とのふれあい等、卒業後も思い出す事が数多く有ります。生徒としての学校生活では、責任を持った行動の大切さを、仲間から、先生方から、そして職員の皆さんから教えられ、その後の大きな財産になりました。生徒の立場から教える立場に変わっても、自分と同じ目標を持って入学して来る生徒達が、責任を持って行動し、他人を理解し、志を高く持って学校生活を謳歌できるようにと考えてきました。

1963年（S. 38）4月に、多摩地区に数少ない女子に対する普通教育の学校（コース）として普通科が併設された事は、大きな喜びでした。結果として長い歴史の中で、音楽を学び、国立音楽大学の教育系学科への推薦入学が主流になり、音楽家を目指す専門的な音楽ばかりでない、教育者の育成という他の分野でも優れた人材を育てることができました。

まだ校舎が富士見台に在った頃、非常に大切な事を確認する場面に遭遇しました。と言うのは、普通科の先生と校庭で立ち話をしていた時に校内放送で「普通科の〇〇さん。音高の〇〇さん。」と呼びかけていたことです。それを聞かれた先生が「今の放送どう聞かれましたか」と云われ、私自身思いもよらなかったのに、直ぐに返事が出来ないでおりましたら、「同じ学校の生徒なのに、普通科と音楽科を差別しているのではないか。普通科の生徒達は私達も音高生なのにとっている。」と云われた時には、冷水を浴びたかのような衝撃を受け、自分も含めてこれではいけないと気付き、変えていかなければと意識し行動してきたことを



2006年 卒業アルバムより

思い出します。

主事、校長へと立場が変わり、中学・高校に対し責任を持って運営する立場になり、教育面では、附属校としての役割の確立と向上と云う目標が主眼となりました。中学・高校では創立以来、専任教員は数例を除きその所属を異動することは有りませんでした。この目標を達成するために校種・コース間の異動を実施することで、中高6年間における教育面での一体感の創出に傾注しました。その最初の年には、普通科と音楽科が一つの学校であるという認識の下に、校名が附属高等学校となったことで、早期教育の重要性を掲げ、附属各校を創設された先生方の目標が実体として形成されたのではないのでしょうか。

この時、普通科は時代の流れから共学となり、前にも述べたように、教員の交流も実施しました。このことが、これからの教育活動の中で必ずや良い結果に導いてくれることを信じて疑いません。

同窓会についても、設立当初から関わりを持たせていただきました。最初は音楽高校同窓会として発足いたしましたが、併設された普通科の卒業生が送り出された時に、普通科にも別に同窓会が設けられることになりました。理由がはっきりしないまま、数年前まで別々の組織として運営されてきました。その後、ある年の総会に招かれていた席上で、「同窓会は別々でなく、一つにするのが自然なのではないか…」と話をさせていただいたことが有りました。普通科と音高ではなく、音高普通科と音楽科を併せて一つの学校の卒業生の会にすることが自然な形と云う事です。これも私の在任中に、無理な部分もあったかと思いますが、

音高同窓会として新生、発足することが出来、今後は、卒業生の皆さんが協力し合って、発展させて下さると思っています。

以上、在任中には多くの人々の協力によって様々な問題の解決が成されたことは私の大きな喜びでありました。

以下に、私にとって忘れてはならない掛け替えのない貴重な指針を与えて下さった先生方の教えをまとめてしたためておきます。

野村茂先生は「音楽と他の勉強との調和、そして、自由とは何か。」ということをお教えくださり、更に「音楽は時間の芸術である。音楽を志す者は時間にルーズであってはならない」という貴重な教えを授かりました。その頃の野村先生の時計が常に5分進んでいたことを思い出します。

有馬大五郎先生からは「音楽学校とは何か」更に「音楽を聴く事が大切であり、理論はその後に続いているもの。感性を育てるには、幼少の時期が大切である」という教えを授かり、中館耕蔵先生からは国立の姿勢について「特殊教育をするのではなく、自然に音楽を身につけさせ、広く音楽を学び、演奏家や、教育者になる人と、それを支え、音楽を理解する人を育てることが目的である」ということを教えられました。そして海老澤敏先生からは「高校から大学への発信、高校で学んだ事が生かされる魅力ある大学とは何か、を言える様な高校を目指す事」等々、多くの教えを授かり、また、その教えを守り過ごしてきたと自負しています。

時代の変化と共に少しずつ学校も変わってきましたが、「くにたちで学びたい」という「志を持った若人達が集まるからこそ学校が成り立っている」という事を大切に、「音楽を楽しみながら身に付け、感性豊かな人間形成を実現する」ということを普通科・音楽科、そして中学で学ぶ人達の目標とされるよう望みます。

私達の育った音高は、成績・点数を求めるだけの学校ではなく、各自が自分なりに努力して成長する場所でありました。

生徒・教師・校長と立場が変わっても、常に感じていた事は、私達の活動を支えてくださった事務職員・用務職員の皆様への感謝です。自由と云

う名の下に、私達の勝手、気ままを見守り、日頃の学校運営に協力していただいた事は、大きな学校の財産でありました。是非今後も今まで通りであっていただきたいと切に願っています。

私も卒業して2年と数ヶ月過ぎました。在任中に3号館の建設を含め、土台は整いましたが、これからは重要であり、大変な時であろうと思います。今私の手元には、私と同じ年に卒業した、普通科が共学になって最初の卒業生、保護者の皆さんからいただいた手刺繍で作られた、私だけの特別な卒業証書が有ります。心のこもった贈物で、私の宝物であり、感謝しております。私にとっては、退任ではなく卒業なのです。

以上、私の心に大きく残っている思いのままをしたためました。8回生として入学してから現在迄、あっという間に過ぎてしまった様に感じています。ヨーロッパからの音楽を中心にして学んでいる学校は、今後どう進んでいくのでしょうか。

最後に、私からのエールをしたため結びとします。

「くにたち」は、自由で、何ものも拒まない広い心を持っているはずです。何ものでも受容する懐の深さを持っているはずです。過去の因習に囚われず、臆せず外に出ることで見聞を広め、更なる発展を目指して、この困難な時代を乗り越えて走り抜けてもらいたいと切に願っています。



富士見台校舎

## 校名変更

3号館の稼働開始、普通科のカリキュラム改編・共学化と共に、「音高」の正式名称が変更された。P.T.A.と同窓会の同意のもと、1975年（S.50）以来の校名「国立音楽大学附属音楽高等学校」は、2004年（H.16）4月より「国立音楽大学附属高等学校」と改められた。

設立当初より、本校は音楽技術のみの追求ではなく、生徒一人ひとりを人間性あふれる人材に育成することを理念として掲げてきた。変化し続ける社会の要請、ますます多様化する生徒の個性と希望に応えるべく、大きな改革を始動させたこの年、これまで校名の中に二つあった「音楽」の文字を一つにすることで、学びの場としての本校のありようを、今まで以上に強く打ち出し、その実践を目指していくこととなった。

（福田 泰啓）



2004年3月まで



現在

## 招待演奏会

第1回招待演奏会は、学校法人国立音楽大学創立80周年を翌年に控え、記念行事の1つとして、2005年（H.17）10月に開催された。

記念行事の企画に際しては、「持続性があること」「アカデミックなものであること」等の指針とともに、他の音楽学校とのつながり、地域とのつながりも考慮された。次の時代を担う若い世代に音楽体験の機会を設け、地域社会・住民との交流の場を創出する、そうした主旨でスタートしたのである。

招待演奏会には、首都圏の音楽課程のある高等学校から、各校選りすぐりの演奏者が参加している。主な出演校は、洗足学園高等学校・東京音楽大学付属高等学校・東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校・東京都立芸術高等学校・桐朋女子高等学校音楽科・武蔵野音楽大学附属音楽高等学校、それに本校を加えた7校である。翌、2006年（H.18）は、全国音楽高等学校協議会（全音高協）の全国大会とあわせ、招待校を東日本にまで拡大し、規模を広げて実施した。また、2008年（H.20）

には、カニジウス高校（ドイツ）の客演も得ている。

会場は一橋大学の兼松講堂で、国立市民や本校関係者を中心に毎回多くの聴衆を集め、好評を博してきた。演奏会のお知らせは国立市の広報に掲載され、ポスターやチラシの配布・掲示も、国立楽器をはじめ多くの近隣商店の協力を得ている。上原前市長・関口現市長の「国立を音楽あふれる街並みにしたい」という気持ちが国立市全体に広がり、回を重ねるごとに、地域に根づいた演奏会として定着してきている。

（岩松美代子）



チラシ

第1回 2005年10月1日 一橋大学兼松講堂

I. ヴァイオリン・ソナタ 第3番

ハ短調 第1楽章……………E. グリーグ

星野 沙織 (ヴァイオリン)

前田 瑛美 (ピアノ)

国立音楽大学附属高等学校

II. 「詩的にして宗教的な調べ」より

第7曲 葬送……………F. リスト

吉田 恭子 (ピアノ)

武蔵野音楽大学附属高等学校

III. ヴァイオリン協奏曲 二短調

第1楽章……………J. シベリウス

須山 暢大 (ヴァイオリン)

山路 昌平 (ピアノ)

東京都立芸術高等学校

IV. ヴァイオリン・ソナタ 第2番

イ長調 作品12-2…L. v. ベートーヴェン

迫間野百合 (ヴァイオリン)

西原 侑里 (ピアノ)

桐朋女子高等学校音楽科

V. マリンバ・スピリチュアル ……三木 稔

亀井 博子 (マリンバ)

佐藤 彩夏 (マルチパーカッション)

洗足学園高等学校音楽科

VI. メフィスト・ワルツ 第1番

「村の居酒屋での踊り」……………F. リスト

富永 愛子 (ピアノ)

東京音楽大学付属高等学校

VII. 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ

第2番……………E. イザイ

澤 亜樹 (ヴァイオリン)

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校

第2回 2006年11月17日 一橋大学兼松講堂

I. バラード 第2番 口短調……………F. リスト

赤松 理恵 (ピアノ)

国立音楽大学附属高等学校

II. 『セヴィリアの理髪師』より

「今の歌声は心にひびく」…G. ロッシーニ

本山明日香 (メゾ・ソプラノ)

平形 彩芽 (ピアノ)

高崎経済大学附属高等学校

III. スカムラーシュ……………D. ミヨー

松浦 美香 (サクソフォーン)

菅原 望 (ピアノ)

常磐木学園高等学校

IV. トランペット協奏曲

ハ長調……………T. アルビノーニ

荒木 優太 (トランペット)

今川 裕子 (ピアノ)

山形県立山形北高等学校

V. プレリユードとフーガ

……………F. メンデルスゾーン

池田 茜 (ピアノ)

北星学園女子高等学校

VI. 4つの楽しみ 他……………J. ターナー

野崎 剛右 (リコーダー)

長野県立小諸高等学校

第3回 2007年10月8日 一橋大学兼松講堂

I. シャコンヌ……………J. S. バッハ=ブゾーニ

斎藤亜都沙 (ピアノ)

国立音楽大学附属高等学校

II. ヴァイオリン協奏曲 第1番

ニ長調 第1楽章……………N. パガニーニ

森岡 聡 (ヴァイオリン)

阿部 大樹 (ピアノ)

東京都立芸術高等学校

Ⅲ. ピアノ三重奏曲 第1番 二短調  
 第3楽章・第4楽章 F. メンデルスゾーン  
 石井 楓子 (ピアノ)  
 弓 新 (ヴァイオリン)  
 水野 由紀 (チェロ)  
 桐朋女子高等学校音楽科

Ⅳ. 伝説 ……H. ルニエ  
 影山 梨乃 (ハープ)  
 東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校

Ⅴ. 映像 第2集 ……C. ドビュッシー  
 1. 葉末を渡る鐘  
 2. そして月は廃寺に沈む  
 3. 金の魚  
 相原絵利那 (ピアノ)  
 武蔵野音楽大学附属高等学校

Ⅵ. カルメン幻想曲 作品25 ……P. サラサーテ  
 堀江 晋 (ヴァイオリン)  
 菊池 邦彦 (ピアノ)  
 東京音楽大学付属高等学校

第4回 2008年10月12日 一橋大学兼松講堂

I. プレリユード  
 カデンツとフィナーレ ……A. デザンクロ  
 中島 諒 (サクソフォーン)  
 角増 柊 (ピアノ)  
 国立音楽大学附属高等学校

Ⅱ. 序奏とロンド・カプリッチョーソ  
 作品28 ……C. サン＝サーンス  
 武田 杏奈 (ヴァイオリン)  
 遠藤和歌子 (ピアノ)  
 洗足学園高等学校音楽科

Ⅲ. 映像 第2集 金色の魚 ……C. ドビュッシー  
 スケルツォ 第4番 ホ長調  
 作品54 ……F. ショパン  
 朝倉すみれ (ピアノ)  
 東京音楽大学付属高等学校

Ⅳ. 弦楽四重奏曲 第3番 ヘ長調  
 作品73 ……D. ショスタコーヴィチ  
 第2楽章 モデラート ノン トロッポ  
 第3楽章 アレグロ ノン トロッポ  
 Omar Francisco El jach Huang  
 (ヴァイオリン)  
 Laura Schwabe (ヴァイオリン)  
 Jan Kopitzki (ヴィオラ)  
 Teresa Buechsel (チェロ)  
 Canisius - kolleg Berlin

Ⅴ. 「サイド・バイ・サイド」  
 打楽器ソロのための ……北爪道夫  
 梅原 大樹 (打楽器)  
 武蔵野音楽大学附属高等学校

Ⅵ. ピアノ三重奏曲 第1番  
 作品8 ……J. ブラームス  
 会田 莉凡 (ヴァイオリン)  
 上村 文乃 (チェロ)  
 廣瀬 加奈 (ピアノ)  
 桐朋女子高等学校音楽科

Ⅶ. バラード 第4番 作品52 ……F. ショパン  
 江沢 茂敏 (ピアノ)  
 東京都立芸術高等学校

Ⅷ. 2つのヴァイオリンのための無伴奏ソナタ  
 作品56  
 第1楽章 アンダンテ カンタービレ  
 第2楽章 アレグロ  
 第3楽章 コモド  
 第4楽章 アレグロ コン ブリオ  
 柳田 茄那 (ヴァイオリン)  
 鶴野 紘之 (ヴァイオリン)  
 東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校



プログラム

## ソロ・アンサンブル 定期演奏会

### 1. より完成度の高い演奏会を求めて

本校の音楽会のうち、「くにたち音楽会」の「ソロ・アンサンブル」の部分について、完成度を高め、積極的に外部にアピールして行くための協議が、「音楽部会」で2003年（H.15）頃からさかんに行われるようになった。そこで問題となった点は以下のようなものであった。

#### ①所要時間

ソロ・アンサンブルだけで3時間を大きく超える回もあったが、専攻が増えていく中では（電子オルガンや中学校の管打楽器等）スリム化しても2時間半が限度。しかしこれでも一般的な目安からすれば長い。

#### ②プログラム

各専攻生徒数に見合う数の生徒を中学・高校音楽科から選出しても最低2時間半を要する上に、出演生徒1人に与えられる時間は5～6分と選曲の幅が限られ、これらが並ぶプログラムは演奏会というより「発表会」に近い様相を呈する。

#### ③会場のキャパシティ

プロの演奏家であっても、細かなニュアンスを表現しながら最大の効果をもって演奏できるのは数百人規模の会場のはずで、当時会場としていたアミューたちかわ（立川市民会館）大ホールは、まだ成長期にある生徒がソロで演奏するには大きすぎ、適切とは言えない。

#### ④開催日、時間帯

会場の確保、生徒の安全などの事情により



2008年演奏会より

平日午後開催となることが多いが、生徒の家族や本校入学希望生徒などには来ていただきにくい状況。

いずれの問題も「全校生徒が参加（鑑賞）する」原則を守る限り、解決が困難なものであったが、そのような中2004年（H.16）秋、当時の岡部校長から、くにたち音楽会の「ソロ・アンサンブル」の部とは別に「新音楽会」が提案された。この構想は、技量のある生徒に十分な演奏時間を与え、完成度の高い演奏会を外部に向けて積極的に公開して行くという新しい発想によるもので、音楽部会や職員会議が取り組んでいた諸問題を一気に解決するものでもあった。

### 2. 開催準備

おりしも学園創立80周年にあたる2005年秋に第1回の演奏会を立ち上げるべく制作委員会が設置され、開催に向けて動き始めた。制作委員会及び音楽部会で確認された新演奏会の骨子は次のようなものであった。

- ①都区内の優れた音響効果を持つ500名程度のホールで行う。
- ②日曜・祝日の午後開催を原則とし、入場無料で行う。
- ③1名（1組）15分程度の持ち時間とし、6～7組を出演させる。
- ④本校主催の音楽会のうち最も高いレベルを持つものと位置づけ、2005年（H.17）以後年1回、継続的に行う。
- ⑤当面音楽科生徒のみの出演とする。



2008年演奏会より

⑥出演生徒は定期実技試験などから推薦された2, 3年生の中からオーディションにより選出する。審査委員会は全専攻の教員により組織される。

⑦生徒に鑑賞を義務づけず、広く一般から集客する。

音楽部会では、術科教員が実際に演奏した経験などからいくつかの候補となるホールの名前が挙げられた。それを受け、第1回の制作委員長となった荒木主事を中心に早急に調査・視察を行った結果、文京区にある「トッパンホール」が、日程・音響効果その他の条件に、当時の段階で最も適切であると判断され、第1回演奏会は2005年(H.17)11月5日(日)と決定した。また、演奏会名は「国立音楽大学附属高等学校 第1回 ソロ・アンサンブル定期演奏会」と決定された。

第1回ソロ・アンサンブル定期演奏会の出演者を決定するオーディションは、同じく2005年から学園創立80周年事業の一環として新たに開催される「招待演奏会」の出演者を決めるオーディションと兼ねて行うこととなり、前年度学年末実技試験の結果推薦された11名(組)の生徒により2005年6月13日に行われた。審査は校長を委員長とし、校長より任命された7名の審査員が行い、6組の出演者が選出された。



2008年演奏会より



2008年演奏会より

### 3. 第1回定期演奏会

晩秋の陽射しも穏やかな2005年11月5日(日)、演奏会当日を迎えた。トッパンホールはソロや少人数のアンサンブルに最適な残響効果を持つだけでなく、ホールエントランスや廊下の壁や床の材質に至るまで厳選されており、シンプルで洗練された格式を持つ東京でも有数の優れた会場である。また楽屋の広さ、室数、設備ともに十分で、会場専属スタッフにも恵まれ、申し分ない環境であった。

各出演者は熱のこもった演奏を繰りひろげ、質の高さに感心されたホール担当の方から、会場確保について優先的に扱うことをご提言いただくほどであった。

### 4. 継続

2005年の第1回以降、第4回まで継続して毎年秋に定期演奏会を開催した。どの回も演奏のレベルは高く、本校への入学希望者をはじめとする外部への周知も滲透してきた感もあったが、約400名の会場キャパシティに対し各回の入場者は200名から250名と、残念ながら伸び悩む傾向にある。トッパンホールはひとたび会場に入れば格調・音響ともに申し分ないが、交通の便にやや難があることは否めない。他の演奏会との開催時期の調整も含め、さらに充実したものとして継続されていくことが望まれる。

(米持 隆之)

## 音楽科・普通科同窓会の 統一について

五十嵐 稔

(同窓会事務局長)

中学校・音楽科教員 音36回生)

音楽科同窓会は1960年(S.35)、普通科同窓会は1966年(H.41)に発足されました。別々にスタートした同窓会ですが、創立50周年記念行事(1999年(H.2)に普通科・音楽科合同で行った)を期に統一へ向けて動き始めました。

2003年(H.15)11月、当時の岡部校長・小笠原会長(音楽科)・玉城会長(普通科)との話し合いが行われ、学校制度改革に伴い同窓会の一本化を目指すことを討議しました。また学校法人からも「2006年(H.18)7月までに新同窓会の発足を」との意向を受け、2005年6月より音楽科・普通科で協議が始まり、2006年7月22日に新同窓会が誕生いたしました。発足するに至る経緯は下記の通りです。

会議の日程と主な内容

2005年(H.17)

6月29日 第1回合同委員会

○組織・会則を新しくする必要があるため「検討委員会」を設置し双方の同窓会より委員を選出。

○2006年7月22日に第1回新同窓会総会を行い、発足することを決定。

7月13日 第1回検討委員会

○双方の意見を出し合った結果、両同窓会の会則や考え方に隔たりがあることを確認。今後更に話し合いを進めることになった。

7月23日 第2回検討委員会

○新体制へスムーズに移行するため理事は、音楽科から28名、普通科から14名を選出。任期は2005年7月から次期選挙まで。次期選挙の時期については未定。

8月3日 第2回合同委員会

○常任理事会・理事会・評議員会の定義を確認し合う。

10月12日 第3回合同委員会

○新会則案の完成。次期選挙の時期を2007年7月とする。

2006年(H.18)

2月4日 第1回合同理事会

○音楽科28名、普通科14名の新理事候補による初めての会議。

自己紹介。新常任理事候補の選出。第1回合同総会へ向けての話し合いを進める。

4月5日 第2回合同理事会

○年間行事などの確認。総会準備。

6月5日 第3回合同理事会

○予算案の確認。役員候補の選出。

## 国立理論ソルフェージュ教育の未来 ～六十周年を迎えるにあたって～

本校は今年開校六十周年を迎えることとなった。時代の流れに伴い世の中のニーズが変化していく中で、多くの価値あるものが消えていった。またバブル崩壊後の景気低迷状態の停滞が、私学の存続を非常に厳しい状況に追い込む中であっても、本校が還暦を迎えられたことは大きな喜びである。六十年という歴史を造り上げることができた理由は幾つかあるだろう。その一つに、経験的学習、即ち経験則より体得した感覚をもって学習とする

ことを主流とする本校の教育体制が、高度成長期に、形に見えるもののみ価値を見ようとする世相と相反する立場でありながらも、人々の「憧れ」に応えて社会に融合できたことが挙げられよう。そしてそれにより、本校は今に至る発展を遂げてきた。しかし世の中は、方法論を根本からは改正しにくい学校制度を尻目に、独自の方法論の組み立てに成功した学習塾が、皮肉にも教育の主導権を握り、受験戦争の過熱する時代へと移行していった。また一方では音楽の多様性や生活における価値観の変容、更にはメディアの劇的な変貌によりもたらされた社会の変化は、「国立」にも従来にはない対応を迫り続けている。かくして伝統を次



世代へ引き継がせる為には、従来を温存する保守では足りず、まさに革新的姿勢が求められているのである。この大きな転換期の渦中であって、音楽学校の有様を理論ソルフェージュの立場から模索し音高の将来を展望してみたい。

先ず、現時点において、「音楽は特殊であり、音楽学校は特別な才能を必要とする特別な教育機関である」という神話はもはや完全に崩れ去ってしまっている。我々が生徒の頃は、その神話の下、音楽力を経験的に習得できない者は音楽には不向きであるという理由を付けられて淘汰されていたが、当時は音楽学校に対する世間の「憧れ」も追い風となって、学校はまだ安泰であった。この頃の本校における理論ソルフェージュの教育方法が、根本的な面からの見直し及び改革がなされてはいなかったにも拘わらず、専攻楽器の演奏テクニックをメカニックに求め高めることで事足りるとされ、音楽学校としての地位は保たれていた。結果としては、経験則で理論的技術を習得できる者を対象とした教育であるから、彼らの音楽力は必然的に質の高いものとなり、その実績が受験生を呼び集めていたのである。

その後、社会情勢の変化によって、世間が塾に代表される教育産業に期待するものと同種ものを音楽学校にも求めるようになり、同時に受験生の層にも同様の現象が現れてきた。つまり経験則の少ない普通の子、即ち方法論を論理的に学習することで技術を身につける姿勢を求める生徒が本校受験生の中にも多くなったのである。学習塾や都立高校などで行われている一般授業と同じ科学的方法、言い換えれば万人に適応できる音楽技術の一般化が要求されるようになったのである。昭和六十年頃から、我々高校の理論スタッフは、いち早くこのことを予測し、経験則で習得していた学習内容の殆どを科学的方法で習得させるべく改革に力を傾注することに徹し、大きな合理化を図るに至った。この方法は、当時はあまりに理路整然としすぎていと周囲に受け止められ、経験則が主流を占める「国立」の中でも違和感と共に、浸透させるまでかなりの時間を費やした。しかしその後「音高方式」は少しずつ認められ、今では他大学の授業でも取り入れられている。

ここ数年はどうであろう。全国的問題である生

徒の学力低下は、我々の新たな課題となった。学力低下の問題点は、方程式が理解できないことでも使えないことでもない。生徒がある方程式を利用して独自の方程式を確立できないことにある。ゆえに理論ソルフェージュ学習において、優れた合理的手段であるはずの「音高方式」が遺憾にも単なる能率的目的として固定化されてしまうのである。しかしこれに別の方程式を宛がい、バイパス的な役割を担わせて繋いだとしても、それはあくまでも一時的な応急措置でしかなく、根本的には何の合理性もなく抜本的改革にはならないのである。なぜなら、音楽はコピーを作るものではなく、独自のものを築き上げるものだからである。今、生徒の理論ソルフェージュ教育に必要なことは二つある。一つは学科の学習を通して養われる能力、即ち例えば英文法を学んだり、数学の方程式を活用して問題を解いたりすることで培われるような、一定の法則に基づいて分析し、答えに辿りつく能力を、理論ソルフェージュ学習と専攻実技習得の中にも活用することである。その為には、指導者が各の専門を超えて、人間が学習する過程を探求し、共通の方法論を作り上げることが必要である。もう一つは、生徒自らが自分の可能性を信じられるような智慧と精神力を、人との繋がりの中で育ませることである。人との繋がりを中心を携帯電話に任せる今こそ、生身の人間との交流によってのみ知り得る人間的感覚が必要であり、その経験から身につけた方法論こそが、最先端技術と言えるのではないだろうか。蛇足だが、後者は結果的に経験則となり、客観的には一見古き時代の「国立」への懐古を思わせるかもしれない。しかし、それは今の時代であって、理論を超えた革新的改革を「国立」にもたらし、「国立」の色を鮮やかな伝統として継承していくであろう。

時代は反対方向へ流れ出すことはない。時代の流れと共に、見えないものに価値を見出し難くなりつつある昨今、音楽学校の位置づけは描きにくい。将来に向け確実な軌跡を示すことで、見えない所産が手にあることを誇れる学校になることを期待する。それこそがまさに本校の発展の姿であろう。国立に学び国立を支える一人として、益々の発展を祈っている。

(山本 康雄)

## 全音高協と音高

全国音楽高等学校協議会（全音高協）は1955年（S.30）12月1日に設立された。設立の中心の一人であった上野学園の石橋益恵氏の「各地に続々と音楽高校が誕生するのに伴い、その協議機関が必要である」（「全音高協のあゆみを振り返って」梅谷進氏：平成8年大会）という考えに立ち、当時、十分な理解を得られていなかった音楽高校が横の連絡を緊密に取り、共に研究を進め情報を交換するために設立されたという。

このようにしてスタートした全音高協は、草創期を経て1964年（S.39）からは、年1回の全国大会を軸に、研究・協議を進めてきた。そして、初期には20校で構成されていた全音高協は、現在、全国のほぼ全ての地域をカバーする82校による組織へと発展している。そして全国大会では、「音楽高校における人格形成」や「現代社会における音楽高校」、「音楽高校の現状と将来の展望」などが複数年に渡って研究協議されてきた。また一方で、レッスンを巡る諸問題、ソルフェージュ、演奏法、音楽理論、音楽史などについても継続的に取り上げられてきた。

こうしたなか音高は永年理事校として、また1983年（S.58）～1988年（S.63）、2006年（H.20）～現在まで、理事長校として全音高協と関わってきた。

また、1969年（S.44）、1996年（H.8）、2006年（H.18）には全国大会を開催している。この内、2006年大会では、教職員が一体となって行った運営に、参加者から多くの賛辞を寄せていただくことができた。

全音高協の大会や理事会で醸し出される温和で友好的な空気は、音高のそれと似ている感じがする。永年に渡って、会の議論の方向を、岡部徳三前校長が芸大附属の海老原前副校長らと共にリードしてきたこともその一因なのだろうか。いずれにしても、音高の先人たちの全音高協での活躍については、校内でももっと知られてよい気がする。

大会テーマの変遷を見ると、近年は「多様化時代の魅力ある音楽高校の在り方」というような内容が増え、「いかに生き残るか」という深刻な討議も多い。行き先が見えづらい時代、全音高協は、そしてこうした時期に理事長に選出された音高は、正念場を迎えているということになるのだろうか。

（荒木 泰俊）

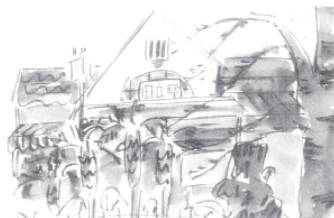


1996年全国大会 全体会

平成 18 年度

全国音楽高等学校協議会

### 全国大会記録



主催：全国音楽高等学校協議会

期日：平成18年11月17日（金）・18日（土）

会場：国立音楽大学附属高等学校

〒186-0005 国立市西2-12-19

Phone: 042-572-4111 Fax 042-573-7962

<http://www.kunion.ed.jp>

## 音楽科ブラスバンド部の対外活動

音楽科ブラスバンド部は、創部以来、週2～4日の朝・放課後練習や、夏休みの合宿練習の成果をおもに芸術祭で発表してきました。現在は週3日の放課後練習を行っています。

音高ブラスは専攻楽器を問わず、生徒による指揮を中心にアンサンブルを楽しんでいます。溯ること1997年（H.9）に転機が訪れました。「くにたち文化・スポーツ振興財団」からのお誘いを受け、市内の中学校・高校・専門学校の吹奏楽部が、くにたち市民芸術小ホールに集結した楽しい演奏会「国立市吹奏楽フェスティバル」に、音高ブラス初の校外演奏活動として参加することになったのです。この催しには以後毎年参加させていただき、2009年（H.21）も9月27日に出演することが決まっています。2002年から2005年までは、普通科吹奏楽部との合同バンド「音高ブラス」と銘打って一緒に参加しました。

この演奏会のプログラムは、各団体の演奏だけに終わらず、中学生から社会人まで幅広い年齢層による参加者全員の合同バンド演奏もあるため、毎年部員は、企画が始まる6月から本番の9月末まで、度重なる話し合いや練習を続けます。同じ市内で吹奏楽に取り組む様々な立場や環境の参加者の皆さんと、演奏を楽しみにお越し下さる地域の方々とのふれあいから、演奏以外の様々な面でも成長させてもらっています。

2004年（H.16）7月には、高校生のボランティ

ア活動を助成するための「国際ソロプチミストくにたちSクラブ」認証を受けて、福祉会館にて毎年12月にクリスマスコンサートを行っています。これまではクラブの意向を前面に出した演奏を考えていた生徒も、ご年配の方からのリクエストで「水戸黄門」や「銭形平次」の主題歌がメドレーになった「時代劇スペシャル」や、園児も楽しめるようにディズニー・メドレーなどでプログラムを工夫し企画して、奉仕活動の一端を体験しています。

さらには、2007年（H.19）5月から国立市商工会議所主催による「くにたち花祭り」のイベントにも、中学ブラスバンド部と合同バンドを組み出演するようになりました。一橋大学南門前のステージから、大学通りを行き交う国立市民の休日に花を添えられたら…という想いと、日頃の音中・高の校舎からあらゆる音が鳴り渡ることを受け入れていただいている地域の皆様への、練習報告や感謝の気持ちを込めて演奏しています。

（円山 利絵）



福祉会館でのクリスマスコンサート

## ストリート・コンサート ～高校合唱部校外活動から～

2002年（H.14）12月22日。底冷えする国立駅前には、熱気で溢れていた。この日、あの三角屋根の国立駅舎存続を願う「国立駅前クリスマスコンサート」が国立駅前ロータリーの円形公園で開かれていたからだ。駅前の歩道上には上原公子市長をはじめ多くの市民があつまり、身動きもとれないほどだった。

JR中央線の高架化に伴い、国立駅舎が取り壊

されるという構想は、多くの市民に衝撃を伴って伝わっていた。東京都内で2番目に古い木造建築駅舎であり、関東の駅百選に選出された国立駅舎が、どこにでもあるようなビルに変わってしまうかもしれないことは、年齢も信条も越えた広い層に憂慮されていた、と思う。

コンサートは「赤い三角屋根の会」が主催し、市内で活動するアンサンブルの演奏などの後、音中・音高合唱部がクリスマスソングや「瑠璃色の地球」を歌ってコンサートを締めくくった。

コンサートは、寒い野外で精一杯のハーモニーを聴かせた生徒たちの頑張り、またそれを引き出した小向宏明先生の指揮と星野安彦先生・菊池大成先生のピアノによって大きな反響を得た。その一端は翌23日に朝日新聞全国版1面に掲載された記事によってもうかがうことができるだろう。

このコンサートの半年ほど前の2002年4月6日に、音中・音高合唱部は初めて国立市桜フェスティバルに参加し、大学通りの一橋大学南門前で歌っていた。そして、このフェスティバルが改称した「花祭り」と「クリスマス」のふたつのストリートコンサートには、現在まで常連として出演を続けていて、音中・音高の歌声を聴くのを楽しみにしている方も多いう。近年は、音中・音高ブラスバンド部もこのコンサートで若々しいサウンドを披露している。

音中・音高合唱部は、2004年（H.16）からはクリスマスコンサートと同日に、喫茶白十字を会場として提供していただき、チャリティコンサートを開催して、寄せられた全額を被災地に送ることも続けている。

また2006年（H.18）4月2日には駅構内で行わ

れた国立駅開業80周年コンサートに出演した。国立駅の駅舎は同年10月10日には解体されていたので、記念コンサートはあの駅舎解体前の最後の音楽的なイベントということになってしまった。

あの駅舎は、2006年10月26日に文化財の指定を受け、JR高架化工事完了後には復元されることになっていて、関東の駅百選の選出も取り消されていないという。復元を祝うコンサートが行われ、あの熱気が再現され、その中でもう一度歌声が響く日はやってくるのだろうか。

（荒木 泰俊）



喫茶白十字でのチャリティコンサート

## 合唱部の海外公演

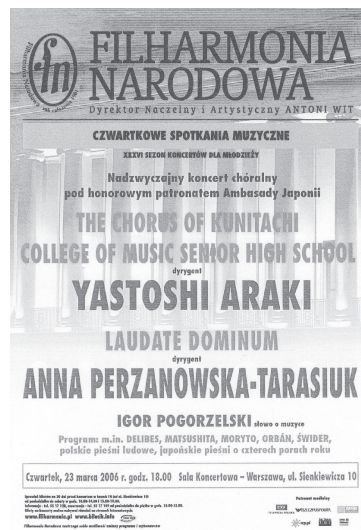
### 歴史的な一歩

2006年（H.18）2月、ポーランドの首都・ワルシャワの街頭に“KUNITACHI”の文字が出現した。このことは音高史を飾る歴史的な一歩だったのではないだろうか。それは、マウリツィオ・ポリーニなど幾多の名ピアニストを世に送り出したショパン国際ピアノコンクール本選会場として著名なポーランド国立ワルシャワ・フィルハーモニーホールが主催する、音高合唱部コンサートのポスターだった。街頭や演奏会場でポスターを見た留学中の卒業生たちから、驚きの国際電話やメールが続いた。

### 初の海外公演

3月23日、「日本大使館後援による特別合唱コンサート」と謳われたコンサートは本番を迎えた。

この日、合唱部初の海外公演のために用意したプログラムは、オルバーン・G「ミサ曲第6番」と「第9番」より、三善晃「唱歌の四季」他だった。合唱部の40名は、これらを荒木泰俊の指揮、菊池大成と星野安彦のピアノ、そして合唱部第2代学生指揮者で、当時ミラノに留学していた板倉知



2006年ワルシャワ公演ポスター

礼と日本から同行した荒木敬子のソプラノソロとで演奏した。

演奏会は、共演したワルシャワ合唱団・フル・ラウダテ・ドミノムの熱演もあり、ほぼ満員のお客様から熱烈な拍手とスタンディングオベーションをいただき、カーテンコールが繰り返され終演した。その興奮も冷めやらぬ中、フィルハーモニーホールより、次の公演への招聘をいただくこともできた。客席の在ポーランド日本大使の小野氏夫妻も格別の思いをされたようだった。

しかし、コンサートは終わってはいなかった。アンコールとカーテンコールを終え、ホールのヴィッツ館長の評価を聞いた後、私はホール控室にいた。壁面一杯に飾られた、伝説的な名演奏家たちのサインや写真に包まれながら、深い安堵感にしばし浸った後、帰り支度を始めた頃だったろうか、スタッフの方から促されてホールに戻ってみると、ステージ上ではすでに片付けが始まっているのに、客席ではまだ多くの方が立ち上がり拍手を続けてくれていた。私は熱いものがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。この時こそ合唱部の、ひいては音中・音高の合唱の方向の正しさが証明された瞬間だったのだ。

翌24日には古都クラクフで、中世以来の永い歴史を誇る名門校・ノヴォドヴォルスキー高等学校講堂でコンサートで行い、立ち見が出る盛況だった。このコンサートでは、「ミサ曲第9番」の“Gloria”演奏直後に、拍手が鳴りやまず、一時演奏を中断することになり、終演時には前日の公演と同様のスタンディングオベーションを経験した。

## 第2回海外公演

合唱部の第2回海外公演は2009年（H.21）3月に行った。

第2回では、招かれたワルシャワだけでなくリトアニアの首都ヴィリニウスでも公演を主催していただくことになった。また生徒の強い意思で、杉原記念館に加え、アウシュビッツ再訪もスケジュールに繰り入れることにした。

演奏旅行は以下のような日程だった。

3月20日、一行36名はポーランドに入国。21日には旧ナチス・ドイツのアウシュビッツ・ビルケナウ強制・絶滅収容所を訪れ、唯一の日本人ガイド中谷剛さんのもと収容所を見学し、「死の壁」

では犠牲になった方々への献花・献歌を行った。

23日にはワルシャワ市のフィルハーモニーホールの『日本・ポーランド国交樹立90周年を祝う演奏会』（主催：同ホール、後援：在ポーランド日本大使館）に出演。ロッシェニ「3つの宗教的合唱曲」や瑞慶覧尚子「白いシクラメン」、福島雄次郎「美しき南の島の歌」等を荒木泰俊の指揮、星野安彦と菊池大成のピアノで演奏したほか、エルスネル国立第2音楽学校エルスネル・コロと合同で、ポーランド語で「森へ行きましょう」を演奏し（指揮：K.ソコウオフスカ）、今回も熱烈な拍手をいただくことができた。

25日には、リトアニアの首都ヴィリニウス市の kongress ホールで、『白いシクラメン～彼方からこだまする声～』（主催：同ホール、後援：在リトアニア日本大使館）に出演、コンサートの標題となった「白いシクラメン」や松下耕「日本の民謡」等を演奏したほか、リトアニア国立合唱団ブレヴィスとG.ヴェニスロヴァス《夏の鳥》をリトアニア語で合同演奏した。（指揮：G.ヴェニスロヴァス）

翌26日には、カウナス市のフィルハーモニーホールにおいて、『杉原記念館改修のためのチャリティー・コンサート』（主催：カウナス市・同ホール、後援：在リトアニア日本大使館）に出演した。演奏会では、合唱部の若々しいハーモニーだけでなく、同行した教員によるソロも大変な反響で、満場の客席では“ブラボー”の声飛び交った。更に、合唱部・合唱団ヴァルペーリスの合同合唱と室内管弦楽団ヴァリペーリスの管弦楽による「瑠璃色の地球・オーケストラ版」初演（編曲・指揮：K.プランチューナス）を行うなど、変化に富んだ演奏会となった。



ワルシャワ公演

滞在中、部員達はワルシャワとヴィリニウスでホームステイを経験し、ヴィリニウス大学日本語学科の学生とヴィリニウス市内を観光するなど現地の方々と親しく交流していた。

## 杉原記念館に

杉原千畝記念館訪問を決めてから、私たちはその窮状についても知ることになった。

ヨーロッパで戦線が拡大していた1939年（S. 14）、自らへの危険も顧みずにビザ発給を続け、多くのユダヤ人の生命を救った日本人外交官・杉原千畝の功績は、日本・リトアニア友好の象徴となっていて、当時のオフィスは現在記念館となっている。しかし、その建物は雨漏りの補修にも苦勞しているのが現状だという。

2008年のクリスマス・チャリティコンサートは、杉原記念館への寄付を趣旨として行うことになった。

## 大きな流れに

チャリティコンサートは、日本・リトアニア友好の象徴である杉原記念館への寄付を目的としたので、できれば両国でコンサートを行いたいと考え、杉原記念館やカウナス市の日本大使館に問い合わせたところ、演奏者の安全について何も心配する必要はなく、むしろ、このような素晴らしいアイデアがあるなら、カウナス市のフィルハーモニーホールを無償で使用できるようにする、というのがその内容だった。

カウナス市や杉原記念館との協議が進むにつれ構想は膨らみ、遂に、チャリティコンサートはカウナス市主催・日本大使館後援となった。それだけでなく、日本でのチャリティコンサートであった合唱部第14回定期演奏会を外務省が後援することになった。更に、ワルシャワ公演は「日本・ポーランド国交樹立90周年記念コンサート」として、日本大使館後援となり、また、ヴィリニウス公演の日本大使館後援も決まった。

この段階に至って、一連の動きは私たちの手を離れ、社会の中で大きく広がっていることが痛感された。国内では2008年（H.20）12月23日に、白十字でクリスマス・チャリティコンサートを行い、同日には、杉並区のVIMでもOG会によるチャリティコンサートが行われた。また、2009年3月

17日の定期演奏会では、会場内に置かれた募金箱の前に長い列ができていた。リトアニア国内のコンサートの反響も大きかった。

そして、私たちは3月26日のカウナス・チャリティコンサートで、国内370名余の方々と多くのリトアニア人の善意の集積である782,787円を杉原記念館会長R.ガルバラヴィシウス氏に贈った。また、カウナス・チャリティコンサートで寄せられた約10万円も、主催者から杉原記念館に贈られた。



贈呈式

## 反響、そしてこれから

2006年と2009年。合唱部は得難い経験を重ねたと思う。

2009年にヴィリニウスで共演した合唱団ブレヴィスのしなやかなフレージングや精緻なハーモニー、そしてそれらを支える自在な発声は、これまで耳にしたこともない素晴らしいもので、驚愕した。一方、同じヴィリニウス公演の後、作曲家・指揮者J.カルカス氏が楽屋を訪ね、合唱部の透明な歌声と音楽性に対して賞賛の言葉を述べられた。

このような交流は、次代の部員へと継承されてゆくべきだろう。時に健忘症に陥る日本人に比べ、あちらは日露戦争の頃の親切を忘れず、阪神淡路大震災の被災孤児たちを呼び寄せたお国柄でもある。私たちとしては、継続する意思を堅持したい。

現在、この企画を推進してきた星野安彦、菊池大成氏と共に、「次」に向けて様々に思案している。

今回贈られたカルカス氏の作品は、2009年12月にくにたち音楽会で日本初演される予定となっている。

（荒木 泰俊）

## 講座 “KUNIONへの道”

この講座は、減少傾向にある受験生徒数確保のため、2007年度（H.19）から開設された受験準備講座である。2007年4月当初、音楽科職員会議、入試委員会、また音楽部会運営委員会などで2008年度入試から適用できる生徒募集対策として

- ・一般入試の日程を2日間から1日に短縮、即日合格発表を行う。
- ・専攻実技課題曲の選択範囲を拡げる。
- ・英検などによる内申点の加点を行う。

等が提案され、この講座の開設は上記の入試方法の小改訂とともに、実行が決定された対策の柱であった。

この講座は撰梅校長により「講座“KUNIONへの道”」と命名、荒木主事を中心に音楽担当教員で急ピッチで準備がすすめられ、6月16日、2007年度第1回学校説明会でのパンフレット（実施要項）発行にこぎ着けた。内容は聴音の他、専攻実技の指導を行う「専攻実技クリニック」、専攻実技課題曲の見極めを行う「課題曲実力診断」で、月2回ペースの計10回、土曜日午前に行われ、受講はすべて無料とされた。講座の初日は要項発行1週間後の6月23日であったが、1週間で50名あまりの申込があり、関心の高さが示された。登録数は最終回までに100名を越え、他の広報活動も功を奏して2008年度（H.20）入学生は120名となった。

一方でこの講座の運営業務では多くの課題を残すこととなり、2008年度は運営事務の効率化と正確、迅速な情報提供、また専攻実技クリニックの指導体制の整備が課題となった。2008年度は開講を4月として回数も15回となり、前年度の科目に加えて「英語」「入試体験」が開設された。パンフレットを広く

配布し、またホームページでも早めの更新をしながら紹介した結果、講座は多くの受験生に認知され、「課題曲実力診断」で順調に課題をこなす様子が見られた。2008年度の全登録数は約80名と前年度に比べやや減少し、また2009年度（H.21）入学者数も2007年度の水準にとどまったが、合格者のうち推薦入試で94%、一般入試でも77%を講座受講生が占め、効果が実証された。今後の課題として、夏期・冬期の音楽講習会との関係、機会均等のための開講曜日、時間等の調整などがあげられる。課題として内容をさらに精査し、生徒募集の重要な役割を担って行くものと思われる。

（米持 隆之）

2009 ▶ 2010

**講座**  
**KUNIONへの道**

<受講カード>

受講番号	学 年	
氏 名		

受講カード

## 新しい生徒証 ～紙製からICカードへ～

本校の生徒であることを証明する生徒証は、長く紙製のものであったが、2005年（H.17）4月からICカード化された。この変更は、学校の情報管理や事務手続きがコンピューター化する時代の流れにあり、本校もまたその流れのうちにあるために行われたことである。

変わったことのうち最も大きく変わった点は、有効期間である。旧・生徒証は、学年・組・出席番号識別による単年度（1年間）有効であったものが、新・生徒証では、学籍番号識別による在学中（3年間）有効となった。

生徒側には、在学中は番号が不変という利点があり、事務手続きを行う側には、学籍番号による一元管理により、個人情報の正確な保存・管理が

可能になるという利点がある。また、校内セキュリティ問題の解決のために設けられた2号館北側のオートロックの解錠が、生徒証で出来る。

生徒証が紙製の時代には、破損（破れたり、洗濯したり等）による事故が多かった。ICカードになってからは、破損事故は減ったが、3年間継続使用のためか紛失による再発行のケースが散見されるようになった。

### 保護者入校証

校内セキュリティ対策のために、本校生徒・教職員以外の入校者について、来客や取引業者は入校証を着けていただくことで把握していたが、学校行事等のために来校する生徒保護者についても、2009年（H.21）5月より入校証が用意されることとなった。これは生徒入学時より卒業まで有効であり、卒業時に返却することになっている。

（大塚 博巳）

## 図書館 この20年

図書室開室以来60年、最初は書籍だけの純然たる図書室であったが、時を経て現在は図書館という名の情報センターである。開室からの40年については40周年記念誌に詳しいので、ここではその後の20年を記録しておく。2003年(H.15)には3号館1階に移転し、運用・管理をコンピューター化したことは、2号館地下の時代を思うと隔世の感がある。

### 多様化する資料

#### 1. 図書館資料

図書館資料は、新しいメディアが登場すると、本校の教育に必要なメディアであるかを検討の上、図書館に収集されるという手順を踏んできた。その結果、書籍資料から派生して、カセット・ブック(S. 63～H.14)、電子ブック(H.8～)等が図書館に登場し、電子ブック以降はCD-ROM、DVD-ROMとコンピューター用メディアの変遷に同期した。百科事典が記憶媒体になったときは、その軽量化・省スペース化を喜んだが、学校教育現場には不向きと判断され、印刷された多巻構成の事典を重用することになった。また、ここ2、3年の傾向としての新書ブームは、様々なジャンルの事柄を手軽に知ることが出来るため、大いに役立っている。

#### 2. AV資料

AV資料収集は、今こそすべての学校で収集を視野に入れる物となった。当館は先駆的にAV資料を受入れ運用してきたため、SP、LP、カセットテープ、CD(S. 61～)、ビデオテープ(S. 59～)、LD(H.2～)、DVD(H.13～)と多種のメディアが対象となった。その収集と運用の歴史は類例のないもので、H.17年には私学教育研究会の依頼により見学会を開催。東京都内の私立高校教諭、司



旧図書館

書の方々を対象に、運用の実際と目録体系について発表を行った。

AV資料は、設備と切り離して語ることはできない。2号館地下図書館時代の試聴室では、送り出し方式でレコード・FM放送を聴くことができた。そこから発展して、H.2年にはCD試聴が全席でできるようになるところまでは実現できた。しかし、スペースや電力量の問題が解決できず、ビデオやLDなどを自由に視聴することはできなかった。そのため図書館の3号館移転に際して、「試聴」を「視聴」にすることが重要なポイントとなったことは言うまでもない。結果、現・視聴室はCD・DVDの個人視聴が可能になり、FM放送に変わってCS放送「クラシカ」が視聴できるようになった。

### 楽譜の運用

楽譜の収集と貸出しについては、どの年代の在校生であったかで、記憶がまるで違うことであろう。楽譜の収集は早くから始められており、ピアノ・アンサンブル楽曲を中心とするコレクションがあった。しかし、目録がない時代が長く、平成になって作曲者目録が完成するまでは十分に利用できなかった。その後音楽科の授業に「演奏法」が加わり、クラスの仲間たちと室内楽を演奏することが必修になったことから、楽譜の収集も多様な楽器の組み合わせによる室内楽に及ぶようになった。また、管弦楽総譜を読む勉強のため、ミニチュア・スコアも数多く収集されるようになった。現在では、古くはグレゴリオ聖歌から、現代ではペンデレツキ、クルターク、武満徹、さらに現在活躍中の作曲家、現役音楽科教諭の作品(校内合唱コンクール課題曲など)に到り、多岐にわたっている。

### コンピューター利用

図書館内でコンピューター・ソフトが利用できるようになったのは、1998年(H.10)のことである。文書作成ソフト、表計算ソフト、百科事典、辞典、学習用ソフトなどを購入してのスタートであった。ただ、施設の問題でインターネット接続ができないのは残念であったが、情報教室の計画、校内LANなど、解決すべき問題は多く、当然のことであった。一方で、3号館建築計画に伴い、問題のすべてが一挙に解決の方向へと進みだした。図書館はその流れに乗り、新図書館となってから



はインターネット端末を館内で利用できるようになった。これによって、調べものをする際の情報源選択の幅は広がったが、なんでもインターネットで、という風潮も生まれた。情報に安易に飛びつかない、真偽を自分で確認するなど、利用者に「情報の達人」であることが求められるようになった。

## 図書館運用システムのコンピューター化

3号館移転計画の筆頭にあげられたのが、図書館運用システム(貸出し・返却・検索・蔵書管理など)のコンピューター化である。教職員によって構成された図書館プロジェクトチームは、成果を上げている学校図書館、大学図書館などに見学に行き、検討を重ねた。そして「School-Ilis」(スクール・アイリス)を選び、所蔵資料の目録をデータ化して入力、検索方法の検討を経て今日の姿になった。

初代のスクール・アイリスはサーバーによる図書館内LANにより構成され、タッチ・パネル式の検索端末2台、事務用端末を4台有していた。また、検索用の画面は、校内LANからウェブ検索画面を利用することもできた。図書館資料にはすべてバーコードが貼付され、利用者は全員利用者コードを持つことになった。端末を利用して、貸出・返却・予約などが、「ピ！」で出来るようにするためである。

当館は楽譜やAV資料などが閉架資料であるために、資料検索をしなくてはならない。そのため、タッチ・パネルによって簡単に操作でき、「ベーターベン」と入力すれば「ベーターヴェン」も検索、「エチュード」と入力すれば「練習曲」や「etude」をも検索できる機能が必要であった。それが実現したという点では、本校に適していたといえる。また、すべての資料を対象に検索することができ、たとえば「フィガロの結婚」を検索すれば、ボーマルシェの台本も、楽譜も、CDも、DVDも、と検索結果が得られるのは、利用者の便宜にとっていい点である。さらに、新着図書のご案内を検索端末上において自動で行うなど、有用で簡便であった。

6年使用した後の2009年(H.21)4月に、このシステムは、機器類の老朽化と基本ソフトウェアの問題により「School-Ilis ver.4」に更新された。今後も、5年に1回は見直しが必要であるとわかっているため、その時まで蓄積された資料のデータを十全に活かすことできる基本ソフトウェアを

選び、本校にふさわしいものに適正化できるよう、企図する考えである。

## 図書館と生徒たち

近年の傾向として、国内外でハリー・ポッター・シリーズがよく読まれる。本校も例外ではない。ただ、全国統計に見られるように第1位なのか、というところではない。いつもトップ10に上がってくるのは、総合学習で取り上げられる修学旅行先の資料と、聴音課題集。生徒の実態がそこに表れている。聴音は苦手だ・・・とため息をつく生徒の姿や、北海道や沖縄などの旅行先を想像してうきうきしている様が想像できる。

最近、中学生・高校生向けに書かれた小説のテーマに、部活動、委員会活動、学校行事などが取り上げられるようになり、本校で人気のジャンルとなっている。また、いつの時代にも「若者の本離れ・活字離れ」は言われることであるが、小説も楽譜も音楽もどれも同じように必要な本校の生徒たちには、くどくどと読書の効能を説く必要はなかろう。それらが生徒たちのそばに何時もあることを、日常的に見ているからである。

(和田多美子)



新図書館



新図書館視聴室

# 資料編

編集責任 60周年記念誌編纂委員会

## データでみる学校

現所在地 〒186-0005  
東京都国立市西 2-12-19

校地面積	校地	18,054㎡	
校舎面積	1号館	4,761㎡	鉄筋コンクリート4階建
	2号館	6,505㎡	鉄筋コンクリート4階建(地下1階)
	3号館	2,954㎡	鉄筋コンクリート3階建
	体育館	757㎡	

教室数	普通教室	24	
特別教室数	音楽室	7	
	家庭科室	2	調理室・被服室
	講義室	1	
	視聴覚室	1	
	情報(パソコン)教室	2	
	スタジオ	3	
	美術室	1	
	保健室	1	
	理科室	3	
	レッスン室	42	

教職員数	教諭	38	校長、主事を含む
	講師	83	
	職員	29	

ピアノ台数	グランド	64	
	アップライト	32	

生徒用PC台数	パソコン教室	46	
	情報教室	11	DTM用

図書館資料数	書籍	34,197	
	楽譜	5,867	
	雑誌	3,935	
	CD	4,282	
	LP	2,943	
	DVD	363	
	VTR	412	
	LD	129	
	CD-ROM	7	

2009年4月1日現在

旧・富士見台校舎 国立市富士見台2-1-1

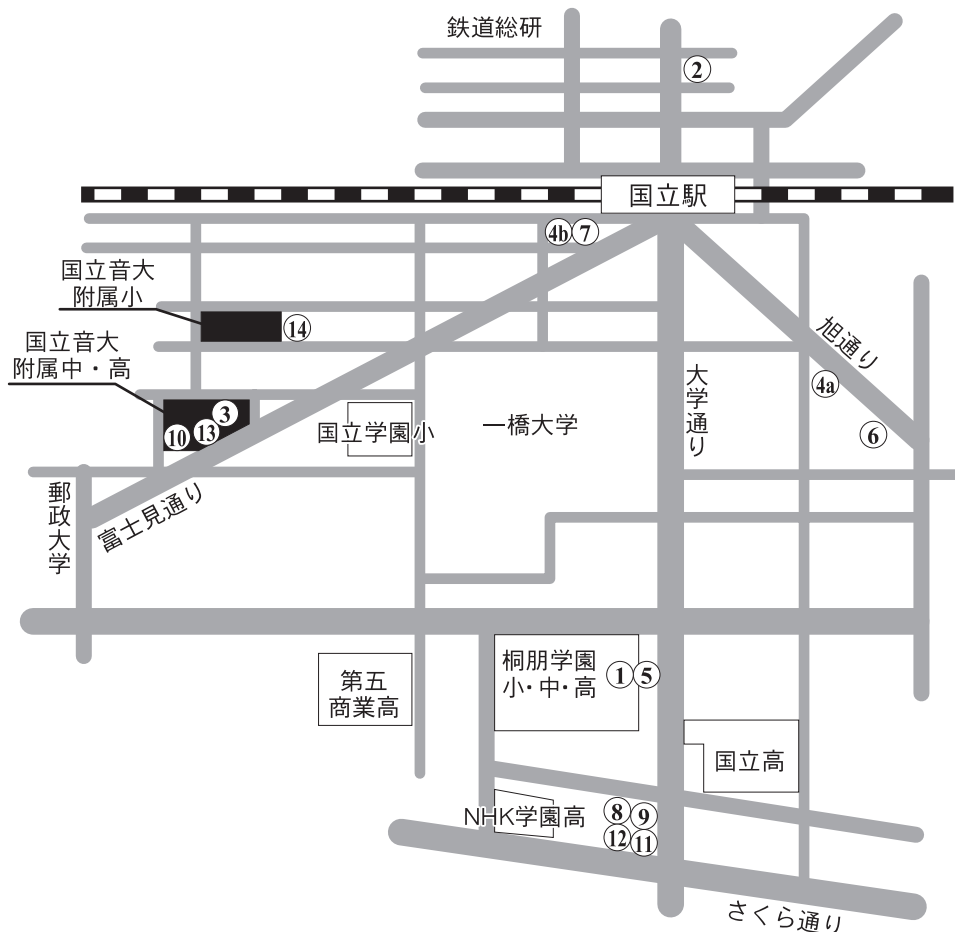
校地面積	校地	32,630㎡	
校舎面積	中学校・音楽科校舎	2,818㎡	木造モルタル2階建
	普通科校舎	2,266㎡	鉄筋コンクリート4階建(地下1階)
	講堂	309㎡	
運動場面積		11,440㎡	

## 地図でみる学校

～ 国立音楽高等学校、国立中学校から、現在へ～

### 校地移転の歴史

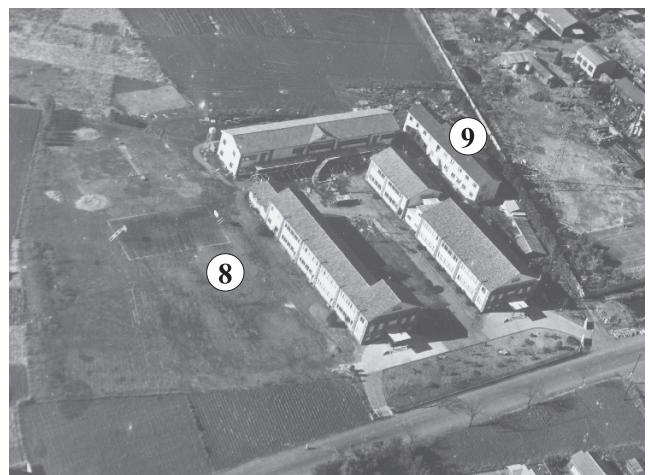
- |  |  |
|--|--|
| <p>① 1949年(S.24)4月<br/>桐朋高校武道場<br/>北多摩郡谷保村谷保7660 (1958年(S.33)まで、貸与される。)<br/>(国立市中3-1-10)</p> <p>② 1950年(S.25)9月<br/>楽器研究所開設により、調律科の実習室がここへ移転<br/>国分寺市平兵衛新田<br/>(国分寺市光町1-39付近)</p> <p>③ 1952年(S.27)4月<br/>中学校は大学校地へ移転<br/>北多摩郡国立町西区287(国立市西2-12-19)</p> | <p>④ 1953年(S.28)4月<br/>a. 東寮(男子寮)<br/>国立町東区64(国立市東2-3付近)<br/>b. 中寮(女子寮)<br/>国立町中区221(国立市中1-8-25付近)</p> <p>⑤ 1954年(S.29)9月<br/>中学校は南校舎に移転<br/>北多摩郡国立町国立169</p> <p>⑥ 1955年(S.30)4月<br/>東南寮(男子寮)<br/>国立町東区94(国立市東2-9付近)</p> <p>⑦ 1957年(S.57)<br/>中寮別館(女子寮)<br/>国立町中区221(国立市中1-8-25付近)</p> |
|--|--|



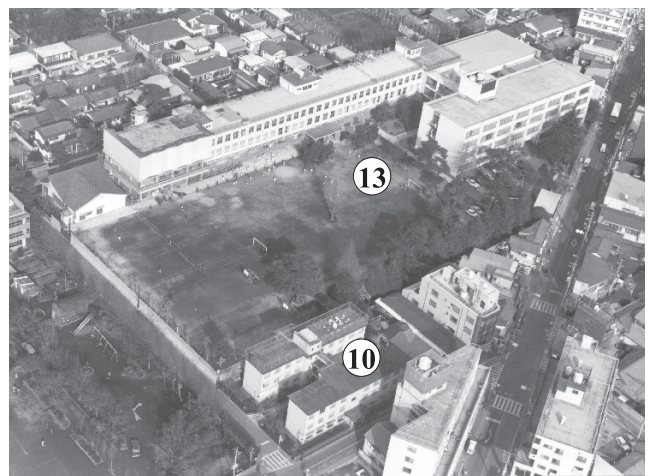
- ⑧ 1958年(S.33)5月  
高校・中学校校舎竣工 移転  
国立町大字谷保仮屋5493-5536 (国立市富士見台2-1-1)
- ⑨ 1959年(S.34)8月  
南寮(女子寮) (富士見台校地内)
- ⑩ 1960年(S.35)10月  
西寮(女子寮)  
国立町西区287 (国立市西2-12-19)
- ⑪ 1961年(S.36)  
調律科実習室、富士見台校舎へ移転  
国立町大字谷保仮屋5493-5536  
(国立市富士見台2-1-1)
- ⑫ 1963(S.38)年4月  
富士見台校地に新校舎を増築
- ⑬ 1977年(S.52)8月  
高校・中学校新校舎竣工 移転  
国立市西2-12-19
- ⑭ 1998年(H.10)  
西北寮 2000年(H.12)4月から国立音楽大学  
附属音楽高等学校寄宿舎と改称する。  
国立市西1-15-9



1954年 航空写真



1958年 航空写真



1977年 航空写真

## 生徒数一覽

西曆	元号	中学総数	男子	音楽科総数	男子	普通科総数	男子	総合計	西曆	元号	中学総数	男子	音楽科総数	男子	普通科総数	男子	総合計
1949年	S.24	47	9	180	85			227	1980年	S.55	256	7	512	16	243		1011
1950年	25	72	9	205	85			277	1981年	56	254	7	515	20	243		1012
1951年	26	69	11	207	70			276	1982年	57	252	3	507	21	244		1003
1952年	27	88	11	206	65			294	1983年	58	255	1	504	18	242		1001
1953年	28	90	14	198	45			288	1984年	59	258	1	501	17	242		1001
1954年	29	100	11	195	36			295	1985年	60	256	0	508	12	245		1009
1955年	30	103	11	188	27			291	1986年	61	257	4	505	16	243		1005
1956年	31	117	12	182	34			299	1987年	62	257	6	468	15	244		969
1957年	32	128	10	207	35			335	1988年	63	258	12	511	12	241		1010
1958年	33	124	5	245	41			369	1989年	S.64 H.元	258	11	517	13	245		1020
1959年	34	127	0	279	39			406	1990年	2	256	10	520	11	244		1020
1960年	35	161	2	284	34			445	1991年	3	257	8	518	15	244		1019
1961年	36	171	4	269	23			440	1992年	4	257	7	512	17	244		1013
1962年	37	248	9	277	23			525	1993年	5	257	6	507	17	244		1008
1963年	38	261	8	347	22	75		683	1994年	6	257	7	500	16	245		1002
1964年	39	253	5	436	36	156		845	1995年	7	257	9	497	12	246		1000
1965年	40	247	9	498	38	232		977	1996年	8	253	11	489	10	242		984
1966年	41	242	9	491	36	216		949	1997年	9	255	8	477	13	227		959
1967年	42	243	12	481	23	225		949	1998年	10	254	7	473	15	212		939
1968年	43	242	5	484	33	212		938	1999年	11	254	12	483	22	216		953
1969年	44	251	11	491	33	229		971	2000年	12	254	12	471	22	202		927
1970年	45	262	11	498	28	230		990	2001年	13	252	13	462	28	164		878
1971年	46	266	12	501	28	240		1007	2002年	14	251	13	443	32	129		823
1972年	47	260	7	509	34	229		998	2003年	15	248	13	440	28	107		795
1973年	48	254	5	513	33	231		998	2004年	16	252	18	418	26	122	4	792
1974年	49	257	6	520	36	232		1009	2005年	17	243	13	383	22	126	12	752
1975年	50	257	4	524	25	240		1021	2006年	18	246	17	358	23	136	21	740
1976年	51	264	3	525	18	237		1026	2007年	19	239	12	336	24	140	23	715
1977年	52	258	3	513	25	237		1008	2008年	20	221	12	332	24	136	26	689
1978年	53	258	4	509	22	243		1010	2009年	21	224	15	326	26	147	29	697
1979年	54	255	9	510	22	242		1007									

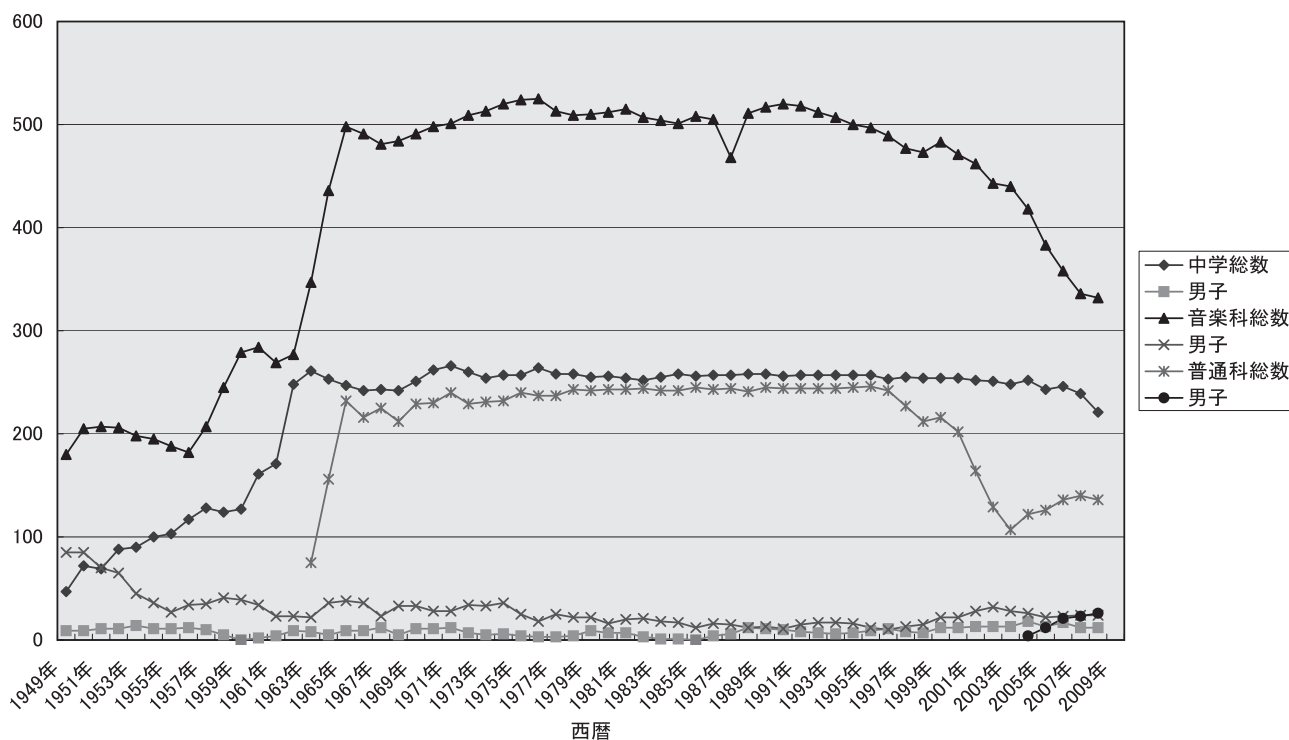
※1949年(S.24)から1954年(S.29)までは、事務室保存手書き台帳に基づく。

※1955年(S.30)から1988年(S.63)までは、法人印刷名簿に基づく。

※1989年(S.64/H.元)以降、生徒数・担任一覽表(各年度4月1日現在)に基づく。

## 生徒数推移

生徒数(人)



## 調律専攻生徒数一覧

西暦	元号	卒業生人数(人)	高校課程修了(人)	専攻科総数(人)	同選修科(人)
1949年	S.24		2		
1950年	25		1		0
1951年	26	4	2	0	0
1952年	27	3		1	0
1953年	28	2		0	0
1954年	29	3		0	1
1955年	30	1		0	0
1956年	31	0		0	2
1957年	32	1			2
1958年	33	2			3
1959年	34	2			3
1960年	35	3			3
1961年	36	2			2
1962年	37	1			
1963年	38	0			
1964年	39	0			
1965年	40	0			
1966年	41	1			
1967年	42	2			
1968年	43	1			
1969年	44	1			

※H5調査に基づく。

## 寮（寄宿舎）の生徒数の変遷

西暦	元号	音楽科			普通科			4月時点 の総数	舎 監	備 考
		1年	2年	3年	1年	2年	3年			
1952	S.27	ジ3	ジ2	ジ10				15	女子寮：松尾妙子先生	国立音楽大学女子寮=ジ
1953	28	ナ7	ナ3	ヒ1,ナ6				17		国立音楽大学東寮=ヒ
1954	29	ナ3	ナ7	ナ3				13		国立音楽大学中寮=ナ
1955	30	ト2,ナ4	ト4,ナ7,ベ2	ナ5				24		
1956	31	ト2,ナ6	ト1,ナ3	ト4,ナ5,ベ2				23	中寮：松尾妙子先生	国立音楽大学東南寮=ト、 中寮=ナ、 中寮別館=ベ
1957	32	ナ7,ア1	ト2,ナ7	ト1,ナ2				20		
1958	33	ト1,ナ12	ナ6,ア1	ト1,ナ6				27		
1959	34	ト1,ナ8	ナ12	ナ6				27		国立音楽大学東南寮=ト、中寮=ナ
1960	35	ヒ1,ミ16	ヒ1,ミ10	ミ9				37		東寮=ヒ、音高南寮=ミ
1961	36	ミ7	ヒ1,ミ13	ミ3,ナ2				27	南寮：野村貞津子先生	中1=ミ1
1962	37	ミ7	ヒ1,ミ9	ヒ1,ミ13				35		東寮=ヒ、音高南寮=ミ、調律ヒ1,ミ1,中2=ミ2 中3=ミ2,この年に普通科が創設される
1963	38	ヒ2,ミ33	ト1,ミ11	ミ7	ミ3			57		
1964	39	ヒ2,ミ22,ナ4	ミ28	ミ9	ナ2	ミ3		70		
1965	40	ミ22,ナ3	ミ21	ミ23			ミ1	70		
1966	41	ミ24	ミ23	ミ19				66		
1967	42	ミ22,ナ3	ミ22	ミ20				67		
1968	43	28	19	21				68		南寮だけになる
1969	44	25	27	18				70		
1970	45	22	23	24				69	南寮：千葉重子先生	
1971	46	26	21	23				70		
1972	47	25	25	20				70		
1973	48	17	19	19	4			59		
1974	49	18	16	20	4	5		63		
1975	50	27	20	10		5	4	66		
1976	51	24	21	11	1		4	61		
1977	52	18	20	13	5	2		58		
1978	53	14	13	18	3	5		53		
1979	54	19	12	12	4	3	3	53		
1980	55	19	19	11	5	4	2	60		
1981	56	20	15	18	4	4	3	64		
1982	57	15	18	15	4	4	3	59		
1983	58	14	13	18	5	6	3	59	西寮：千葉重子先生	
1984	59	11	13	10	4	5	6	49		
1985	60	12	13	10	3	3	5	46		
1986	61	10	12	13	6	3	1	46		中3=1
1987	62	17	10	12	6	4	3	52		
1988	63	14	12	8	4	4	3	45		
1989	H.1	16	12	11	4	2	1	47		中3=1
1990	2	15	16	12	3	4	2	54		中3=2
1991	3	16	13	15	3	4	4	55		
1992	4	10	14	9	2	2	3	40	西寮：小島やす先生	
1993	5	14	9	12	1	3	2	41		
1994	6	9	15	6	5	2	1	38		
1995	7	11	9	10	2	5	2	39		
1996	8	12	9	9	3	2	3	38		
1997	9	17	12	6	5	4	2	46		
1998	10		13	12		5	4	34		
	(西北寮)	16			1			18	西寮：小島やす先生 西北寮： 恩田美佐子先生	中3=1
1999	11	9		11	2		3	25		
	(西北寮)	4	15			2		21		
2000	12	14	10	13	3	1	1	42		西寮を閉寮し、西北寮を 寄宿舎に名称変更する
2001	13	13	11	8		2		34	寄宿舎： 恩田美佐子先生	
2002	14	11	14	10			2	37		
2003	15	6	12	13				31		
2004	16	10	6	11	2		1	30		16年度をもって閉舎する

\*総数には備考欄の中学生なども含む。



## 寮 費 の 変 遷

## 南寮

1976年 (S.51)			1978年 (S.53)		
諸 経 費	500	500	諸 経 費	700	700
舎費(2人部屋)	1,500	1,500	舎 費	1,500	1,500
舎費(4~6人部屋)	1,400	1,400	食 費	20,000	20,000
食 費	15,000	15,000	ピアノ持込	500	
ピアノ持込	500		ピアノ持込室賃料		1,500
ピアノ持込室賃料		1,500	計	22,700	23,700
計	17,500 か17,400	18,500 か18,400			

## 西寮 ~ 寄宿舍

1978年 (S.53)			1979年 (S.54)			1980年 (S.55) ~ 1981年 (S.56)		
諸 経 費	1,500	1,500	諸 経 費	1,500	1,500	諸 経 費	1,500	1,500
舎 費	2,000	2,000	舎 費	2,000	2,000	舎 費	2,000	2,000
食 費	23,000	23,000	食 費	23,500	23,500	食 費	27,900	27,900
ピアノ持込	1,000		ピアノ持込	1,000		ピアノ持込	1,000	
ボックス		1,500	ボックス		1,500	ボックス		1,500
計	27,500	28,000	計	28,000	28,500	計	32,400	32,900

1982年 (S.57) ~ 1984年 (S.59)			1985年 (S.60) ~ 1986年 (S.61)			1987年 (S.62)		
諸 経 費	1,800	1,800	諸 経 費	2,000	2,000	諸 経 費	2,000	2,000
舎 費	2,000	2,000	舎 費	2,500	2,500	舎 費	2,500	2,500
食 費	33,600	33,600	食 費	35,800	35,800	食 費	37,800	37,800
ピアノ持込	1,000		ピアノ持込	1,000		ピアノ持込	1,000	
ボックス		1,500	ボックス		1,500	ボックス		1,500
計	38,400	38,900	計	41,300	41,800	計	43,300	43,800

1988年 (S.63)			1989年 (H.1) ~ 1991年 (H.3)			1992年 (H.4) ~ 1994年 (H.6)		
諸 経 費	2,000	2,000	諸 経 費	2,000	2,000	諸 経 費		2,000
舎 費	2,500	2,500	舎 費	2,500	2,500	舎 費		2,500
食 費	38,400	38,400	食 費	38,700	38,700	食 費		40,800
ピアノ持込	1,000		ピアノ持込	1,000		ピアノ持込		1,500
ボックス		1,500	ボックス		1,500	計		46,800
計	43,900	44,400	計	44,200	44,700			

※1992年 (H.4) から2人部屋から  
1人部屋となりボックス料金廃止

1995年 (H.7) ~ 1997年 (H.9)			1998年 (H.10) ~ 1999年 (H.11)			2000年 (H.12)		
諸 経 費		3,500		西寮	西北寮			寄宿舍
舎 費		4,000	諸 経 費	4,000	4,500	諸 経 費		4,500
食 費		40,800	舎 費	6,000	9,500	舎 費		12,000
ピアノ持込		1,500	食 費	40,800	40,800	食 費		40,800
計		49,800	ピアノ持込			計		57,300
			計	50,800	54,800			

※1998年 (H.10) から舎費の値上げによりピアノ持込料廃止

2001年 (H.13) 寄宿舍			2002年 (H.14) ~ 2004年 (H.16) 寄宿舍		
諸 経 費		8,000	諸 経 費		8,000
舎 費		20,000	舎 費		20,000
食 費		40,800	食 費		32,000
計		68,800	計		60,000

※2002年 (H.14) ~ 2004年 (H.16)  
の食費は昼食がなくなったため  
8,800円減少

## 音楽科担任一覧

年	学年	組	担 任
1949年	1		野 村 茂 子
	2		高 津 智 子
	3		井 上 貞 一
1950年	1		野 村 茂 子
	2		井 上 貞 一
	3		高 津 智 子
1951年	1		野 村 茂 子
	2		加 藤 直 子
	3		井 上 貞 一
1952年	1		上 岡 歌 子
	2		武 井 恵 美 子
	3		加 藤 直 子
1953年	1		上 岡 歌 子
	2		加 藤 直 子
	3		野 村 茂 子
1954年	1		上 岡 歌 子
	2		伊 田 栄 子
	3		加 藤 直 子
1955年	1		上 岡 歌 子
	2		加 藤 直 子
	3		伊 田 栄 子
1956年	1		上 岡 歌 子
	2		伊 田 栄 子
	3		加 藤 直 子
1957年	1	A	上 岡 歌 子
		B	上 岡 歌 子
	2		山 岸 重 雄 子
3		伊 田 栄 子	
1958年	1	A	加 藤 直 子
		B	上 岡 歌 子
	2	A	土 橋 伸 一 子
B		伊 田 栄 子	
1959年	1	A	塩 見 忠 雄 二 子
		B	望 月 歌 子
	2	A	上 岡 歌 子
B		土 橋 伸 一 子	
3	A	山 岸 重 雄 子	
	B	伊 田 栄 子	
1960年	1	A	土 橋 伸 一 子
		B	望 月 雄 二 子
	2	A	山 岸 重 雄 子
B		伊 田 栄 子	
3	A	上 岡 歌 子	
	B	加 藤 直 子	
1961年	1	A	望 月 雄 二 子
		B	上 岡 歌 子
	2	A	渡 辺 二 良 子
B		須 永 敏 之 子	
3	A	山 岸 重 雄 子	
	B	伊 田 栄 子	
1962年	1	A	望 月 雄 二 子
		B	山 岸 重 雄 子
	2		岡 部 徳 三 子

年	学年	組	担 任
1962年	3	A	加 藤 直 子
		B	須 永 敏 之 子
1963年	1	A	加 藤 直 子
		B	須 永 敏 之 子
		C	木 村 照 博 生
		D	熊 田 長 雄 二 子
	2	A	望 月 長 雄 二 子
		B	山 岸 重 雄 二 子
	3	A	岡 部 徳 三 子
		B	上 岡 歌 子
		C	岡 部 徳 三 子
1964年	1	A	岡 部 徳 三 子
		B	上 岡 歌 子
		C	小 澤 英 子
		D	岸 根 保 夫 直 子
	2	A	加 藤 直 子
		B	須 永 敏 之 子
		C	木 村 照 博 生
		D	熊 田 長 雄 二 子
	3	A	望 月 長 雄 二 子
B		山 岸 重 雄 二 子	
1965年	1	A	望 月 長 雄 二 子
		B	豊 村 伊 一 郎 子
		C	田 口 公 重 雄 子
		D	山 岸 重 雄 二 子
	2	A	岡 部 徳 三 子
		B	上 岡 歌 子
		C	小 澤 英 子
		D	岸 根 保 夫 直 子
	3	A	加 藤 直 子
B		須 永 敏 之 子	
C		木 村 照 博 生	
D		熊 田 長 雄 二 子	
1966年	1	A	中 原 健 二 生 博 之 子
		B	熊 田 長 照 敏 之 子
		C	木 村 永 敏 之 子
		D	須 永 敏 之 子
	2	A	望 月 雄 二 子
		B	豊 村 伊 一 郎 子
		C	田 口 公 重 雄 子
		D	山 岸 重 雄 二 子
3	A	岡 部 徳 三 子	
	B	上 岡 歌 子	
	C	小 澤 英 子	
	D	岸 根 保 夫 直 子	
1967年	1	A	上 岡 歌 子
		B	河 西 輝 子
		C	小 澤 英 子
		D	岸 根 保 夫 直 子
	2	A	中 原 健 二 子
		B	樋 口 翔 子
		C	木 村 照 博 生
		D	須 永 敏 之 子
3	A	望 月 雄 二 子	
	B	豊 村 伊 一 郎 子	
	C	熊 田 長 雄 二 子	
	D	山 岸 重 雄 二 子	

年	学年	組	担	任
1968年	1	A	望月雄二	子生
		B	田口公長	保夫
		C	熊田根	歌子
		D	岸根	歌子
	2	A	上岡西	歌子
		B	河川	輝子
		C	及川	重雄
		D	山岸	健二
	3	A	中原	翔子
		B	樋口	照博
		C	木村	敏之
		D	須永	歌子
1969年	1	A	上岡藤	輝子
		B	八川	重雄
		C	及川	雄二
		D	山岸	公長
	2	A	望月	保夫
		B	田口	保夫
		C	熊田	照博
		D	岸根	照博
	3	A	木村	照博
		B	樋口	翔子
		C	牧川	敏之
		D	須永	歌子
1970年	1	A	木村	照博
		B	上岡	輝子
		C	八藤	英子
		D	小澤	慎子
	2	A	及川	翔子
		B	樋口	優生
		C	牧川	長生
		D	熊田	雄二
	3	A	望月	公長
		B	田口	敏之
		C	須永	保夫
		D	岸根	保夫
1971年	1	A	岸根	保夫
		B	望月	雄二
		C	八藤	輝子
		D	田口	公長
	2	A	熊田	歌子
		B	上岡	克巳
		C	塩野	英子
		D	小澤	慎子
	3	A	及川	翔子
		B	樋口	重雄
		C	山岸	敏之
		D	須永	敏之
1972年	1	A	木村	照博
		B	八藤	輝子
		C	樋口	翔子
		D	佐藤	五百枝
	2	A	岸根	保夫
		B	望月	雄二
		C	山岸	重公
		D	田口	公

年	学年	組	担	任
1972年	3	A	須永敏之	子巳
		B	上岡野	克英
		C	塩澤	英子
		D	小澤	歌子
1973年	1	A	上岡	歌子
		B	小澤	英子
		C	八藤	輝子
		D	木村	照博
	2	A	熊田	長博
		B	野呂	翔子
		C	樋口	慎夫
		D	及川	保雄
	3	A	岸根	重公
		B	望月	公保
		C	山岸	保夫
		D	田口	讓子
1974年	1	A	岸根	英子
		B	石田	歌子
		C	小澤	重雄
		D	田口	德三
2	A	上岡	歌子	
	B	山岸	重雄	
	C	望月	敏之	
	D	岡部	敏博	
3	A	須永	敏博	
	B	野呂	口翔	
	C	樋口	慎夫	
	D	及川	博生	
1975年	1	A	木村	照長
		B	熊野	博翔
		C	樋口	保夫
		D	岸根	讓子
	2	A	石田	英公
		B	小澤	歌子
		C	田口	重雄
		D	上岡	德三
	3	A	上岡	歌子
		B	山岸	重雄
		C	望月	德三
		D	岡部	德三
1976年	1	A	望月	德三
		B	岡部	慎子
		C	及川	歌子
		D	上岡	重敏
2	A	山岸	敏博	
	B	須永	博翔	
	C	野呂	口翔	
	D	樋口	保夫	
3	A	岸根	讓子	
	B	石田	英公	
	C	小澤	歌子	
	D	田口	英保	
1977年	1	A	小澤	英子
		B	岸根	保夫
		C	田口	公照
		D	木村	照博

年	学年	組	担	任
1977年	2	A	望月	雄二
		B	岡部	徳三
		C	及川	慎子
		D	上岡	歌子
	3	A	山岸	重雄
		B	八藤	輝子
		C	野呂	博昭
1978年	1	A	青木	美樹
		B	野呂	博昭
		C	樋口	翔子
		D	熊田	長生
	2	A	小澤	英子
		B	須永	敏之
		C	田口	公重
	3	A	望月	雄二
		B	岡部	徳三
		C	及川	慎子
		D	上岡	歌子
	1979年	1	A	熊田
B			上岡	歌子
C			木村	照徳
D			岡部	三樹
2		A	青木	美樹
		B	野呂	博昭
		C	樋口	翔子
		D	岸根	保夫
3		A	及川	慎子
		B	八藤	輝子
		C	田口	公重
		D	山岸	重雄
1980年	1	A	須永	敏之
		B	小澤	英子
		C	木村	照公
		D	田口	公慎
	2	A	及川	慎子
		B	上岡	歌子
		C	八藤	輝子
		D	山岸	重雄
	3	A	青木	美樹
		B	野呂	博昭
		C	樋口	翔子
		D	岸根	保夫
1981年	1	A	野呂	博昭
		B	青木	美樹
		C	樋口	翔子
		D	須永	敏之
	2	A	岸根	保夫
		B	小澤	英子
		C	八藤	輝子
		D	田口	公重
	3	A	岡部	徳三
		B	上岡	歌子
		C	熊田	長生
		D	山岸	重雄

年	学年	組	担	任
1982年	1	A	上岡	歌子
		B	林原	幾久
		C	須永	敏之
		D	木村	照博
	2	A	野呂	博昭
		B	八藤	輝子
		C	樋口	翔子
		D	山岸	重雄
	3	A	岸根	重保
		B	小澤	英美
		C	青木	美樹
		D	田口	公樹
1983年	1	A	青木	美樹
		B	林原	幾久
		C	野呂	博昭
		D	須永	敏之
	2	A	岡部	徳三
		B	岸根	保夫
		C	八藤	輝子
		D	小澤	英子
	3	A	山岸	重雄
		B	熊田	長生
		C	樋口	翔子
		D	田口	公樹
1984年	1	A	青木	美樹
		B	須永	敏之
		C	野呂	博昭
		D	越村	由紀子
	2	A	山岸	重雄
		B	岸根	保夫
		C	田口	公輝
		D	八藤	輝子
	3	A	岡部	徳三
		B	小澤	英子
		C	林原	幾久
		D	熊田	長生
1985年	1	A	青木	美樹
		B	小澤	英子
		C	小安	真子
		D	八藤	輝子
	2	A	岡部	徳三
		B	越村	由紀子
		C	須永	敏之
		D	樋口	翔子
	3	A	岸根	保夫
		B	林原	幾久
		C	熊田	長生
		D	野呂	博昭
1986年	1	A	山本	康雄
		B	田口	公敏
		C	須永	敏之
		D	小安	真子
	2	A	山岸	重雄
		B	林原	幾久
		C	熊田	長生
		D	小澤	英子

年	学年	組	担	任
1986年	3	A	岡部	徳三子
		B	樋口	翔子
		C	八藤	輝子
		D	三浦	由紀子
1987年	1	A	樋口	翔子
		B	熊田	長生
		C	野呂	博昭
		D	林原	幾久
	2	A	山本	康雄
		B	小安	真子
		C	田口	公三
		D	岡部	徳三
	3	A	青山	美樹
		B	山岸	重雄
		C	及川	慎子
		D	小澤	英子
1988年	1	A	野呂	博昭
		B	三浦	由紀子
		C	八藤	輝子
		D	田口	公三
	2	A	及川	慎子
		B	樋口	翔子
		C	小安	真子
		D	須永	敏之
	3	A	山本	康雄
		B	青木	美樹
		C	橋本	正昭
		D	熊田	長生
1989年	1	A	青木	美樹
		B	三浦	由紀子
		C	須永	敏之
		D	田口	公三
	2	A	岡部	徳三
		B	野呂	博昭
		C	小澤	英子
		D	熊田	長生
	3	A	林原	幾久
		B	八藤	輝子
		C	及川	慎子
		D	橋本	正昭
1990年	1	A	小安	真子
		B	青木	美樹
		C	樋口	翔子
		D	田口	公三
	2	A	橋本	正昭
		B	林原	幾久
		C	及川	慎子
		D	八藤	輝子
	3	A	岡部	徳三
		B	須永	敏之
		C	小澤	英子
		D	山本	康雄
1991年	1	A	青山	美樹
		B	小安	真子
		C	小澤	英子
		D	八藤	輝子

年	学年	組	担	任	
1991年	2	A	須永	敏之	
		B	野呂	博昭	
		C	橋本	正昭	
		D	三浦	由紀子	
	3	A	熊田	長生	
		B	林原	幾久	
		C	樋口	翔子	
		D	山本	康雄	
	1992年	1	A	及川	慎子
			B	三浦	由紀子
			C	小安	真子
			D	樋口	翔子
2		A	熊田	長生	
		B	林原	幾久	
		C	堀部	ひろみ	
		D	山本	康雄	
3		A	八藤	輝子	
		B	橋本	正昭	
		C	築嶋	麻弥	
		D	野呂	博昭	
1993年	1	A	三浦	由紀子	
		B	築嶋	麻弥	
		C	鈴木	明子	
		D	小安	真子	
	2	A	野呂	博昭	
		B	及川	慎子	
		C	樋口	翔子	
		D	橋本	正昭	
	3	A	熊田	長生	
		B	青木	美樹	
		C	小澤	英子	
		D	山本	康雄	
1994年	1	A	小澤	英子	
		B	青木	美樹	
		C	三浦	由紀子	
		D	山本	康雄	
	2	A	小安	真子	
		B	岩松	美代子	
		C	築嶋	麻弥	
		D	鈴木	明子	
	3	A	橋本	正昭	
		B	樋口	翔子	
		C	野呂	博昭	
		D	八藤	輝子	
1995年	1	A	小安	真子	
		B	野呂	博昭	
		C	八藤	輝子	
		D	青木	美樹	
	2	A	大沼	淳子	
		B	円山	利絵	
		C	小澤	英子	
		D	山本	康雄	
	3	A	鈴木	明子	
		B	三浦	由紀子	
		C	増石	麻弥	
		D	岩松	美代子	

年	学年	組	担	任
1996年	1	A	鈴木	明子
		B	増石	麻弥
		C	増岩	松美代子
		D	青木	美樹
	2	A	福田	泰啓
		B	根本	由紀
		C	八藤	輝子
		D	橋本	正昭
	3	A	小澤	英子
		B	山本	康雄
		C	大沼	淳
		D	円山	利絵
1997年	1	A	三浦	由紀子
		B	山本	康雄
		C	大沼	淳
		D	円山	利絵
	2	A	鈴木	明子
		B	小安	野真
		C	野呂	博昭
		D	岩松	美代子
	3	A	青木	美樹
		B	根本	由紀
		C	福田	泰啓
		D	八藤	輝子
1998年	1	A	根本	由紀
		B	福田	泰啓
		C	小安	野真
		D	八藤	輝子
	2	A	三浦	由紀子
		B	山本	康雄
		C	大沼	淳
		D	円山	利絵
	3	A	鈴木	明子
		B	野呂	博昭
		C	平澤	晴子
		D	岩松	美代子
1999年	1	A	青木	美樹
		B	平澤	晴子
		C	岩松	美代子
		D	山本	康雄
	2	A	福田	泰啓
		B	根本	由紀
		C	鈴木	明子
		D	小安	野真
	3	A	野呂	博昭
		B	大沼	淳
		C	三浦	由紀子
		D	円山	利絵
2000年	1	A	小安	野真
		B	星野	安博
		C	野呂	博昭
		D	大沼	淳
	2	A	円山	利絵
		B	岩松	美代子
		C	平澤	晴子
		D	三浦	由紀子

年	学年	組	担	任
2000年	3	A	根本	由紀
		B	福田	泰啓
		C	青木	美樹
		D	米持	隆之
2001年	1	A	福田	泰啓
		B	山本	康雄
		C	星野	安彦
		D	根本	由紀
	2	A	小安	野真
		B	八藤	輝子
		C	鈴木	明子
		D	円山	利絵
	3	A	野呂	博昭
		B	平澤	晴子
		C	米持	隆之
		D	三浦	由紀子
2002年	1	A	平澤	晴子
		B	野呂	博昭
		C	岩松	美代子
		D	三浦	由紀子
	2	A	山本	康雄
		B	小安	野真
		C	大沼	淳
		D	根本	由紀
	3	A	星野	安彦
		B	鈴木	明子
		C	森山	利絵
		D	円山	利絵
2003年	1	A	円山	利絵
		B	小安	野真
		C	福田	泰啓
		D	森康	彦
	2	A	野呂	博昭
		B	岩松	美代子
		C	平澤	晴子
		D	三浦	由紀子
	3	A	山本	康雄
		B	大沼	淳
		C	星野	安彦
		D	根本	由紀
2004年	1	A	大沼	淳
		B	牛島	正匡
		C	桜井	由紀
		D	根本	由紀
	2	A	小安	野真
		B	三浦	由紀子
		C	山本	康雄
		D	橋本	理枝
	3	A	三宅	康子
		B	平澤	晴子
		C	野呂	博昭
		D	宮部	正志
2005年	1	A	平澤	晴子
		B	小安	野真
		C	野呂	博昭
		D	三宅	康子

年	学年	組	担 任
2005年	2	A	宮 部 正 志
		B	山 本 康 雄
		C	牛 島 正 裕
		D	大 沼 淳 子
	3	A	橋 本 理 枝
		B	円 山 利 絵
		C	米 持 隆 之
		D	青 木 美 樹
2006年	1	A	牛 島 正 裕
		B	磯 部 寿美恵
		C	野 呂 博 昭
	2	A	平 澤 晴 子
		B	円 山 利 絵
		C	三 宅 康 子
		D	小 安 真 志
	3	A	宮 部 正 志
		B	山 本 康 雄
		C	橋 本 理 枝
		D	大 沼 淳 子
	2007年	1	A
B			橋 本 理 枝
C			根 本 由 紀
2		A	宮 部 正 志
		B	磯 部 寿美恵
		C	牛 島 正 裕

年	学年	組	担 任
2007年	3	A	大 沼 淳 子
		B	円 山 利 絵
		C	青 木 美 樹
		D	平 澤 晴 子
2008年	1	A	磯 部 寿美恵
		B	円 山 利 絵
		C	青 木 美 樹
	2	A	山 寄 美 斉
		B	岡 田 理 枝
		C	根 本 由 紀
	3	A	牛 島 正 裕
		B	山 本 康 雄
		C	岩 松 美代子
2009年	1	A	山 本 康 雄
		B	岩 松 美代子
		C	榎 本 美 美 子
	2	A	宮 部 正 志
		B	山 寄 美 斉
		C	磯 部 寿美恵
	3	A	平 澤 晴 子
		B	根 本 由 紀
		C	小笠原 恭 子

※1957年1年担任は、上岡教諭が2クラスを受け持った。

## 中学校担任一覧

年	学年	組	担 任
1949年	1		飯 田 和 子
	2		小笠原 みち子
	3		
1950年	1		小笠原 みち子
	2		松 尾 妙 子
	3		飯 田 和 子
1951年	1		飯 田 和 子
	2		松 尾 妙 子
	3		小笠原 みち子
1952年	1		小笠原 みち子
	2		小野寺 和 子
	3		松 尾 妙 子
1953年	1		飯 田 和 子
	2		松 尾 妙 子
	3		小笠原 みち子
1954年	1		小笠原 みち子
	2		松 尾 妙 子
	3		木 村 照 博
1955年	1		飯 田 和 子
	2		松 尾 妙 子
	3		木 村 照 博
1956年	1		小笠原 みち子
	2		木 村 照 博
	3		松 尾 妙 子
1957年	1		飯 田 和 子
	2		小笠原 みち子
	3		木 村 照 博

年	学年	組	担 任
1958年	1		小笠原 みち子
	2		木 村 照 博
	3		松 尾 妙 子
1959年	1		飯 田 和 子
	2		松 尾 妙 子
	3		木 村 照 博
1960年	1	A	木 村 照 博
		B	塩 見 忠 雄
	2		山 田 美代子
1961年	1		松 尾 妙 子
	1	A	田 地 広 之 子
		B	松 尾 妙 子
1962年	1	A	塩 見 忠 雄
		B	木 村 照 博
	2	A	山 田 美代子
1963年	1	A	吉 田 虎 彦
		B	山 田 美代子
	2	A	田 地 広 之 子
1964年	1	A	宮 田 万 亀 子
		B	塩 見 忠 雄
	2	A	吉 田 虎 彦
1965年	1	A	山 田 美代子
		B	田 地 広 之 子
	2	A	松 尾 妙 子

年	学年	組	担 任
1964年	1	A	松 尾 妙 子
		B	渡 辺 勲 八 子
	2	A	宮 田 万 亀 子
		B	塩 見 忠 雄
	3	A	吉 田 虎 彦
		B	山 田 美 代 子
1965年	1	A	山 田 美 代 子
		B	秋 山 美 奈 子
	2	A	松 尾 妙 子
		B	渡 辺 勲 八 子
	3	A	宮 田 万 亀 子
		B	塩 見 忠 雄
1966年	1	A	宮 田 万 亀 子
		B	塩 見 忠 雄
	2	A	山 田 美 代 子
		B	飛 山 純 子
	3	A	松 尾 妙 子
		B	渡 辺 勲 八 子
1967年	1	A	渡 辺 勲 八 子
		B	塩 野 有 子
	2	A	宮 田 万 亀 子
		B	塩 見 忠 雄
	3	A	山 田 美 代 子
		B	飛 山 純 子
1968年	1	A	渡 辺 勲 八 子
		B	飛 山 純 子
	2	A	松 尾 妙 子
		B	羽 田 喜 久 代
	3	A	宮 田 万 亀 子
		B	塩 見 忠 雄
1969年	1	A	塩 見 忠 雄
		B	塩 野 有 子
	2	A	藤 本 博 子
		B	飛 山 純 子
	3	A	松 尾 妙 子
		B	羽 田 喜 久 代
1970年	1	A	山 田 美 代 子
		B	羽 田 喜 久 代
	2	A	塩 見 忠 雄
		B	塩 野 有 子
	3	A	藤 本 博 子
		B	飛 山 純 子
1971年	1	A	松 尾 妙 子
		B	森 田 武 年
	2	A	山 田 美 代 子
		B	羽 田 喜 久 代
	3	A	塩 見 忠 雄
		B	塩 野 有 子
1972年	1	A	桜 井 匡 之 子
		B	塩 野 有 子
	2	A	松 尾 妙 子
		B	森 田 武 年
	3	A	山 田 美 代 子
		B	羽 田 喜 久 代
1973年	1	A	山 田 美 代 子
		B	五 十 嵐 英 紀
	2	A	桜 井 匡 之 子
		B	塩 野 有 子

年	学年	組	担 任
1973年	3	A	森 田 武 年
		B	松 尾 妙 子
1974年	1	A	宮 重 英 子
		B	羽 田 喜 久 代
	2	A	山 田 美 代 子
		B	五 十 嵐 英 紀
	3	A	桜 井 匡 之 子
		B	塩 野 有 子
1975年	1	A	羽 田 喜 久 代
		B	桜 井 匡 之 子
	2	A	塩 見 忠 雄
		B	宮 重 英 子
	3	A	山 田 美 代 子
		B	五 十 嵐 英 紀
1976年	1	A	塩 野 有 子
		B	笠 原 光 史
	2	A	桜 井 匡 之 子
		B	羽 田 喜 久 代
	3	A	塩 見 忠 雄
		B	宮 重 英 子
1977年	1	A	五 十 嵐 英 紀
		B	羽 田 喜 久 代
	2	A	桜 井 匡 之 子
		B	山 田 美 代 子
	3	A	塩 野 有 子
		B	森 田 武 年
1978年	1	A	塩 見 忠 雄
		B	田 村 尚 子
	2	A	山 田 美 代 子
		B	長 谷 川 ぶ き 子
	3	A	羽 田 喜 久 代
		B	五 十 嵐 英 紀
1979年	1	A	塩 見 忠 雄
		B	田 村 尚 子
	2	A	五 十 嵐 英 紀
		B	塩 野 有 子
	3	A	宮 重 英 子
		B	松 尾 妙 子
1980年	1	A	塩 見 忠 雄
		B	宮 重 英 子
	2	A	桜 井 匡 之 子
		B	羽 田 喜 久 代
	3	A	五 十 嵐 英 紀
		B	塩 野 有 子
1981年	1	A	塩 見 忠 雄
		B	塩 野 有 子
	2	A	五 十 嵐 英 紀
		B	山 田 美 代 子
	3	A	桜 井 匡 之 子
		B	羽 田 喜 久 代
1982年	1	A	桜 井 匡 之 子
		B	宮 重 英 子
	2	A	森 田 武 年
		B	田 村 尚 子
	3	A	五 十 嵐 英 紀
		B	山 田 美 代 子
1983年	1	A	松 尾 妙 子
		B	宮 重 英 子



年	学年	組	担 任
1983年	2	A	羽田喜久代
		B	塩野有子
	3	A	桜井匡之
B		長谷川ふき子	
1984年	1	A	篠木秀一
		B	宮重英子
	2	A	五十嵐英紀
		B	山田美代子
	3	A	羽田喜久代
		B	塩野有子
1985年	1	A	桜井匡之
		B	羽田喜久代
	2	A	木崎充裕
		B	塩野有子
	3	A	五十嵐英紀
		B	山田美代子
1986年	1	A	牛島正裕
		B	山田美代子
	2	A	篠木秀一
		B	宮重英子
	3	A	木崎充裕
		B	塩野有子
1987年	1	A	桜井匡之
		B	木崎充裕
	2	A	五十嵐英紀
		B	羽田喜久代
	3	A	篠木秀一
		B	宮重英子
1988年	1	A	桜井匡之
		B	塩野有子
	2	A	牛島正裕
		B	山田美代子
	3	A	五十嵐英紀
		B	羽田喜久代
1989年	1	A	篠木秀一
		B	新井恭子
	2	A	宮重英子
		B	木崎充裕
	3	A	牛島正裕
		B	山田美代子
1990年	1	A	新井恭子
		B	羽田喜久代
	2	A	五十嵐英紀
		B	塩野有子
	3	A	宮重英子
		B	木崎充裕
1991年	1	A	牛島正裕
		B	羽田喜久代
	2	A	篠木秀一
		B	三宅康子
	3	A	五十嵐英紀
		B	塩野有子
1992年	1	A	木崎充裕
		B	宮重英子
	2	A	五十嵐英紀
		B	小笠原恭子
	3	A	篠木秀一
		B	三宅康子

年	学年	組	担 任
1993年	1	A	牛島正裕
		B	三宅康子
	2	A	木崎充裕
		B	塩野有子
	3	A	五十嵐英紀
		B	小笠原恭子
1994年	1	A	桜井匡之
		B	三宅康子
	2	A	小笠原恭子
		B	篠木秀一
	3	A	木崎充裕
		B	塩野有子
1995年	1	A	桜井匡之
		B	牛島正裕
	2	A	五十嵐英紀
		B	塩野有子
	3	A	小笠原恭子
		B	篠木秀一
1996年	1	A	篠木秀一
		B	廣田晶子
	2	A	木崎充裕
		B	三宅康子
	3	A	五十嵐英紀
		B	塩野有子
1997年	1	A	廣田晶子
		B	小笠原恭子
	2	A	牛島正裕
		B	桜井匡之
	3	A	木崎充裕
		B	三宅康子
1998年	1	A	篠木秀一
		B	鈴木毛子
	2	A	木崎充裕
		B	三宅康子
	3	A	牛島正裕
		B	桜井匡之
1999年	1	A	篠木秀一
		B	小笠原恭子
	2	A	羽田喜久代
		B	廣田晶子
	3	A	木崎充裕
		B	三宅康子
2000年	1	A	牛島正裕
		B	小笠原恭子
	2	A	鈴木毛子
		B	桜井匡之
	3	A	羽田喜久代
		B	廣田晶子
2001年	1	A	牛島正裕
		B	廣田晶子
	2	A	五十嵐英紀
		B	三宅康子
	3	A	鈴木毛子
		B	桜井匡之
2002年	1	A	桜井匡之
		B	鈴木毛子
	2	A	木崎充裕
		B	小笠原恭子

年	学年	組	担 任
2002年	3	A	五十嵐 英 紀
		B	三宅 康 子
2003年	1	A	牛島 正 裕
		B	三宅 康 子
	2	A	廣田 晶 子
		B	小向 宏 明
	3	A	木崎 充 裕
		B	小笠原 恭 子
2004年	1	A	鬼塚 貴 元
		B	小笠原 恭 子
	2	A	鈴木 明 子
		B	鈴木 毛 子
	3	A	廣田 晶 子
		B	小向 宏 明
2005年	1	A	篠木 秀 一
		B	岩松 美代子
	2	A	廣田 晶 子
		B	鬼塚 貴 元
	3	A	小向 宏 明
		B	小笠原 恭 子
2006年	1	A	小向 宏 明
		B	岩松 美代子

年	学年	組	担 任
2006年	2	A	篠木 秀 一
		B	小笠原 恭 子
	3	A	廣田 晶 子
		B	鬼塚 貴 元
2007年	1	A	矢野 恒一郎
		B	小向 宏 明
	2	A	岩松 美代子
		B	星野 安 彦
	3	A	篠木 秀 一
		B	小笠原 恭 子
2008年	1	A	富田 美智子
		B	鬼塚 貴 元
	2	A	矢野 恒一郎
		B	小向 宏 明
	3	A	星野 安 彦
		B	小安 真
2009年	1	A	篠木 秀 一
		B	村田 ひろみ
	2	A	富田 美智子
		B	竹内 千 春
	3	A	矢野 恒一郎
		B	小向 宏 明

※1949年は、3学年3クラスを飯田、小笠原両教諭で受け持った。

## 普通科担任一覧

年	学年	組	担 任
1963年	1	A	南川 貞 治
		B	南川 忠 男
1964年	1	A	肥後 悦 子
		B	野口 仁 子
	2	A	南川 貞 治
		B	南川 忠 男
1965年	1	A	上村 浩 幸
		B	萱嶋 泉
	2	A	樋口 厚 子
		B	野口 仁 子
	3	A	南川 貞 治
		B	南川 忠 男
1966年	1	A	山田 帥 音
		B	藤井 初 音
	2	A	萱嶋 泉 子
		B	桐村 亘 子
	3	A	樋口 厚 男
		B	南川 忠 男
1967年	1	A	南川 忠 男
		B	藤井 初 音
	2	A	山田 帥 音
		B	樋口 厚 子
	3	A	上村 浩 幸 子
		B	桐村 亘 子
1968年	1	A	上村 浩 幸 子
		B	岩下 淳 介
	2	A	南川 忠 男
		B	藤井 初 音

年	学年	組	担 任
1968年	3	A	山田 帥 音
		B	樋口 厚 子
1969年	1	A	桐村 亘 子
		B	佐藤 恵美子
	2	A	上村 浩 幸 子
		B	岩下 淳 介
	3	A	南川 忠 男
		B	藤井 初 音
1970年	1	A	樋口 厚 子
		B	藤井 初 音
	2	A	桐村 亘 子
		B	佐藤 恵美子
	3	A	上村 浩 幸 子
		B	岩下 淳 介
1971年	1	A	南川 忠 男
		B	林富 美 恵 厚
	2	A	樋口 厚 子
		B	釜田 初 音
	3	A	桐村 亘 子
		B	佐藤 恵美子
1972年	1	A	桐村 亘 子
		B	山田 帥 音
	2	A	林富 美 恵 厚
		B	南川 忠 男
	3	A	樋口 厚 子
		B	釜田 初 音
1973年	1	A	上村 浩 幸 子
		B	佐藤 恵美子

年	学年	組	担 任
1973年	2	A	山 田 帥
		B	桐 村 亘 子
	3	A	林 富美惠
		B	南 條 忠 男
1974年	1	A	樋 口 厚
		B	上 原 富美惠
	2	A	佐 藤 恵美子
		B	上 村 浩 幸
	3	A	山 田 帥
		B	桐 村 亘 子
1975年	1	A	南 條 忠 男
		B	釜 田 初 音
	2	A	樋 口 厚
		B	上 原 富美惠
	3	A	佐 藤 恵美子
		B	上 村 浩 幸
1976年	1	A	山 田 帥
		B	桐 村 亘 子
	2	A	南 條 忠 男
		B	佐 藤 恵美子
	3	A	樋 口 厚
		B	上 原 富美惠
1977年	1	A	釜 田 初 音
		B	関 厚
	2	A	上 村 浩 幸
		B	桐 村 亘 子
	3	A	南 條 忠 男
		B	佐 藤 恵美子
1978年	1	A	上 原 富美惠
		B	新 海 明
	2	A	釜 田 初 音
		B	関 厚
	3	A	上 村 浩 幸
		B	桐 村 亘 子
1979年	1	A	南 條 忠 男
		B	桐 村 亘 子
	2	A	上 原 富美惠
		B	新 海 明
	3	A	釜 田 初 音
		B	関 厚
1980年	1	A	上 村 浩 幸
		B	佐 藤 恵美子
	2	A	樋 口 厚
		B	桐 村 亘 子
	3	A	上 原 富美惠
		B	新 海 明
1981年	1	A	釜 田 初 音
		B	新 海 明
	2	A	佐 藤 恵美子
		B	関 厚
	3	A	樋 口 厚
		B	桐 村 亘 子
1982年	1	A	樋 口 厚
		B	山 田 帥
	2	A	新 海 明
		B	上 原 富美惠

年	学年	組	担 任
1982年	3	A	佐 藤 恵美子
		B	関 厚
1983年	1	A	南 條 忠 男
		B	村 田 ひろみ
	2	A	樋 口 厚
		B	佐 藤 恵美子
	3	A	新 海 明
		B	上 原 富美惠
1984年	1	A	桐 村 亘 子
		B	宮 部 正 志
	2	A	南 條 忠 男
		B	村 田 ひろみ
	3	A	樋 口 厚
		B	佐 藤 恵美子
1985年	1	A	上 原 富美惠
		B	関 厚
	2	A	桐 村 亘 子
		B	宮 部 正 志
	3	A	村 田 ひろみ
		B	南 條 忠 男
1986年	1	A	新 海 明
		B	佐 藤 恵美子
	2	A	関 厚
		B	上 原 富美惠
	3	A	桐 村 亘 子
		B	宮 部 正 志
1987年	1	A	樋 口 厚
		B	村 田 ひろみ
	2	A	新 海 明
		B	佐 藤 恵美子
	3	A	関 厚
		B	上 原 富美惠
1988年	1	A	南 條 忠 男
		B	宮 部 正 志
	2	A	樋 口 厚
		B	村 田 ひろみ
	3	A	佐 藤 恵美子
		B	関 厚
1989年	1	A	桐 村 亘 子
		B	上 原 富美惠
	2	A	南 條 忠 男
		B	宮 部 正 志
	3	A	樋 口 厚
		B	村 田 ひろみ
1990年	1	A	村 田 ひろみ
		B	鬼 塚 貴 元
	2	A	桐 村 亘 子
		B	上 原 富美惠
	3	A	関 厚
		B	宮 部 正 志
1991年	1	A	佐 藤 恵美子
		B	甲 田 直 弘
	2	A	村 田 ひろみ
		B	鬼 塚 貴 元
	3	A	桐 村 亘 子
		B	上 原 富美惠

年	学年	組	担 任
1992年	1	A	関 厚
		B	秋 場 健 志
	2	A	佐 藤 恵美子
		B	甲 田 直 弘
	3	A	村 田 ひろみ
		B	鬼 塚 貴 元
1993年	1	A	宮 部 正 志
		B	鬼 塚 貴 元
	2	A	関 厚
		B	秋 場 健 志
	3	A	佐 藤 恵美子
		B	甲 田 直 弘
1994年	1	A	上 原 富美恵
		B	甲 田 直 弘
	2	A	宮 部 正 志
		B	鬼 塚 貴 元
	3	A	関 厚
		B	秋 場 健 志
1995年	1	A	関 厚
		B	村 田 ひろみ
	2	A	上 原 富美恵
		B	甲 田 直 弘
	3	A	宮 部 正 志
		B	鬼 塚 貴 元
1996年	1	A	桐 村 亘 子
		B	秋 場 健 志
	2	A	関 厚
		B	村 田 ひろみ
	3	A	上 原 富美恵
		B	甲 田 直 弘
1997年	1	A	桐 村 亘 子
		B	鬼 塚 貴 元
	2	A	佐 藤 恵美子
		B	秋 場 健 志
	3	A	村 田 ひろみ
		B	上 原 富美恵
1998年	1	A	鬼 塚 貴 元
		B	大内田 光 穂
	2	A	桐 村 亘 子
		B	甲 田 直 弘
	3	A	秋 場 健 志
		B	佐 藤 恵美子
1999年	1	A	宮 部 正 志
		B	大内田 光 穂
	2	A	村 田 ひろみ
		B	荒 木 泰 俊
	3	A	桐 村 亘 子
		B	甲 田 直 弘
2000年	1	A	甲 田 直 弘
		B	秋 場 健 志
	2	A	鬼 塚 貴 元
		B	大内田 光 穂
	3	A	村 田 ひろみ
		B	宮 部 正 志
2001年	1	A	秋 場 健 志
		B	入内嶋 美 子

年	学年	組	担 任
2001年	2	A	宮 部 正 志
		B	村 田 ひろみ
	3	A	鬼 塚 貴 元
		B	大内田 光 穂
2002年	1	A	甲 田 直 弘
		B	秋 場 健 志
	2	A	鬼 塚 貴 元
		B	榎 本 美 子
	3	A	宮 部 正 志
		B	村 田 ひろみ
2003年	1	A	大内田 光 穂
		B	甲 田 直 弘
	2	A	甲 田 直 弘
		B	秋 場 健 志
	3	A	鬼 塚 貴 元
		B	榎 本 美 子
2004年	1	A	木 崎 充 裕
		B	森 康 彦
	2	A	秋 場 健 志
		B	甲 田 直 弘
	3	A	甲 田 直 弘
		B	福 田 泰 啓
2005年	1	A	森 康 彦
		B	甲 田 直 弘
	2	A	木 崎 充 裕
		B	山 崎 齊 一
	3	A	秋 場 健 志
		B	甲 田 直 弘
2006年	1	A	甲 田 直 弘
		B	榎 本 美 子
	2	A	森 康 彦
		B	秋 場 健 志
	3	A	木 崎 充 裕
		B	山 崎 齊 一
2007年	1	A	村 田 ひろみ
		B	山 崎 齊 一
	2	A	福 田 泰 啓
		B	福 木 崎 充 裕
	3	A	森 康 彦
		B	秋 場 健 志
2008年	1	A	秋 場 健 志
		B	大 沼 淳
	2	A	森 康 彦
		B	榎 本 美 子
	3	A	福 田 泰 啓
		B	福 木 崎 充 裕
2009年	1	A	福 田 泰 啓
		B	福 田 泰 啓
	2	A	福 田 泰 啓
		B	秋 場 健 志
	3	A	伊 藤 久 美 子
		B	森 康 彦

## くにたち音楽会の記録

2009年に57回目を迎える「くにたち音楽会」は、学校にとって歴史ある重要な音楽会である。

現在はPTA主催「くにたち音楽会」であるが、おそらく、第1回は「くにたち音楽研究発表演奏会」であったと思われる。また、杉並公会堂に会場を移してからは、「すぎなみ音楽会」という愛称で呼ばれることもあったようである。

残念ながら全容把握には至らなかったが、現存する写真、プログラム、卒業アルバム、その他の記録などから表の通りとなった。

なお、普通科の出演は、第21回から、第53回までである。それは新普通科のカリキュラム改編に伴って、合唱の授業がなくなったことに依っている。普通科のエピソードとして、家庭科の被服実習で縫い上げた、黒のロングスカートを着用して出演していた時期があったことを挙げておこう。

1988年(S.63)からは演奏会の記録映像(ビデオ・テープ、DVD)を残して図書館に保存し、現在に至っている。



小笠原みち子先生による独唱（富田静子氏蔵）

西暦	元号	回数	会場	開催日	備考	西暦	元号	回数	会場	開催日	備考
1949	S.24					1980	55	28	杉並公会堂	12月11日	
1950	25					1981	56	29	立川市市民会館	12月18日	
1951	26					1982	57	30	立川市市民会館	12月14日	
1952	27					1983	58	31	立川市市民会館	12月16日	
1953	28	1	(共立講堂)	(1月20日)	「くにたち音楽研究発表演奏会」	1984	59	32	立川市市民会館	12月18日	
1954	29	2	(日本青年館)			1985	60	33	立川市市民会館	12月17日	
1955	30	3	日本青年館	1月30日	「PTA主催音楽会」	1986	61	34	立川市市民会館	12月17日	
1956	31	4	日本青年館			1987	62	35	立川市市民会館	12月17日	
1957	32	5	杉並公会堂	1月20日		1988	63	36	立川市市民会館	12月16日	
1958	33	6	杉並公会堂	12月14日	「中高合同音楽会」	1989	S.64 H.元	37	立川市市民会館	12月15日	
1959	34	7	杉並公会堂			1990	2	38	立川市市民会館	12月15日	
1960	35	8	杉並公会堂	12月17日		1991	3	39	立川市市民会館	12月17日	
1961	36	9	杉並公会堂	12月17日		1992	4	40	立川市市民会館	12月17日	
1962	37	10	杉並公会堂	12月15日		1993	5	41	立川市市民会館	12月17日	
1963	38	11	杉並公会堂	12月18日		1994	6	42	立川市市民会館	12月17日	
1964	39	12	杉並公会堂	12月16日		1995	7	43	アミューたちかわ	12月15,16日	独奏・独唱と合唱を分離、2日制に
1965	40	13	杉並公会堂	10月29日		1996	8	44	アミューたちかわ	12月12,13日	
1966	41	14	杉並公会堂			1997	9	45	アミューたちかわ	12月16,17日	
1967	42	15	杉並公会堂			1998	10	46	アミューたちかわ	12月16,17日	
1968	43	16	杉並公会堂	11月		1999	11	47	アミューたちかわ	12月16,17日	「創立50周年記念くにたち音楽会」
1969	44	17	杉並公会堂			2000	12	48	アミューたちかわ	12月14,15日	
1970	45	18	杉並公会堂	12月18日		2001	13	49	アミューたちかわ	12月13,14日	
1971	46	19	杉並公会堂			2002	14	50	アミューたちかわ	12月12,13日	
1972	47	20	杉並公会堂	12月		2003	15	51	アミューたちかわ	12月11,12日	
1973	48	21	杉並公会堂	12月18日	普通科、初出演(~第53回まで)	2004	16	52	大学講堂 アミューたちかわ	12月11,14日	
1974	49	22	杉並公会堂	12月18日		2005	17	53	大学講堂 アミューたちかわ	12月10,16日	
1975	50	23	杉並公会堂	12月16日		2006	18	54	大学講堂 アミューたちかわ	12月14,15日	
1976	51	24	杉並公会堂	12月15日		2007	19	55	大学講堂 アミューたちかわ	12月14,15日	
1977	52	25	杉並公会堂	12月9日		2008	20	56	大学講堂 アミューたちかわ	12月15,16日	
1978	53	26	杉並公会堂	12月8日		2009	21	57	大学講堂	12月15,16日	
1979	54	27	杉並公会堂	12月13日							

注：第1回、第2回については、裏付けを取るに至らなかった。

# 旅 行 の 記 録

中学校

実施年		1年 旅行	2年 夏の学校	3年 修学旅行
1949	S.24			
1950	25			
1951	26			
1952	27			
1953	28			
1954	29			
1955	30			
1956	31			
1957	32			
1958	33			
1959	34			
1960	35			
1961	36			
1962	37			
1963	38			
1964	39			
1965	40			
1966	41			
1967	42			
1968	43			
1969	44			
1970	45			
1971	46		霧ヶ峰(2,3年合同)	
1972	47		奥日光(2,3年合同)	四国
1973	48	浜松	木曾駒	〃
1974	49	〃	木曾駒	東北
1975	50	〃	木曾駒	〃
1976	51	千葉	木曾駒	〃
1977	52	浜松	木曾駒	〃
1978	53	〃	木曾駒	〃
1979	54	〃	木曾駒	〃
1980	55	〃	木曾駒	〃
1981	56	〃	木曾駒	〃
1982	57	〃	福島	〃
1983	58	〃	〃	〃
1984	59	〃	木曾駒	〃
1985	60	〃	木曾駒	〃
1986	61	〃	木曾駒	〃
1987	62	〃	木曾駒	〃
1988	63	〃	木曾駒	〃
1989	H.元	〃	木曾駒	〃
1990	2	〃	木曾駒	〃
1991	3	〃	木曾駒	〃
1992	4	〃	木曾駒	〃
1993	5	〃	木曾駒	〃
1994	6	〃	木曾駒	〃
1995	7	〃	木曾駒	〃
1996	8	〃	木曾駒	山口・広島
1997	9	〃	木曾駒	〃
1998	10	〃	福島	北海道
1999	11	〃	木曾駒	〃
2000	12	〃	木曾駒	〃
2001	13	〃	木曾駒	〃
2002	14	〃	木曾駒	〃
2003	15	〃	木曾駒	〃
2004	16	〃	木曾駒	〃
2005	17	〃	猿ヶ京	〃
2006	18	〃	〃	〃
2007	19	〃	日光	〃
2008	20	〃	大島	〃
2009	21	群馬(日帰り)	群馬	〃

※ 2007年から2年の旅行は11月に実施している



## 編集後記

国立音楽大学附属中学校・高等学校は、本年創立60周年を迎えました。振り返ってみれば、創立以来いろいろな事がありましたが、特に最近の20年は変化が大きかったように思います。

今回の記念誌をどのような形にするのが一番良いか、委員会で話し合った結果、まず始めに最近の出来事にスポットを当てることになりました。「新制普通科の誕生」「3号館建設」など、学校として大きく変わった部分は、しっかり残しておきたいと思ったからです。さらに、60年分の資料として、わかるところは可能な限り調べてみようということになり、多くの方々から貴重な情報をいただきました。それを、時代順にまとめたのが、今回の記念誌です。

50周年記念誌作成の時も感じましたが、とにかくきちんとした資料が学校にはほとんど残っていないので、今回も同窓会や現・旧先生方のご協力なくしては、記念誌はできなかつたと思うくらいです。

もちろん、すべてを完全に調べられたわけではなく、最後までわからなかつたところも多々あります。お気づきの点など、編纂委員までお知らせいただければ幸いです。

最後になりましたが、宮地理事長をはじめ、原稿をお寄せいただいた先生方、卒業生のみなさま、座談会にご出席いただいた先生方、貴重な資料を提供してくださいました先生方、卒業生のみなさま、写真を提供してくださいました恵雅堂出版、そして、立川印刷所、そのほか多くの方々のご援助、ご協力に、編纂委員一同、感謝申し上げます。

尚、不慣れな者ばかりの編集で、多くの不備などがあると思いますがお許してください。

また、この記念誌に対してのご意見、ご指摘などをいただければありがたく思います。

60周年記念誌編纂委員長：根本 由紀

60周年記念誌編纂委員：秋場 健志

磯部寿美恵

伊藤久美子

岩松美代子

篠木 秀一

根本 由紀

福田 泰啓

村田ひろみ

和田多美子



資料提供・協力者一覧

井上上子氏  
大友薫子氏  
杉並区役所(杉並公会堂)  
高木義弥氏  
富田静子氏

国立音楽大学附属高等学校同窓会評議員

国立音楽大学別科調律専修  
国立音楽大学業務課  
国立音楽大学附属図書館

写真協力／恵雅堂出版

**国立音楽大学附属中学校・附属高等学校  
創立六十周年記念誌  
1949－2009**

2009年10月1日発行

編集／発行 国立音楽大学附属中学校  
国立音楽大学附属高等学校  
60周年記念誌編纂委員会

印刷 株式会社 立川印刷所

## 創立六十周年記念誌 正誤表

下記の通りに訂正します。

1. 71ページ右下の写真説明「新図書館視聴覚室」→正しくは「新図書館視聴室」
2. 76ページの表「生徒数一覧」を、下記の表に差し替えます。

### 生 徒 数 一 覧

西暦	元号	中学総数	男子	音楽科総数	男子	普通科総数	男子	総合計	西暦	元号	中学総数	男子	音楽科総数	男子	普通科総数	男子	総合計
1949年	S.24	47	9	180	85			227	1980年	S.55	256	7	512	16	243		1011
1950年	25	72	9	205	85			277	1981年	56	254	7	515	20	243		1012
1951年	26	69	11	207	70			276	1982年	57	252	3	507	21	244		1003
1952年	27	88	11	206	65			294	1983年	58	255	1	504	18	242		1001
1953年	28	90	14	198	45			288	1984年	59	258	1	501	17	242		1001
1954年	29	100	11	195	36			295	1985年	60	256	0	508	12	245		1009
1955年	30	103	11	188	27			291	1986年	61	257	4	505	16	243		1005
1956年	31	117	12	182	34			299	1987年	62	257	6	468	15	244		969
1957年	32	128	10	207	35			335	1988年	63	258	12	511	12	241		1010
1958年	33	124	5	245	41			369	1989年	S.64 H.元	258	11	517	13	245		1020
1959年	34	127	0	279	39			406	1990年	2	256	10	520	11	244		1020
1960年	35	161	2	284	34			445	1991年	3	257	8	518	15	244		1019
1961年	36	171	4	269	23			440	1992年	4	257	7	512	17	244		1013
1962年	37	248	9	277	23			525	1993年	5	257	6	507	17	244		1008
1963年	38	261	8	347	22	75		683	1994年	6	257	7	500	16	245		1002
1964年	39	253	5	436	36	156		845	1995年	7	257	9	497	12	246		1000
1965年	40	247	9	498	38	232		977	1996年	8	253	11	489	10	242		984
1966年	41	242	9	491	36	216		949	1997年	9	255	8	477	13	227		959
1967年	42	243	12	481	23	225		949	1998年	10	254	7	473	15	212		939
1968年	43	242	5	484	33	212		938	1999年	11	254	12	483	22	216		953
1969年	44	251	11	491	33	229		971	2000年	12	254	12	471	22	202		927
1970年	45	262	11	498	28	230		990	2001年	13	252	13	462	28	164		878
1971年	46	266	12	501	28	240		1007	2002年	14	251	13	443	32	129		823
1972年	47	260	7	509	34	229		998	2003年	15	248	13	440	28	107		795
1973年	48	254	5	513	33	231		998	2004年	16	252	18	418	26	122	4	792
1974年	49	257	6	520	36	232		1009	2005年	17	243	13	383	22	126	12	752
1975年	50	257	4	524	25	240		1021	2006年	18	246	17	358	23	136	21	740
1976年	51	264	3	525	18	237		1026	2007年	19	239	12	336	24	140	23	715
1977年	52	258	3	513	25	237		1008	2008年	20	221	12	332	24	136	26	689
1978年	53	258	4	509	22	243		1010	2009年	21	224	15	326	26	147	29	697
1979年	54	255	9	510	22	242		1007									

※1949年(S.24)から1954年(S.29)までは、事務室保存手書き台帳に基づく。

※1955年(S.30)から1988年(S.63)までは、法人印刷名簿に基づく。

※1989年(S.64/H元)以降、生徒数・担任一覧表(各年度4月1日現在)に基づく。

